

川柳塔



昭和十一年一月九日創刊
平成二十一年十二月一日発行
（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九九一号

白川協加盟

No. 991

十二月号

寒中見舞募集

○本誌平成22年2月号掲載

○締切 12月23日

川柳塔社事務所宛

平成22年大会予告

日川協鳥取大会

平成22年6月13日(日)

鳥取県立県民文化センター

第16回川柳塔まつり(一〇〇〇号記念)

平成22年10月9日(土)

アウイーナ大阪

国民文化祭岡山大会

平成22年10月31日(日)

久米南町文化センター

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

時の流れ

河内 天笑

二〇〇九年のカレンダーもあと一枚を残すのみ、昨年の今ごろは八十五周年大会への準備に余年のない日日だったが、それも既に過去のものと時は刻々と進むばかりである。この一年の早さに集約される如く、大正十三年に川柳雑誌社が立ち上げられてからの八十五年も、時は休まず流れつづけた筈である。この道のりの一年一年にはとてつもないくらい多くの出来事が詰まっていて、それと思うと、よくぞここまで継続出来たものだという驚きと、塔を支えつづけて下さった皆様様の大きな熱意にただただ頭の下がる思いである。第二次世界大戦が始まってちょうど二年を経過した昭和十八年十二月（大正十三年から約満二十年） 諸般の事情により「川柳雑誌」は終刊の止むなき決断に迫られたのである。

終刊の辞

戦局は一寸刻みに緊迫して行く。雑誌なんかにはぶら下がっている時ではない。文化は第二陣だ。雑誌なんかは深く投げ出して、直ちに戦闘配置につくべきである。それこそ我々に課せられた重大使命であると観ずる。ここに本誌は自発的に巻を閉じることにした。

みたみわれ 大君にすべてを捧げまつらん 路郎

八十五年の中でも一番大きな出来事となった川柳雑誌の終刊。これより二十年八月十五日の敗戦を挟んだ約二年半の空白を経て、昭和二十一年八月によもやの復刊が現実のものとなるが、昭和十八年当時の作品からアトランダムに背景の伝わり易いものを選んでみた。終刊に至ったすがとされた。

川雉も目爆輝く二十年

法善寺鼻をつままれそうに抜け

さすが時局熱海の夜は月計り

橋本 緑雨
須崎 豆秋
正本 水客

弟に辞書を譲って学徒起つ
徴用の後ろ姿に張りを見せ
有難き国旗を出す日続くなり
大阪の話が咲いたほりごたつ
病む馬がかすかに聞いた進軍歌
日の丸へまづ学長は筆をとり
出勤のあとはモンペのかひがひし
アツツ島玉碎
ひとりづつふるさとを持つ兵散りし
ガンジー反英抗争の断食（二旬）
三億の自由へ押しの一手なり
世界歴史ガンジーが胃に蓋をする
窓際の別れ戦地へ行くような
収獲の鎌をかざして兵送る
笑ふにも父母嫁の順がある
赤樺凜凜しい人と見直され
妻の手に遺髪を渡す瞳が笑ひ
應召はまだかまだかと呑仲間
盛り切りのおいてけぼりの宿の朝
皮ゲートルのお方へ確と敬禮す
防毒マスクの練習中電話鳴る
髭そる間女の愚痴を聞いてやり

黒川 紫香
菊澤小松園
清水白柳子
小川 恒明
濱田久米雄
川村 好郎
水谷 鮎美

松本 石曾根民郎

名昌屋
京都 麻生 路郎
丸尾 豆秋
吉田 潮花
阿萬 萬的
西尾 葉
上田 翠光

今治 武部 香林
戸倉 晋天
奥村 丹路
北川 春葉
月原 宵明

おぼちゃんのチャリンコ信号無視しとる 天笑
ただいまと言うたら猫は目を逸らし
よう冷えますなあと猫もぐりこみ
おさけ止めなさいと女医に脅される
心臓のおかげ煙草は止められた



座右の句

人間に逢いたくなくて歩く道

(岳人)

私の句

墓洗うさつと涼しい風が立つ

伊達郁夫

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「湖西・鹿ヶ瀬」

■巻頭言 時の流れ	河内天笑	(1)
わたしの名句集	遠山可住	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (60)	木津川 計	(46)
麻生路郎句抄		(47)
自選集		(48)
温故知新		(51)
水煙抄	川上大輪選	(52)
檸檬抄「おさめる」	牛尾緑良・高田美代子共選	(71)
愛染帖	新家完司選	(74)

わたしの名句集

遠山可住

昭和三〇年、川柳入門。人生一筋の道ならぬ二つの道というのが私の持論。一つは職業であり、もう一つが道楽(趣味)である。

ふと出会った川柳が私のもう一つの道になった。川柳はおもしろい、その面白さが多くの人達とふれ合う職業の中で、うん、うんと納得させられて、後期高齢者の今日までの五十年を支えてくれる心の糧となってきた。

路郎師を先頭に多くの先人に学ぶ川柳雑誌から、私の好きな句を「名句集」としてノートに整理して来た。一冊で終ってしまったがおよそ二、〇〇〇の句が、作者を偲ぶお名前と共に私の大切な宝物となっている。勿論現在の川柳とは句想も句調も違うけれども、これが基調となつての「川柳塔」であることは間違いない。そのノートの始めに私はこう書いている。

「川柳」というものの面白さを充分に味わうために、発表された名句の中から私の好きな句をえらび出して

「僅 か」……………小澤幸泉選……………(78)
 一路集「まじめ」……………岸本宏章選……………(80)
 「カタログ」……………小川てるみ選……………(81)

初歩教室「くどい」……………鈴木公弘……………(82)
 秀句鑑賞「同人吟」……………井丸昌紀……………(84)

「水煙抄」……………佐藤古拙……………(86)
 故八田敏さん・故南原正和さん遺句抄……………(87)

十一月本社句会……………(88)
 各地柳壇(佳句地十選/山田耕治)……………(92)

柳界展望……………(108)
 十二月各地句会案内……………(110)

■編集後記(ひとこと/川崎ひかり)……………(112)
 尚士・光久・富美子……………

座右の句

仏壇に座れば小さき我が心

私の句

子を叱る母も一緒に泣いている

杉本義昭

(宵門)

自分の進む伴侶とも師ともしてゆこう

(一九五九秋)

およそ二〇〇〇句のはじまりである。

嘘言えぬのに仲人を頼みに来

誰に聞いても知らんくという鉄

長靴の中で一匹蚊が暮し

神様を鈴で起して頼んどき

美しきに如かず子の鼻つまんどき

異議なしと片づけといて酒にする

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

お釈迦様弟子のうそには呆れ果て

人生の裏を小使いさんに聞き

敷かれてはせんかと母がのぞきに来

命まで賭けた女でこれかいな

家業継ぐこと先生に惜しがられ

夕映えへわれ恋をすと叫びたく

口笛で男世帯のめしが出来

蟬とった一人へみんなついてゆき

葱畑思ひく／＼に折れている

白粉の下は光陰矢の如し

姑とそもそも揉める味の素

入れ変える心を女中たんと持ち

どこで息づくのか母のお念佛

二年生一年生をのぞきに來

お年玉貰えば子供去ぬといひ

湖山 豆秋 無鬼 丹路 七面山 路郎 三面子 奇童 一鶴 梅里 柳児 英子 潮花 大夢子 郊村 史城 久流美 貴志子 眞理子 法泉子 愛論 白星



河内天笑選

鳥取市 近藤佳子

夢でしか逢えない母はまだ気丈

曼珠沙華力いっぱい天に咲く

昼寝から覚めてお婆をさがす孫

野仏に会う彼岸花掻き分けて

浮雲と一期一会の無駄はなし

我慢我慢神のお告げは手厳しい

神戸市 両川無限

献血がすんで大人の仲間入り

流れ星追って少年鳥になる

国も子も老いの面倒見たがらぬ

人間に恋をするのはもう止めた

駄菓子屋の夢はコンビニでは買えぬ

ほどほどにしとく妻への口答え

奈良市 天正千梢

嘘言わずらくに暮らしているんだよ

ひとさまが照らしてくれているおかげ

正論を吐く話には艶があり

それが魅力なんだ偉そうにしない

杜甫李白読んで隠居の小半日

ななめから見ればいいとこたんとあり

鳥取市 倉益一瑤

坊さんがまるい話をしてくれる

セールの弁にしばらく聞き惚れる

ひまわりが御陀仏してる秋の空

感電をしそうで見ない彼岸花

踊ってるのか笑わせるのか安来節

義理人情担いで肩がこって来る

八尾市 村上ミツ子

秋の贅沢新米を買いました

老姉妹京都裏寺墓参り

だまし絵に騙されにくい美術館

いつからか誰も追いかけてはこない

幸せの貯えもあるいい余生

いわし雲風の便りを読んでいる

堺市 志田 千代

ゆるゆると生きる大病してからは
救急車の中でピーポー聞いている
ガラクタを背負ってサラバとはいかず
うつかりを笑い合えるも後わずか
どうしても甘え上手になれなくて
余興は佳境わたりひたすら食べている

西宮市 山本 義子

おとほけが下手で秋風身に沁みる
三面鏡すこしとほけてよかろうに
おとほけが過ぎてほんまと間違われ
とほけるのは国会テレビから覚え
お互いにワテンボずれ笑い合う
とほけ上手まだ返す手は持ってます

京都市 高島 啓子

落書きをされるほんやりしてる壁
ほんやりと立てかけられた庭箒
てるてる坊主ほんやりしてて雨が降る
ほんのりの湯でほんやりと茹でる菊
ほんやりの帽子を飛ばすつむじ風
ほんやりと灯って母がいるらしい

寝屋川市 籠島 恵子

冬がくる前にピリオド一つ打つ
憂きことを悟るコスモス揺れている
芋の話土の話をして食べる

よく見れば水引草が咲いている
傷つけたかも知れぬ遠慮のしすぎ
いい齢になってしまった吾木香

羽曳野市 三好 専平

秋が来てわが目に蚊蚊棲みはじめ
うなずいているけど母はわかつてず
見上げると雲がにつこり笑ってる
反骨の膝のあたりが痛み出し
弁当屋ビルの谷間を取り仕切り
二枚舌ひそかに核を隠してる

愛知県 早川 遯行

恥ずかしい事も平気で七十二
熱爛が恋しくなつて旅に出る
趣味だけになった手帳のスケジュール
台風が来るぞ来るぞと怖がらせ
する事がないので足の爪を剪る
ワイシャツを野良着に替えたい老後

大阪市 谷口 義

信号の向こうに立った十二月
閑そうに歯ブラシ食わえ十二月
十二月森に帰って昼寝する
すれ違いざま肩叩く十二月
作法通りそろりそろりと十二月
しっかりと両手で握る十二月

大阪市 古今堂 蕉子

割りきれぬ氣持のままの同じ道

あがつてけ何もないがとただ無口

持ち味と言えど氣になるスローモー

父母の居ぬ故郷わさび抜き寿司

悩まずに忘れる特技得て氣楽

エネルギー使つて喧嘩して瘦せる

大阪市 小谷 集一

甘い汁回し飲みする天下り

物指しが違ふと話噛み合はぬ

親離れしてから個性光り出す

長生きをして一人じゃつまらない

肩書を取ると名刺が軽くなる

白旗と愛想笑いを武器にする

河内長野市 山岡 富美子

ボランティアみんな仲間でみな他人

年金の穴を広げる年の暮れ

玉手箱入れてあるのはマニフェスト

肩肘をはらずに暮らす雑食系

白髪でもかかった恋という魔法

良い汗を貰う地域のごみ掃除

川西市 西内 朋月

セールの旨い話で買った株

何もかも忘れるために飲んでます

手遅れになつてしまった医者嫌い

息抜きの路地裏にある指定席

生ゴミの一人分など知れている

ひと月に一度は回す洗濯機

尼崎市 加川 靖鬼

台風が来てお父さん見直され

子も孫も俺に似てくる痛快さ

味噌汁が出ない嫌疑は晴れてない

二次会へ移るサインか指二本

三日なら自活出来ます妻旅行

サラブレッドの脚がどんどん細くなる

奈良県 渡辺 富子

まつさらな政権少し期待する

好きですきれいに秋刀魚食う男

小走りで吉報告げに来た地酒

広い海持った男と酌み交す

淋しくてふる里行きの雲に乗る

振り向けば過去がにこにこ立っている

大洲市 中居 善信

花から花へ舞うた蝶々が死んでいる

大の男を裸にしたら隙だらけ

踊ると舞うの境界あたり巫女の鈴

オウンゴール何度も蹴った早とちり

怒り肩脅すつもりは無いんだが

笛吹けば踊る男で憎めない

四條暖市 吉岡 修

喝采を浴びる終章とはいかぬ
皆勤で意欲を見せる他になし
寺の隅無縁の墓石積んであり
悪筆もDNAのせいなんだ
菓子折で話がついたのは昔
傘寿でも入れる保険には迷う

大阪市 吉村 一風

小川から秋さわやかな水の音
雨やどりひとりの酒もようしゃべる
虹つかむ話に子らの楽しそう
誰のものか娘せつせと編み続け
少し横向いてる花が気にかかる
お地藏さんの頭の好きな赤トンボ

鳥取市 岩崎 みさ江

順番は無いと耳打ちした計報
目を閉じる視えないものを視るために
叩いたらドアは返事をしてくれた
孫の手が独りの背に欠かせない
生真面目な友へ駄洒落のプレゼント
縦糸も少し緩めて生きていく

尼崎市 山田 耕治

電源まで抜いているので叱られる
商店街桜いつでも咲いている
お名前を見ればあなたも戦中派

気がつけば持つて死ねないもののため
登校の子ら順々に犬を撫で
人肌の爛としんみりよい話

弘前市 福士 慕情

癖のある靴で片減りばかりする
タイトルの長い映画で舌を噛む
バーゲンへ妻は戦士の貌でいく
好い噂入った耳がこそばゆい
また一人恩ある人が旅に発つ
昨日今日明日もきつと生きている

熊本市 永田 俊子

川柳大会に行きたいと言う腹の虫
秋風に老いの哀歎うすれゆく
桃太郎出ないか平成世直しに
何時かはと踊る阿呆になる野心
ばあちゃんがエコの勉強してはった
平成の夜明けに歌う鳩ぼつぽ

高知市 小川 てるみ

師の計報ことさら秋が深くなる
心まで癒してくれぬ秋の風
裸木にはなれぬ私の羞恥心
廃線の錆びたレールが人を恋う
これも愛心温める酒がある
満月と握手心が丸くなる

藤井寺市 高田 美代子

丁度いい処に線が引いてある
あした目が覚めたらおはようと言おう
嫌な事聞くためにある耳でなし
ふと気付く雨の音にも秋がある
付け加えておくことがありまた喋り
大仕事あたまたの痛い年賀状

大阪市 神夏磯 典子

来年のイメージふくれ眠れない
雨風がときに味方の顔をする
残り時間それは私の宝もの
ほどの痛みになつた呆けてきて
何くそ何くそばあちゃんの大晦日
紙風船今も温みが手の中に

西宮市 牧 渕 富喜子

外交デビューかなりいい線はつとする
歴史ある町の名前がまた消える
指先のがさつき秋が来る気配
台風縦断されいさつぱり散っている
あとがきを先に読んでる秋灯下
たつぷりのお茶入れました さあ読もう

三田市 上 垣 キヨミ

来る来ない占いながら賀状書く
一句入れ手書賀状を書くつもり
言い訳も小声年金出して来る

読むはずの本を枕に夢の中
苦労した殻を脱げたら良く笑う
田舎町住んで大根また届く

青森県 松山 芳生

忘却の星を釣ろうか立ち竦む
風の日も自分らしさを釣りに出る
唄ってよかったみんなが耳をくれました
言い訳の前にお詫びをするつもり

胸部貫通亡父の勲章だと思ふ
炭酸のおしゃべり好きなコークハイ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

笛を吹く僕に踊れと言うように
異議ありで僕は空気を破りたい
無限の空どこかで母の声がする
敗因を語れば汗の量だろう
彬の忌今日は私の休肝日
鉤括弧少し私が偉くなる

大阪市 岩崎 公誠

NOという勇氣手のひら汗が吹く
偶然に撮れた写真が格蘭プリ
肩書きの多い男の甘い読み
輪になれず生きてひとりで石を蹴る
くじ売場仏滅の日も招き猫
どっちかがばやいて今日も暮おるる

鳥取市 鈴木 公弘

背伸びして着るお受験のぬいぐるみ
招き猫カネのない奴ばかり呼ぶ
雨やどり独身だった寒かった
方便に使える嘘は嘘じゃない
泣き虫の頭も白くなりました

鳥取市 土橋 はるお

悪びれず涼しい顔をしてなさる
帰省して母を味わうありがたさ
わたくしの人生観はワッハッハ
能がない時は金庫の掃除する
白い目で人を矢鱈に見るでない

鳥取市 中宇地 秀四

平和です妻はヨン様お迎えに
言葉尻とらえてニュース面白く
押し売りも尻尾を巻いた僕の妻
天までも昇る気持におだてられ
新聞が来て犬が吠え僕が起き

鳥取市 夏目 一粹

ふるさとは遠いからこそ耐えられる
本心を言わない酒の強いこと
寝ることにまさる良薬ありません
雑草のような力をつけている
お金さえあればいつでも仏さま

鳥取市 山宮 愛恵

骨折に日にち薬の行となる
友という心の杖が駆けつける
実る秋灰色にする松葉杖
大仕事風呂もトイレも杖がいる
差し入れの声明るくていい匂い

鳥取市 奥谷 彩子

子にバトン渡し切るまで走らねば
この世も楽し三文芝居打つくらし
てんやわんややきもき朝の目玉焼き
はじらいを少し残して冬帽子
寒の月実らぬ愚痴を凍らせる

鳥取市 福西 茶子

隠居家に手頃と思うワンルーム
頑健な足だが座禅組みにくい
合掌の手にちちははの喉仏
出し惜しみするほど知恵は持っていない
祝日は日の丸揚げて朝寝する

鳥取市 春木 圭一郎

お会いして自分の思い伝えきる
家族でもちゃんと言葉で伝えたい
ひどい人反面教師してくれる
今日もまた独りよがりを反省す
受け入れて自己主張する格好よさ

鳥取市 町 村 邦 昭

体制に迎合するか意地が問う
敵しさにたえて明日の笑顔まつ
口げんかできる幸せだつてある
悲しさを過ぎて喜び倍になり
苦労した分だけ頁黒くなり

鳥取市 永 原 昌 鼓

褒めすぎて金はないよと先こされ
褒め合つて老いた夫婦の潤滑油
褒められてやる気なくする天邪鬼
褒められて尻尾が痛いうちのポチ
褒めながら充電します老い夫婦

鳥取市 西 川 和 子

手際よく笑顔も素敵レジの人
丁寧なサービスだからまた来よう
サービスに釣られ高価な方にする
見え見えのあまり嬉しくない御世辞
帰省する孫へサービス腕振るう

鳥取市 中 村 金 祥

長々と聞いた話が胃にたまる
住み分けが出来なくなつて敵となり
ノンアルコールドビールで祝う休肝日
散歩道猫が毎日通せんぼ
温泉に行くといつとも雨になる

鳥取市 有 沢 せつ子

十五夜と聞いて夜中にそつと見る
百貨店へは持参せぬレジ袋
燃えそうな夕日へ道に立ちつくす
につこりで顔の短所をカバーする
クラス会男女に分かれ輪が出来る

鳥取市 加 藤 茶 人

内堀をまずは奥方から口説き
子の年を聞いてビックリ俺いくつ
子等が去にそれから二日ほど茶漬け
人様が言うど腹立つ子の短所
分岐点愛より金につい魅かれ

鳥取市 吉 田 弘 子

行く雲のようにゆつたりのおんぴりと
思い出がまたひとつ増え老いの旅
素直な手その時時の字の乱れ
いも煮会老若男女みな笑顔
腐葉土の恵み自然のリサイクル

鳥取市 平 尾 菜 美

顔パスも売ってないねと不況の身
度々に姿勢変えてる頸椎症
細長く生きる父さん屋台骨
修羅場には羅漢の顔の父がいる
緊張の風を弛めて平和論

鳥取市 横田 春名

美しい舗装道路の呻き声

人の死をフーンと鼻で聞いている

何もかも知ったつもりで老いている

夜半すぎ耳学問をしかと聞く

五十年形見の和服手入れする

鳥取市 土橋 睦子

雑踏の中で叶わぬ愚痴こぼす

向う脛抱いて話を避けている

ぬるま湯の好きな女系で喋り好き

里帰り隠した事がもうニュース

ほどほどに相槌打って年の暮れ

鳥取市 山本 益子

彼岸花忘れず咲いて墓参り

流行語ハンサム廃れイケメンへ

明日葉に惚れはれしるる食管理

論吉殿浮気しばしば困り果て

期待外れ冷や飯食わす迷い道

鳥取市 武田 帆雀

道草をたっぷり食った物分り

職安へ使い古した首を売る

キリン獅子老いてよたよた舞い終る

菊作り菊と恋愛しています

満月に菊の生理が狂い出す

鳥取市 池原 天馬

猿が出る放送流す村に住む

ラ・ボエーム詩への情熱呼び起こす

ケーキ買う傘寿を祝う老婆と

今年また空家の柿が熟れてきた

年とればとるほど日々が新たななる

鳥取市 岸本 孝子

錆びぬよう時どき脳に油さす

マネキンが脱ぐと乙女が匂いたつ

老いた足ところたるむとすぐこける

医者と無縁この上望むものはない

古い服捨てる勇気がまだ持てぬ

鳥取市 岸本 宏章

遠雷の予告素直に聞いている

平凡という幸せに今気付く

天才と言われる人の非常識

ど演歌のリズムで僕の脈が打つ

下戸からは理解ができぬ飲酒事故

倉吉市 松本 よしえ

故郷で老母に教わる栗ごはん

東京で暮しましようにと嫁が言う

東京もいいが田舎はもつといい

東京に三日も居ると草臥びれる

賞味期限はつきり見せぬ小さな字

倉吉市 山中 康子

先代は子育て支援笑うかも
三世代意見まちまちさとす嫁
栄養が過ぎてさみしい秋の空
考えた揚句の果てのありがとう
誘われて嫁と同伴コンサート

倉吉市 猪川 由美子

日本を壊して男サツと去り
エコエコではそのうち不満溜まるわな
野党堕ち総裁選もうらぶれる
医者ミス認めて謝罪滅多せぬ
自販機や公衆電話順次消え

倉吉市 野口 節子

音をあげた一坪ほどの畠仕事
選挙前だけが賑わう田舎町
行楽は松茸御膳に栗拾い
とどのつまりは老々介護という定め
陽だまりを追って動かす車椅子

倉吉市 最上 和枝

重要な電話だメモを取っておく
三世代お膳に集い迷い箸
話し振りまで父親にそっくりだ
話したら疑いはれて握手する
毎日が祭のような豪華膳

米子市 政岡 未延子

触れ合えば鈴も明るい音を出す
塗りが剥けてもうるし椀だと呼ばれてる
どちらも老いてお茶の時間も無言劇
朝の耳かあさんの声待っている
めがね外すと耳朶までもほっとする

米子市 青戸 田鶴

向う岸のような老人たちの街
彼岸花炎えたなごりが痛々しい
八十五自転車はまだ走っている
まん円い十五夜を見に外に出た
この老婆だれだろうかと鏡見る

米子市 野坂 なみ

実りの秋が回ってきたよビーヒャララ
運慶の神技を今に仁王像(東大寺にて)
昔なら自慢子福者十人目
美容院の鏡魔法がうまいのよ
誠実な鏡を伏せてやり直す

米子市 白根 ふみ

ひと山の奥のひと山秋たずね
賞味期限妻の味覚で決められる
葬列のしっぱで顔を立てている
副作用出てきて効いたかも知れぬ
背中から老いが自分に気が付かぬ

米子市 門脇晶子

招かれて明日は金封もって行く
シングルになつても深い母の愛
シングルの老後もたのし趣味の道
回りつつ風に消えたは竹とんぼ
晴れた日は杖を使つて一回り

鳥取県 松川行男

坂の上全八巻を枕する
熟睡を予約してます酒読書
返却を迫られる本未だ半ば
この人も本の虫だな虫干しだ
来客だ俄か亭主が胸を張る

鳥取県 石谷美恵子

ハガキより手紙にしよう秋だから
久し振り皺くちやの手がはなさない
はつきりとものが言えます無神経
聞かされた秘密わたしの手に余る
風向きが変わり私の気も変わり

鳥取県 北村稔

やわらかな孫のこの手は何つかも
あの坂を超えたら老母が待っている
賞ないがおれの菊だよいばつて
過疎村の常会みんな白髪です
若さにはやはり負けます足と腰

鳥取県 竹信照彦

一反も作れば余る自給米
古稀生きて骨折ですみ佳しとする
台風の爪痕始末する畑
サツマ芋子は知らん顔孫と掘る
ひと時代終りましたとあほう鳥

鳥取県 細田裕花

脱皮する脱皮したくて名を変える
一世を風靡した名で食っている
詩人にはなれぬ働き蜂の性
人間をえぐれば不発弾が出る
禁煙へ後れを取ったお父さん

鳥取県 山本正光

秋桜が天を味方に咲き競い
先代の大屋根があり呆けられぬ
百選の水汲みかえり飯を炊く
貴婦人のワイン飲むにもあるポーズ
議事堂に秋のいくさがある気配

鳥取県 山下節子

ずっしりと秘密かかえた日記帳
とっときのワインも出して祝い膳
夢だからワンランク上げ追つてみる
母の味レシビは無いが舌が知る
はつきりと見えるルーペを持ち歩く

鳥取県 盛田夢路

こたわらず許そうそれが楽だから
十人十色人の心がややこしい
ときめきが欲しくて指を折っている
木漏れ陽のシャワーに心洗われる
人間が人間らしくなる笑顔

鳥取県 深田俱久

一村の秋君吸い給えこの大気
義理のある娑婆だもうちょい頑張るか
仲よしの君だ秘密は作らない
溜息も交えて秋の虫が鳴く
和太鼓が秋の田舎を盛り上げる

鳥取県 佐伯やえ

木枯らしがいい来年の夢をまく
冬仕度急げと大山初の雪
やる気まだまだ主役になって農作業
越してきた坂みんな素敵な坂でした
秘密をひとつ抱いてこの冬温める

松江市 三島淞丘

逆立ちで見ればこの世も面白い
信号の赤もゆっくり待つ夜長
カタツムリ角を頼りに余生這う
苦悩から抜けてほのかな灯が点る
大役を一つ済ました日の夕餉

松江市 安食友子

ご立派な生き様を見る蟬の腹
あなたではなくてマネーに揉み手する
善い方に勘案してるイエスです
肺活量山の笹を呼ばせない
憚らず好奇心だけ旺盛だ

松江市 川本 畔

気に入りの写真何度も出してみろ
コトリとも言わぬ隣へ首伸ばす
悠悠とやってくるのは駐在さん
父さんが大事とそつと見る背中
一言がじんと睨へ秋の暮れ

松江市 小川 注湖

今頃は靴下神話よく破れ
タイピンの真珠の光り恋はじめ
点滴を数えるほどに元氣出る
トイレには落書き時間あるらしい
テーブルにマニキュア光る指を置く

松江市 津川 紫晃

フライパン妻の小言がよく跳ねる
歳月が五感のみぞを埋めて行く
ユニークと言われ良いやら悪いやら
思い出は老いの華なれ夢の中
デジタルが大和言葉を変えていく

松江市 松本 知恵子

回転ずし孫と皿積む秋日和
木犀の香に誘われる万歩計
蜘蛛の巣の芸術光る秋の天
仙人になつて雲海眺めてる
バランス取る猫の尻尾を持つてゐる

出雲市 多久和 敬子

刺激受け私の脳も動き出す
叱つたり誉めたり自分刺激する
へそくりの置き場所替えて落ち着かぬ
おふくろの味と言われて腕ふるい
物忘れ互いに増えて丸く老い

出雲市 富田 蘭水

輪切りの脳ピカソの絵にも劣らない
人並に塩分控え目をつむる
死ぬなどを恐れぬ特攻いま退化
曇り雨この頃体までも慣れ
どうにでもなれと生涯現役証

出雲市 小白金 房子

なに事もなかった日記の太い文字
泣き笑いデコボコ道にある情け
草刈りへ鎌研ぐ老いの腰手拭
自給自足恩恵貰う農の幸
牛糞の力みどりの味生かす

出雲市 岸 桂子

故里を忘れぬ鮭に拍手する
亡き母を想い大きなおはぎ餅
もう嘘はよそう茄子の花のよう
人の名が口から出ないもどかしさ
家計簿がどう変わるのか新政治

出雲市 石倉 美佐子

つかずはなれず何処まで行くの夜明前
一定の距離を保っている宇宙
あの星が貴方の星と決めている
そっちから愛の炎が見えますか
八十路今電車の音が近くなる

出雲市 森 茂美

おっさんが花とおしゃべり酔うている
秒針がリードをとっている時計
芒の風ふつと明日の事思ふ
潰された虫が黙って死んでゆく
女房を猫に寝とられふて寝する

出雲市 持田 多輝子

老いのグチナース笑ってきいてくれ
茶わんむしぎんなん今日のメニユーです
落ちついてゐるはずなのにオッチョコチョイ
裏木戸に父の手植えの大銀杏
なりゆきにまかせ主治医を信じてる

島根県 伊藤 寿美

美作市 山本 玉恵

友情が精一杯の芝居する

段どりが芝居がかってくる葬儀

風に乗る種ためらわず橋渡る

削っても削っても生える胸の角

父と子のビールへ母も仲間入り

倉敷市 撰 喜子

追伸に本音ちよつぴりのぞかせる

節分の豆を逃れた鬼に会う

ピカソの絵と思えば見える三歳児

埴輪から昔話のあふれ出る

年老いて遠い昔に封をする

美作市 福原悦子

先を読む勇気を貰う小半時

任しとけ叩いた胸の頼りなさ

欠点は沢山あるが好きは好き

幸せを信じ不安を脱ぎ捨てる

百薬の長を頼っている命

美作市 大石 あすなろ

甘かった余生の構図ひき直す

言うまいと思うそばから愚痴が出る

米を研ぐまだ続編のある限り

老兵の背なに重たい荷がひとつ

天高くなると忘れるダイエツト

ブライドの高さも姑の依怙地かな
てのひらに小舟浮かべて夢あそび
追憶のまっただ中を鼓笛隊

外食の味におぼれし家出人

正直に生きても神に見捨られ

真庭市 国米 きくゑ

長い影映し真赤な夕陽落つ

祝米寿赤いネクタイ照れている

生涯をネクタイ無縁鉤を振る

祝入社ネクタイきりり晴れ姿

底なしの笑顔迷いもふっ切れる

真庭市 福嶋 智恵子

究極のもみじに逢った大山路

ばら撒いた山河は荒れて道路だけ

デパートの駅弁旅の夢を追う

駅弁を買うとビールが欲しくなる

話しても綻びた脳すぐ忘れ

竹原市 石原 淑子

瞳を合やす心迷子にさせぬよう

歳よりも老けて見られた日の悲哀

影うすく自動ドアにも無視される

夕焼けに染まってしまふ立断

実直な夫の背中円くなる

竹原市 時 広 一 路

賀寿の駅一つ一つにある祝辞

小さな種の咲かせた花が競い合う

平均寿命越えてもしかと僕らの道

なるようになると決めたら丸い明日

私の古き割り算の九々知っている

竹原市 岩 本 笑 子

祭り太鼓もう稲刈りは終わったか

運勢欄毎日読んで靴をはく

損をしたような新聞休刊日

確実に歳をもらって誕生日

天高しちよつと太つていいかしら

府中市 岩 本 雅 代

来世の約束忘れ悔いる指

ハンサムな集金員を待つ温み

平凡な女で棘は固く持つ

皮財布開けばカードで札かくれ

冗談が言えぬ上座で畏まる

府中市 馬 場 利 子

明日という未知へわたしの好きな色を溶く

孤独をまぎらす夜の長いメール

お喋りのカラス噂を聞きたがる

秋終えてわたしの軍手干して置く

無器用なわたしをせきたてる師走

府中市 藤 岡 ヒデコ

次々の用事も元気ならのこと

温度差が激しい秋にいたぶられ

秋空をゆつくりと見るひまがある

この冬に備え大根よく育つ

誰も来ず電話も鳴らずちさい秋

宇部市 平 田 実 男

敵も減り味方も減って進む古い

拔擢の椅子でたじろぐ尾骶骨

ワンカップ指の先までほぐれて来

就職内定孫がいささかでかく見え

退院が決まりスキップしたい試歩

美祿市 安平次 弘 道

夕映えの空に科白が落ちていた

本心を明かせば敵が増えていた

入れ知恵かも知れぬカラスがカーと鳴く

背筋シャンと伸ばせば裏が見えていた

人類のエゴにルールが無視される

東かがわ市 川 崎 ひかり

自転車に孫乗せ走る秋の中

十人十色私を好む人もいる

ぎりぎりを堪えてる雑魚ののど仏

雨の午後おでん煮ながら読むリルケ

ウツの日はガラスピカピカ磨きあげ

東かがわ市 伊勢 八重子

信じたい信じられないマニフェスト

石橋をたたいて波に乗りおくれ

お茶ばかり飲んで結論先延ばし

生かされた証を句碑に喜寿の坂

若いつていいなあカップル手をつなぎ

東かがわ市 清川 玲子

血糖値下げる話に菓子が出る

そんな事教えないのにすぐ覚え

不安だが広くとべよと子を放つ

母さんが光りを放つ参観日

人がみなやさしくなれる鈴の音

東かがわ市 原 賢

輪の中で出しゃばる癖がはみだされ

漂流の古木は波に揺れ動く

友が逝くこんな空が青い日に

金婚のルーツひと間の見合いから

見栄張らず一桁下げてお付き合い

松山市 高橋 宏臣

気に合わぬ風と向き合うあばら骨

難しい漢字は避けて通り抜け

身勝手な円周率で旅をする

冗談はつつかい棒につつかれる

無駄口を圧力鍋に閉じ込める

松山市 古手川 光

晩秋の日暮れ弱音をついぼろり

平均寿命伸び社保庁は憂鬱に

妻が持つ辞書には載ってない手抜き

サンタクロース疑いだした子の脱皮

あと何度聞けるか除夜の鐘を聞く

松山市 宮尾 みのり

あの時の機転神様きつと居る

両親の年金気楽子が使い

あつてもなくてもいいコメントで茶を濁す

切り捨てた無駄へゆとりも切り捨てる

農協も自民もやせた世の移り

西予市 黒田 茂代

幾カーブ登った先に別天地

高原の風感触はすでに秋

連山睥睨ここがわたしの一等地

高原の覚えきれない花愛でて

夕映えのここが浄土か芒原

高知県 小澤 幸泉

淋しさを描き知ってる父の朝

酔いの目にただ妻だけが美しい

ワンカップ父の癒えない街で飲む

土に生き土に追われる老いの秋

平凡がまだ追いかける遠い坂

唐津市 井上勝 規

峠一ツ越せば新たな視野がある
身の丈に合わせ可もなし不可もなく
裁判に法と情けの盛り合わせ
意地悪な神が試している不況
戦友の夢もこの頃見なくなる

唐津市 坂本蜂 朗

他人のあら探す私の暗い影
お若いと言われ背骨がこそばゆい
ミラクルな親で子供の目が揺れる
手前味噌褒めたらドンと追加され
まだお洒落している恋の不発弾

唐津市 山口高 明

間違つて押しても破滅核ボタン
おそれ多くも陛下と同じ誕生日
氣立て良いむすめさんだと母が惚れ
蓮池の生態毀す外来魚
知らなくて良い真実もあるんやて

唐津市 樋口輝 夫

親の癖そっくり真似る蛙の子
読めないが頷いて見る書道展
分からぬが今は民主の旗を振る
爺を見て大袈裟に泣く孫の知恵
きっかけは活字になった初投句

唐津市 市丸晴 翠

その昔活躍をした糸切歯
分からぬと言えずに辞書にそつと聞く
孫の住む高層ビルに疎む足
対策はマスクと白い顔並べ
帰省子を見送る空の冷蔵庫

熊本県 岩切康 子

旱魃に耐える草の生き強さ
氣にしつつ出来ぬジレンマもの哀し
卒寿米寿に元氣を貰う会である
感謝を如何に表わそ迷い箸
留守つづき疑問が湧いて探りだす

熊本県 高野宵 草

論語など歯牙にもかけぬ世の乱れ
牛遊ぶ野原ウツ吐く深呼吸
テレビからもう一週間飛んで来た
晩酌の肴に妻の愛盛られ
畳の目に合わす寢床の几帳面

シドニー 坂上 のり子

連絡を待つ間のむしり取る毛玉
なぜ鳴らぬ電話にジツと耐えてる胃
もういいと耳ふさぎたいアドバイス
サンキューが言えて言えないありがとう
イケメンだった面影のこし白い髪

砂川市 大橋 政良

叱られて叱ってヘソを少し曲げ

すぐ嘘とわかる女の現在地

少し乱れた文字で別れの一行詩

消しゴムでみんな消したい過去がある

もう死んでいい齡などと負け惜しみ

黒石市 佐藤 古拙

砲口と知らずに蜘蛛が糸を張る

亀を見るたびに兎の偏頭痛

古傷をいたぶるように虎落笛

棒鱈をむしり長夜を友と汲む

コスモスも尾花も風に逆らわず

黒石市 相馬 一花

この歳で金も名誉も髪もない

七十の手習いヨガで腰痛め

散り際に判る誠の人間味

ガイドにも当り外れのある旅路

薄情な奴だ一人でもてている

平川市 小寺 花峯

良薬と思う口には酒の味

NOと言う言葉が拗ねる還暦で

成人式まだまだ取れぬ嫉糸

雑巾が嫌い続けた足の裏

人生の岬で抱いた波しぶき

弘前市 高橋 岳水

一冊の文庫とふらり旅に出る

死ぬ時は死ぬさと止めぬ酒タバコ

手探りで歩む青春桜桃忌

ギブアップ知らぬメロスの脚に酔う

卒論へ太宰人氣が衰えず

弘前市 櫻庭 順風

銀行のボートに乗った開業医

看板で病院らしくなる旅館

開業医少ない街ではつとする

借金を短縮する銀行

いつまでもボートに乗らぬ開業医

弘前市 相馬 銀波

勝ち運が背を押す今だ世直しを

燃え尽きた今をカメラに盗まれる

生きたかを問う相手も足踏みか

汗ばんだ緊張感でする再起

握手からドラマめいてる酒になり

弘前市 高瀬 霜石

一分がとつても長い冬の椅子

仲直りしようタイ焼き二つ買う

牛丼で済ますひとりのクリスマス

万策はそう簡単に尽きません

粒々辛苦金はあとからついてくる

弘前市 今 愁 女

台風予報竿鉢入れて亀になる
本人前に保険証みせよ局の窓
来年も生きてるつもり日記購う
ボトル水買わずに済ます井戸の水
週一度玉子が目玉客を釣る

弘前市 岡 本 花 匠

みちのく路紅葉早まる好天気
ペアルックもみじに染まる遊歩道
ツアー旅終えて熟睡地金出る
慎しく今日を過ごせた夫婦橋
残り火の元気ともして丸く生き

弘前市 須 郷 井 蛙

会計が済んで幹事の歌も出る
役付きも楽し日替りスケジュール
流行に負けずに生きた束ね髪
節約の分はコトンといい音色
読経に耐えて幼児はめられる

さいたま市 星 野 育 子

朝一番用件のみで済む電話
平成の三種の神器様変り
殺人が無くて温みのあるドラマ
誰のためこんなにもある飛行場
病院の前に不便な歩道橋

八王子市 播 本 充 子

婚活に励めとトキが放たれる
奥さまは魔女で亭主は宇宙人
虫の音も新政権へ期待する
日中は吞まぬと決めている淑女
埋めようがないなと溝を覗き込む

武蔵野市 亀 井 円 女

ああ言えばこう言う孫も居て楽し
卒寿でも夢見る時は十五歳
恐いもの何も無かったあの頃は
心は元氣体よたまたまならず
説教を孫は聞かずにあっちむいてホイ

東京都 岸 野 あやめ

精密な検査待つてる腸の虫
やみくもに予約したけど名医です
生き返る二泊三日の病院で
イケメンにしょげた顔など似合わない
給付金いつの間にやら消えちゃった

東京都 清 原 悦 子

身嗜みほどの化粧で家にいる
さつちりと家事分担の共稼ぎ
住み着いた隣り近所は皆老後
焦げ付いた鍋愛着で捨てられず
鳳仙花種を集めたマツチ箱

横浜市 小野 句多留

富山市 島 ひかる

片道で燃えた五輪の火が消える
八ツ場ダムボーカーゲーム見るような
人混みと天秤に掛け紅葉狩り
話し方知らぬ男をもてあます
スパーにめつきり増えた男籠

横浜市 菊地 政勝

少しでも楽を選んだ老い悲し
取り敢えずなんでも保管戦中派
コスモスを見ながら思案しています
セールスを引き止めている話し好き
束の間の夢をみましたチルドレン

川崎市 三浦 きぬ

縫いぐるみ愛猫白と添い寝する
先短い判ついても物惜しみ
しばらくね敬老の日の刺身皿
何もかも中途半端で逝かぬよう
もう結構もうたくさんと生きている

静岡県 藺田 獏 杏

振舞いも舞台の延長足捌く
よいとこへ来たと脚立をつかまされ
未だ箸で豆がつまめるこの自信
忘却と笑いで今日を生きてゆく
魂を込めてコケシの目鼻入れ

ニッポンとニホンを使い分ける知恵
柳友の居る街通り抜けの旅
あの山もこの山も好き自然体
カクテルの味が変わったと思う
十二月第九が響く胸の中

大山市 金子 美千代

どこからが敬老なのか皆若い
来る日のためにマスク買い溜める
気持負けしている隙を狙う風邪
押しつけの善意が重くのしかかる
一言が台無しにしたボランティア

大山市 吉田 幸子

ポジティブに幸せ種をまくプラン
体調を気遣い旅の虹を追う
冥土への土産カナダの土を踏む
すつぱりと虜になったナイアガラ
スケールが違う異国で深呼吸

大山市 関本 かつ子

赤んべの舌と舌とですれ違い
平凡がお好みらしい福の神
二世帯の住まいをつなぐ孫の足
反省のあれもこれもと血糖値
休校を喜ぶ孫の六度二分

京都市 坪井孝一

どう見ても平和そのものの空の青
昭和期にとても寡黙な母が居た
強情と変つてしまふ正義感
生きている証拠しんどい歩数計
労わられても老いを隠して伸ばす背な

京都市 三宅満子

せっかちと気長のコンビ似合いです
青空へ平和な日本かみしめる
招待の返事財布に聞いてみる
金銀に勝る笑顔で育てた子
風呂上り顔見合わせる美人の湯

京都市 榎本宏子

日曜日ホツとしている腕時計
カレンダー自分だけ知る頭文字
妻の愛猫に譲つてひとり酒
同窓会皆となら歌える校歌
健康になればやっぱりほしい金

京都市 西村益子

祖母も小さくなって老夫婦
電話鳴るどうせお前と夫言う
財ないが宇宙人なら家にいる
すみません良妻になどなれません
道路出来お墓の中もかしまし

亀岡市 井上森生

耳鳴りか神のお告げか無事に日々
曼珠沙華新政権を祝うてか
子ガメラが旅立つ遥か大海原
柚子風呂に鍋歩く会こと納め
成すことが今日も明日も湧いてくる

長岡京市 山田葉子

丁寧な折り目に次を促され
いつからの同居かいたちすずめ蜂
風豊かこだわり捨てて第二幕
万華鏡くるくる今日を解き放つ
雨の日はケイタイ開きお茶にする

大阪市 川端一步

オリンピック広島長崎ならいいね
菊咲いたよ嬉しい便り友がくれ
許し合う二人が食べるのはうどん
言い負けてさよならだけは先に言い
ひかえてね玄関先の常套語

大阪市 近藤正

老人力あれなそれなで皆分かる
利き腕をときに休める招き猫
戦争を知らない歳で好戦派
美しい自然が残る過疎の村
歳食つて少しおしゃれに気を遣い

大阪市 江島谷 勝 弘

祝うこと別にないけど乾杯だ
ストーカーまではならぬが好きな人
旨いですがもみじ天ぷらカリント風
この人は一体何を言いたいの
ヒロシマとナガサキならば拍手する

大阪市 伏見 雅 明

手づくりの好物が待つ子の帰省
あとで知るあれが人生分かれ道
豹柄を着込みなにわを生きのびる
耳ざわりよい言葉には落とし穴
言い勝って気まずい空気たち込める

大阪市 榎 本 日 出

脳トレも筋トレもせずよく食べる
試着しただけで済んでる赤い服
家族みな耐えることには慣れてない
味方にも敵にも見えるカスミ草
まあいいかばかりが増えて歳を取り

大阪市 板 東 倫 子

すれ違う人が凶器を持つ不安
幸せは今年も皆と栗ごはん
逆転の発想をまた逆転し
背信と格差の街を月照らす
神も手を拱くスマトラ沖地震

大阪市 津 守 なぎさ

大胆な口聴衆をまどわせる
脳トレのお助けマンは五七五
シルバーのアイディアつのる介護補助
グリーン車に座りなんだかむず痒い
杖のいる足自転車はまだ乗れる

大阪市 吉 内 タカ子

団地間の稲穂こがねでお辞儀する
コスモスに巳年のわたし真似てみる
無料バスパソコン通い弾み湧く
食欲の秋はメタボと競い合う
親子とも子供だんじり引き回し

大阪市 升 成 好

胸中のこん畜生が眠らせず
好奇心たるみを知らぬ古希の艶
どの河も拗ねてるように蛇行する
午後のお茶匙が噂をかき混ぜる
磨り減ってやつと歯車合う夫婦

大阪市 森 田 明 子

ブラームス止めて虫の音聴いている
他人とも分身だとも子を思う
窓開けてキンモクセイと差し向い
結び目に時々度量試される
愛犬と仲良く歳をとっている

大阪市 中村 叡子

秋祭りなのに世間はもう煮メ
おひとりと言われていても金是要る
肝心な時にカードをまた忘れ
さめた目で鳩山政治みな見てる
リハビリに通う人達おしゃれして

大阪市 熊代 菜月

友情がだまって愚痴を聞いている
梅漬けて昨年の亡母を思い出す
自我抱いて昨日も今日も生きている
気弱さも頑固もみんな私です
顔みてもわからぬ妻の顔をふく

大阪市 奥村 五月

高速は亀より遅い連休日
異国でも寿司は鮮度で勝負する
終電に合せて友と酒を汲む
粗大ゴミ捨てるの待てと子に言われ
実力はあるが父には運がない

大阪市 小糸 昭子

私より我慢強くて堪える病夫
真打を真ん中にして坐を作り
我慢せずのんびり行こうすぐ冥土
塀の上母猫喚く子と呼んで
帽子とマント誰がかけたか道祖神

大阪市 小泉 ひさ乃

急ぐのに信号赤が続くなり
天と地のはざま自力で咲いた花
掴む幸ひと欠片だけ手に残る
オルゴール切ない過去をひとつもち
似たような夫の不満聞いている

大阪市 松尾 柳右子

待ち人は来そうにもない花時計
秋晴れのウォーク往きかう人多し
たむろする雀秋の草食べている
窓辺から月見の出来る至福時
押し花に過去の思い出ほろ苦し

大阪市 井丸 昌紀

貯えはそこそこあると見栄を張る
あの時は左へ曲がるべきだった
堪忍してそつと触っただけやのに
大仏さんパンチパーマがお似合いで
流行の服は僕には小さすぎ

大阪市 原田 すみ子

くり返す日々の営みこれも愛
ほんとうは好きやから言うあほやなあ
うまい物家族で分けてなおうまし
節約を目指す夫が小うるさい
困ってもプライドがあり爪楊枝

大阪市 田 浦 實

お互いほめておだてて老いの坂
出会ひ頭名前出てこずむにやむにやと
ぶつぶつと文句言い合いガスを抜く
不慣れな闇大手を振って蹴躓き
運動会少子化一時忘れさす

大阪市 榎 本 舞 夢

紅をさす徐々に心も魔女になる
約束をストンと忘れ澄まし顔
夫留守三日天下を決め込んで
切りつめて旅に出るのもいいもんだ
命より愛がほしいと青春譜

大阪市 中 村 れんげ

長い物に巻かれるなんてごめんです
四捨五入しても情けは割り切れず
核心をちよつと外した温かさ
声美人歳月たつても変わらな
八十路過ぎ一度背の荷を負いなおす

大阪市 津 村 志華子

幸せの風を待つて北の窓
大切な余生に力むことはない
万物の恵みで今日も生かされる
片減りの靴が知つて細い脛
人情の路地に陽差しもやわらかい

大阪市 坂 裕 之

決めたから寄り道せずに進みます
褒めすぎる笑っているが腹が立つ
置いてない棚から餅は降って来ん
思い遣る心少しで丸くいる
嬉しい日人の幸せ話せる日

大阪市 平 嶋 美智子

インフル防止がらがらがいごしごし手
風邪対策マスク百枚買いました
年やからふらつく事もあると医師
健康診断良でしんどさ薄くなり
心身が安らぐようで雨も好き

大阪市 岩 崎 玲 子

ストレスがたまるとおはぎ三個食べ
いい事があるとハガキとペンを持つ
お免状袋戸棚で大あくび
テレシヨップ残りわずかと煽りたて
すつぴんになると初恋思い出し

大阪市 大 川 桃 花

遠くから見る明かりにはない格差
電話ぐらいせよと催促する電話
制服を着ると皺まで伸びてくる
父親は背中で照らす道標
水都大阪水で再生果したい

和泉市 横山捷也

突つ込みが過ぎて悔いてる一人酒

味噌漬けに母の櫛の味がしみ

つかの間のヒロインで居る披露宴

よたよたの私のそばに妻が居る

少しだけ歳のサバ読むアンケート

泉佐野市 山本蛙城

夕張の二の舞らしい町に住む

葬式はしないつもりとふれておく

遣伝子は大陸系か黄色好き

買った気になると買わずに済む不思議

歩兵操典読んで今頃知る矛盾

茨木市 藤井正雄

鉢巻に櫛かけてる蟻の列

往年のヒロイン孤独死の悲劇

響き合う音符互いに抱く絆

補聴器をオフ愚痴なんか聞いてない

親に子を預け成人式に行く

池田市 栗田久子

気の重い反面はずむ年の暮れ

せきたてる賀状おせちの予約票

忘年会食欲のある人とする

競り合えば勝つまい友を無くすから

世渡りはへたでもちゃんと生きてます

交野市 森本弘風

通学路朝の挨拶出来ぬ子等

回覧板お泊り好きな家がある

その歴史売りものにする観光地

ワッハッハー鏡が笑う試着室

飽食でネズミが怖い猫も居る

交野市 山川日出子

今四角過去は三角未来丸

美術館ゆつくりめぐり真善美

二億円入りたい金庫荷物入れ

青い目が城を見つけた見晴らし台

湯の中の乳ガン同士すぐに友

河内長野市 村上直樹

胸騒ぎナシの磔の見舞状

ちよい太の検査結果が気にかかる

ちびちびと刻んで貯金食べてます

世渡りが下手で割り勘負けばかり

四季折々勇気をくれる山がある

河内長野市 坂上淳司

豊満な女にはロゼがよく似合う

豊穣の秋ボージョレに酔い痴れる

野心家の菌型が残る破れた面

女房が要の席に居る平和

父親が要であつた時代

河内長野市 井 上 喜 醉

生き残り戦後歩いた長い道

菊人形歩きだしそう秋日和

張り紙が睨む犬には字が読めず

泥かぶる覚悟で決める風の向き

年金の重荷を背負う長寿国

河内長野市 植 村 喜 代

暑いでしょ赤ちゃんスヤスヤベビーカー

スイッチを入れたり消したりよい時代

十月に安心素っ破抜く台風

この坂もいつまで登り下りが出来

夢だけもつています旅三昧

河内長野市 黒 岩 靖 博

あれそれで話が分かる共白髪

医者の数なんともならん御時世だ

信号は青だが左右見て渡り

母さんはいつも怒ると子が文句

耕運機ようやく出番野良仕事

河内長野市 水 谷 正 子

新しいカレンダーかけ夢もかけ

何事も無かった有った年暮れる

どなたでも九十過ぎれば皆美人

ケア通いまだまだ女紅をさす

イチローに習い小石を積んでみる

岸和田市 井 伊 東 吉

冤罪を間違いでしたでは済まぬ

食欲の秋と闘うメタボ腹

ノムさんの処遇うるさい外野席

ご趣味はと聞かれ読書と応えとく

不整脈医者は加齢と突き放す

岸和田市 土 橋 房 枝

食欲に負けて今夜も罪ひとつ

さまざまな欲捨て渡る川がある

現実を枕に夢で翔んでいる

理屈こね十七歳の自己主張

好奇心いろいろあつて衰えず

岸和田市 林 力 子

老いのだんらんお茶に梅干し高笑い

やりくりうまい蟹に松茸出す魔法

身の内を晒し解け合うチャンコ鍋

情熱をもやす演歌に酔いしれる

真心がじんと伝わる魔法の掌

岸和田市 雪 本 珠 子

百歳の母に発破をかけられる

秋色に我が家もぼくも衣替え

愛猫も来年後期高齢者

惹きつけるオーラを猫に教えられ

子が巣立ちやれやれ今は孫の世話

岸和田市 堤

檣 代

衣替えしたらまたもや暑くなり
へやピース合せ鏡でニッコリと
お祭を一人しよつてる孫の顔
久しぶり空気綺麗になった雨
一日の暮し方だけ考えて

岸和田市 原

さよ子

亡き夫を偲んで参る萩の寺
好きな事出来る余生を羨まれ
どの顔も善人楽し趣味の会
途中下車珍味を食べに気が揃う
世話やいて時代のずれを知らされる

岸和田市

森 元
ふみよ

廃屋に月下美人が咲き乱れ
連休で地図の上では五千キロ
その昔天然無垢の君いずこ
都合良く記憶喪失するい輩
月光にスローライフを取り戻す

岸和田市 米 富 淳 風

満月を一人占めして語りかけ
カクテルをちびりちびりと秋夜長
あなた政治わたしは愛を語りたい
次こそと気負つてみても句は出来ぬ
天候にふり回される旅支度

堺市 村上 玄 也

オンとオフ交錯してるまだらボケ
子供向けニュースに世間教えられ
二日酔いの苦しみ知つていても飲む
元部下も割り勘にする定年後
煽てられ家事を手伝わされている

堺市 柿 花 和 夫

日付け変れば恐いものなし梯子酒
ピーポーに息子を想う秋夜長
勝てばこそ無欲の勝利などと言う
弔辞から知つた故人の運不運
恋人をうしろから見る美術館

堺市 山 本 半 銭

すらすらとお経は忘れない不思議
家出する気持ちも解る鬼瓦
寝不足になるほどパズルおもしろい
試着室期待はすぐに躲される
逃げ口上着て行く服がないのです

堺市 矢 倉 五 月

先に死んだらと倍ほど食べながら
お隣の引越しうちも落ち着かず
まあこんなもんやと思う年の功
ほどほどに出来ず生傷また増やす
ラッパ飲みペットボトルに市民権

堺市 西村 りつえ

まだまだと踏ん張りすぎてサロンプラス
聞き取れず笑顔で返す生半可
噂ほどこちでなかった寺の寄附
モナリザはもやもやの裏知った笑み
荒れ果てた田圃光らす秋桜

堺市 齋藤 さくら

頼みごとだけの電話に慣らされる
母さんの部屋も造るとうれしいな
同い年顔だけ若い言うてくれ
寝てる間のぎっくり腰で目が覚めた
怒らない練習すると言うてます

堺市 近藤 豊子

台風一過 歓声あがる運動会
台風のとに生まれたあおい空
雨しとしと秋には秋の花が咲き
秋さればおばあちゃんかてもの思い
自衛隊一刻あらそうテント張る

堺市 大隅 克博

秒針に根気のなさを笑われる
夜も寝ず回ってくれた扇風機
欲出せば損と言う字がのしかかる
意識して少ない方を取る大人
また来ると帰った客は来ないまま

堺市 荻野 像山

腰痛へ酒止めたらと言うパンチ
猫になり美人の膝で甘えたい
占いに賭けてるうちに嫁きそびれ
命を繋ぐ薬しぶしぶ飲んでいる
孫誕生加湿器空気清浄機

堺市 大久保 のん子

一枚の葉書で響き合う絆
消しゴムで消せる程度の浅い傷
調子いい嘘へ相槌打ってやる
心まで覗かれそうな澄んだ目よ
急くこともないのにやたら突っ走り

堺市 源田 八千代

秋祭り采配を振る男前
だんじりの屋根で男になりました
祭り果てごみの分別総掛り
ソーラン踊り運動会のファイナーレだ
古希過ぎてあつという間に十二月

堺市 奥 時雄

来し方に涙はあるが悔いはない
座高なら足長族に負けはせぬ
カーナビが古く旧道走らされ
皆帰り勘定書に起される
ヘソ出さぬ女子ゴルファーは下位にいる

堺市 加島 由一

そりやまあ格差はあるが食べている
中の下の暮らし可もない不可もない
八十が老後に抱いている不安
生きぬいて色即是空蟬の殻
長すぎて効き目なくなるお説教

吹田市 太田 昭

たこ焼の衝動買いで憂さ晴らす
劣勢に立つと夫はよく喋る
私の吐いた嘘にもある時効
被害者が正論だとは限るまい
方便と言うべんりな嘘ですり抜ける

吹田市 木下 敏子

輝いていたいと燃やす命の灯
蛙でも相手を思う子に育ち
一通り苦労したのか優しい子
同窓会行けるうちにと友誘う
ポケットに夢捨てきれず齢重ね

吹田市 大谷 篤子

高からず自分に合った志
プラスにはならない愚痴は言わんとこ
バリアフリーなんで転んで骨折し
メーク変え少し元気取り戻す
カロリーは問わずとにかく太りたい

吹田市 野下 之男

一日で変われば変わる永田町
マスクでも安心買えば安いもの
妻の愚痴無念無想で聞いている
火焰樹が迎えてくれた我が母校（台湾）
何語ですオウムと犬のご挨拶

吹田市 穴吹 尚士

仲直りせぬまま友の訃報聞く
はんやりと嘘の匂いのする話
ブランドのスーツ着てるが品がない
松茸の透けて見えそな土瓶蒸し
さりげない笑顔で痛み押し隠す

吹田市 瀬戸 まさよ

玉音と呼ばれたときもあるお声
口一つ利かぬ日もあり老夫婦
敬老と愛老どちら選びます
勿体ないちびた鉛筆貯めに貯め
居酒屋の暖簾くぐるやすぐ秋刀魚

吹田市 山本 希久子

約束の総決算だ十二月
欲しいものなくて秋風身にしみる
散るもみじうそとまことに揺れながら
大それた望みは持たぬ朝のお茶
紅少し足せば若さが満ちてくる

吹田市 須磨活恵

蹟いた石が身のほど知れと言う

どこまでも楷書で通す一本気

もう誰も鬻りに来ない瘦せた脛

小春日に無沙汰の友へ電話など

ゆつたりと小春日和を抱きしめる

高石市 浅野房子

検査入院行きも帰りも一人です

カーテン越し淋しい人がよく喋る

食事療法ベストつくして結果待つ

よい結果これでしばらく生きられる

全員集合あの頃みんな生きていた

高槻市 乙倉武史

汗流す政治見ている庶民の眼

汗知らぬ世襲政治家頼りなさ

響き合う話上手に聞き上手

褒めあつて狐と狸うまが合う

好奇心燃やし惚けなど蹴散らかせ

高槻市 井上照子

政権交代気候も異変世も変わる

鉄道の人身事故は辛すぎる

仲秋の名月だんご母偲ぶ

採血の順でもめてるすきつ腹

口出しを控えています娘の暮らし

高槻市 生田義一

支持率で知る国民の飽きっぽさ

通夜の席近い我が身を重ね見る

あせらずに乘ろうよ人生終列車

老いの会相槌うって和を保ち

ゴール前虎モウロウの千鳥足

高槻市 執行稲子

謎を解く話題をくれた時の人

しとしとの雨の日派手な傘に酔う

ゆつたりをくれる香ばしカプチーノ

遠くから見護つてるといふ絆

図星だなこれはおちおち眠られぬ

高槻市 安田忠子

元気な時近く感じる慣れた道

二階からネコと目が遇いフンされる

人生は六十代が華と知る

若いねと誉められたのか悩みます

MRI頭を打って夢うつつ

高槻市 左右田泰雄

タイミング合わせるための遠回り

ちよつとした遊び心でついた嘘

からつばを覗いて孫に笑われる

激甚という台風の面構え

シャッター街乾いた風が吹き抜ける

高槻市 杉 本 義 昭

里山の小さな秋に身を溶かす
秋色にジャズが流れる散歩道
星屑を好きなあなたに贈ります
体温の届くところにある絆
好きな人いるので舌が回らない

高槻市 佐 甲 昭 二

芸術家気取りで探す秋の色
巻き返し狙って橋をかけかえる
燃えるものあつてカルチャーはしこする
相談に乗る気になつて眼鏡ふく
時の波乗れずじまいに歳重ね

高槻市 峯 村 勲 弘

人生にエラーがあつて味が増す
教育の現場を荒らす過保護ママ
なるべくは無駄であつてとガン保険
天麩羅で二度のお務め散る紅葉
鳩守るタカラジェンヌの心意気

高槻市 富 田 美 義

言う側に冷や汗もある二枚舌
労りに嵌まると妻の思う壺
三世代住んでそれぞれ栓ひねる
シャッター街自販機だけが相手する
スポットも名誉も縁のない介護

高槻市 指 宿 千 枝 子

のんびりと回る時計の捻子を巻く
父母が浮かんで来ます曼珠沙華
来し方にスリムな妻と僕が居る
拝まれても大事な顔は貸せません
見覚えのあるあの顔は誰だろう

豊中市 江 見 見 清

快気祝を次の病気が追いかける
敗者の弁人格の程さけ出し
千円で走り曲つたキユウリ買う
残り一滴すすつて酒の味を誉め
わたしひとりだけの記念日もっている

豊中市 松 尾 美 智 代

ふる里へお墓参りは五連休
こだわりのうどんを食べて墓洗う
若返る欲がふくらむ美人の湯
本音言つて一寸気まずい朝ご飯
浅知恵で渡り切れない深い川

豊中市 水 野 黒 兎

風の道教えてくれるしゃぼん玉
見上げれば故郷の空の楠大樹
姿見の横幅細る食の秋
豊作を祝つて見栄をきる案山子
会いたくて渡れぬ彼岸目を瞑る

豊中市 藤井則彦

カルチャーの朝から胸は弾んでる

薬漬けにならぬ薬を探してる

虫干しをすると元気になる夫婦

トラ勝った明くる日弾むスポーツ紙

そこそこの人もマスクをする時節

豊中市 安藤寿美子

今日終るあくび一つと酒少し

貧乏は美德代々公務員

三代目同士やねえと植木屋と

初恋の人は夢にも出てくれぬ

体力はすでに限界気力また

富田林市 中井アキ

斜から見ればわたしも魅力的

頷いただけの無口が温かい

酒とろり逢いたい人は天の川

淋しさを押し返してる苦笑い

外野から見れば気楽な独り住み

富田林市 片岡智恵子

覚えこんだ誤字が今だに直らない

他人さまを例にやんわり突きにくる

ちぎり絵の蝶は春野を待っている

古傷に触れて夫婦に溝が出来

五百羅漢亡父に似た顔おわします

富田林市 大橋鐘造

取り立てた税の行方は雲の中

前向に歩けば見える風の彩

風去って何もなかった事にする

豹変をしたのは素顔知ってから

我慢した数だけ太くなる絆

寝屋川市 平松かすみ

兄夫婦達者で届く丹波栗

人見知りとれてバイバイさようなら

メモ付けて落し主さん待っている

ホラ吹きのお財布で笑う五円玉

葬儀社の広告つけてバス発車

寝屋川市 森

うれしかったこと寝る前に思いだす

冷や汗がどつと浅知恵見すかされ

すれ違いざまにまともにハックシオン

仏壇の隅っこキウイころがされ

百万本のばらよりかすみ草の恋

寝屋川市 富山ルイ子

大会に共に参加の師の写真

柚子実る冬至の風呂に二つ三つ

オリブも熟し花瓶にさして冬

手袋もマフラー孫の贈り物

ニコニコと笑顔絶やさず来た傘寿

寢屋川市 森 田 麗

羽曳野市 安芸田 泰 子

赤ペンで補足だらけの秋日記
すぐ引火する弱点が胸に棲む
料理の手鈍る夫の無反応
秋彼岸隣の墓地に主が出来
支柱越え小さな花のゴーヤ棚

寢屋川市 太 田 とし子

長続きすると思った弁当箱
視聴率あげてよろこぶスキヤンダル
孫曾孫そのまた孫の数珠つなぎ
マニフェストの化粧で悩むお大臣
現実を得心しないカラスの目

羽曳野市 徳 山 みつこ

台風に平気平気と蜘蛛の糸
手土産を選ぶ再会への序曲
降ってよし晴れてなおよし友と逢う
ゲストルームあつて快適なるホーム
あの世での話はしない老い四人

羽曳野市 吉 村 久仁雄

里帰りした日は母の茶碗蒸し
自分史に特別編を空けてある
人を恋う思いが募る無人駅
一畳のトイレに貼った世界地図
食欲があるうち行かぬ医者嫌い

ぶつぶつと何が不足か蟹の泡
ライバルの方へ傾くやじろべえ
さくさくと素足が砂の私語を聞く
来年も咲かせるつもり花の種
我儘なバラに従うカスミ草

羽曳野市 酒 井 一 壺

ほらごらん僕らの影が重なるよ
便利さの陰に人情薄れゆく
唇の薄い人には近寄らぬ
なにはさて見えぬ心に薄化粧
絵に書いた餅にもあったその魅力

羽曳野市 吉 川 寿 美

沙羅双樹いつかは通る道なれど(夫再手術)
通ってはならぬと妻が呼び止める
三途の川で呼び戻された妻の声
妻に似た地獄の鬼をみて戻り
もの忘れ死ぬのも忘れ生きのびる

羽曳野市 永 田 章 司

予約なし気儘にたどる遍路道
勘当の息子を許す歳となり
町会の役は仲良く回り持ち
片や良し片やピンチの新施策
不満でも反対の無い妥協案

羽曳野市 福田悦子

竹馬の友昔話で夜が明ける
謎めいた男は仮面はずさない
満ち足りた平和の中で古希迎え
うどんなでも食べて帰ると足を止め
同窓会皆な昔の顔になり

東大阪市 笠井欣子

ウエストを弛めてからの安堵感
いいところ来たかつまらぬ話聞く
十月の声にやる気が少し出る
献立を決めてゆつくりテレビ見る
レトルトのお粥ですます老いの昼

東大阪市 佐々木満作

陽光の零れる恵み息を継ぐ
ああ歳月青春の夢まなならぬ
傷心の地球健気に回ってる
白球が汗と涙のドラマ生む
滔滔と瀑布の壺に紅葉映ゆ

東大阪市 北村賢子

身の程の幸をおっとり生きている
看板のみ残しシャッター街冷える
変わり身が早い男で顔がない
しっかりと留守をまもっている夫
それなりに産まれて生きて恙無し

東大阪市 米田水昇

宇宙へと思いを馳せる月琴
ライトアップ青春浮かぶ淀の水
スポットに気持昂る発表会
亡き夫偲び洋酒はシングルで
指やせてダイヤの指輪まわり出す

東大阪市 久米奈良子

生かされた今日八十の幸があり
神よりの賜物と知る入れ歯かむ
お相手を耳の遠さに合わせてる
投稿の清書は辞書の世話になり
さびしさの夜は父呼ぶ母を呼ぶ

枚方市 海老池洋

半分の大根選って買うて主夫
ショッピングカー主夫の買い過ぎ買い忘れ
老老介護休み休みの車椅子
辛口の批判に男磨かれる
ささやかな幸に湯豆腐冷奴

枚方市 寺川弘一

よく光る角度をダイヤ心得る
嬉しい時は口より先に目が笑う
乱視だろうか女性がみんな美しい
洒落た木を歌で覚えた花水木
昔流行った歌しかわたし歌えない

枚方市 丹後屋 肇

病身を起して浴びる月あかり
反戦家酔えば軍歌が天を衝く
蚊も蠅も化身と見える百ヶ日
ブライドが疼いて次点票が哭く
千の風叱咤が時に入り交る

枚方市 伊達郁夫

散歩道三つの影がはしゃいでる
秋風が秋の言葉で寄ってくる
待たされる覚悟で靴を履いている
暖色のひと色でいい僕の虹
新刊書めくるページの手を洗う

枚方市 小林わこ

秋色ごはん偽まつたけも味を出す
あっち向いてホイッ勝った試しがありません
怖いなあ老いがいろいろ邪魔をして
想像以上日々の移ろい飛んでゆく
ご先祖様力ください墓洗う

枚方市 二宮紫鳳

テープ切る孫の笑顔を写メールに
孫パワーもらって嬉しい運動会
両家との仲を深める孫リレー
秋色に染めて立山ツーショット
せせらぎを歩幅合わせて上高地

枚方市 二宮山久

風呂敷を広げすぎたる日のはめつ
ススキの穂ゆれてさわやか霧ヶ峰
血糖値ゆるせと旅のバイキング
汗かいて登りきったるにぎりめし
山登り同じ汗かく空の青

藤井寺市 鴨谷瑠美子

やりすぎす訳にはゆかず衣替え
一年は短かったね腕時計
切れ味がよくて戸惑う花鋏
天気図に遠いあなたを重ねてる
燃えるのは紅葉それともわたくしか

藤井寺市 太田扶美代

人よりも一つ多目に泣いた秋
生きてゆく少し濁った音させて
抱きしめている間に宝石に変わる
編み棒に真面目だネエと笑われた
小細工のできぬ自分がちよつと好き

藤井寺市 鈴木いさお

褒めるだけ褒めて勘定払わせる
深呼吸ひとつ検診結果聞く
脳みその詰まり具合を診てもらう
土曜日は夫が晩ごはん作る
バランスが良過ぎ決め手に欠けている

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

子供等は別の道だと諦める
名月に風呂の湯加減一度上げ
ふるさとは芋名月と思い出す
食欲の秋には辛いダイエツト
転寝にふと目が覚める肌寒さ

藤井寺市 若 松 雅 枝

手作りのブーケでドレス引き立てる
闘病記読んで私が励まされ
積んどいた本を読み出す秋夜長
頂点へ妻が支える長い道
満月と対話しながらワインでも

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

落葉ばかりたまには花をさしあげる
リハビリの足が喜ぶ杖を買う
奥さんに気付かれぬようイニシャルで
ご近所の赤ちゃんの名はみな言える
亡母に似た案山子もいたよ明日香道

藤井寺市 俣 野 登志子

今の世になんでもあつて芋の蔓
アジ五匹タキにフライ骨せんべい
喧嘩後はちよつと雰囲気いい夫婦
時よ止まれ老いたくはないこれ以上
夕焼けが美しすぎて遠回り

藤井寺市 津 田 シルク

あちこちで神を恐れぬ所行ふえ
うどん食べるみんな真面目な顔をして
私でも役に立つらしポランティア
日々安泰つい素通りをする神社
カバよりも大きいお口してアーン

箕面市 広 島 巴 子

世の中がチェンジ我家もリフォームへ
選挙後の白手袋が気にかかる
がらくたを捨ててスベース心にも
年末の景気回復フグを買う
荒れ狂う台風里の古家思う

守口市 井 上 桂 作

物忘れ人に言われりや腹がたち
気配りを止めて己の道を行く
一言が多し悪いと知りながら
老いの字も負のイメージがつきまとい
足るを知る良寛様に見習えと

八尾市 宮 崎 シマ子

ふみきりの地藏ねむれぬ超過密
百姓の六十歳は暇がない
皆に手を合わして母も仏様
電池切れの間に彼女の心掴んどく
嘘包む赤い大きい風呂敷で

八尾市 高杉 千歩

問診もパソコン顔を見ない医者
ストレスが溜ったままのタイガース
気休めのサブリメントを義理で買い
病気になる暇もなかった昭和生き
春以来通院ばかり年終わる

八尾市 笹倉 ひろし

まああの議員に託すわが余命
乳くさい孫との絆嗅いでいる
同情はいらぬシルバーシート避け
目標値少し落せば高いびき
あちこちの小ジワ引き出すハイビジョン

八尾市 生嶋 ますみ

深みゆく秋膝頭から感じ
歳重ね着てみたくなる赤いシャツ
子の自慢たつぷり聞かされるベンチ
打ちあけて胸のもやもや空にする
幸せに夢中になれるものがある

大阪府 澤田 和重

痛かったけれど母の手あたたかい
家計簿のため息積んだ後がある
喫茶店お水お代りして粘る
生きがいにしている趣味の敵がいる
いい笑顔みせると風も変わり出す

大阪府 米澤 淑子

生きて来た今日に感謝の同期会
それなりに老いて昔のままの友
弱そうで強いコスモス見習おう
月下美人二回目開花佳い予感
ブーム去りどこにいろのかタマゴッチ

大阪府 粕山 隆盛

衣替え戦力外の寒い記事
夕映えのもみじスケッチするそぞろ
秋の寺いのちしずかに写経する
カーナビに誘導されるみち音痴
残照に映える銀髪美しい

大阪府 桑田 ゆきの

シングルで気楽トンボと言われてる
さんま焼き警報器鳴る団地住み
時々はスパイス利かすいい夫婦
自分史の余白煩惱埋めておく
跳ね返すボール奇跡のホールイン

大阪府 野田 栄呼

あぜ道で拾った句種温める
老眼鏡体の一部首に掛け
災害へ自助の備えを持つゆとり
ゴミ出し日たまの忘れは齡かしら
見えない影遠い絆をたぐり寄せ

神戸市 伊勢田 毅

秋夜長人生読本拾い読む

天下回る金がそろそろくる頃だ

アルバムを捨てバツサリと過去を切る

金婚式修羅をくぐって辿りつく

招かれて叛旗おさめる意気地なし

神戸市 山田 婦美子

口喧嘩おつと触れそな古い傷

領分を守って家族仲がよい

忘れ虫住みついている前頭葉

ごめんねと言ったら角がとれていた

落ちこまずふつうに生きるむつかしさ

神戸市 木村 貴代子

本人より本人である保険証

カタカナとABCで語られる

日本が心配こわい記事ばかり

ゴミ出しを金木犀に迎えられ

古傷をなめ合って待つ御診察

神戸市 山口 美穂

賛成反対その間にも四分六分

心を彫る鑿を探しに旅に出る

物忘れ誤魔化しきれずてれ笑

お供えへ私の好物買ってくる

無礼講と言われ喋ったばかりに

神戸市 山口 光久

クッションの役に徹しているワタシ

愛をたつぷり素朴な皿に盛っている

一時を無にしてくれる酒の精

明日嫁ぐむすめの酌がほろ苦い

カツ丼を食べて気合を入れ直す

神戸市 田中 章子

お手紙にすぐ返事くるうれしさよ

手足口ストレッチして床離れ

金持ちが境界線でもめている

小気味好くキャベツを刻み句ができる

気づかないうちにわたしもクレーマー

相生市 中塚 礎石

何はとも生きる幸せ夫婦箸

妻と居て愚痴は言うまいコップ酒

歯車が軋む八起きの脂汗

清貧に流した汗は透き通る

野ざらしの父のページを風が繰る

芦屋市 黒田 能子

大福を食べて二人は仲直り

ほどほどの寿命でいいという元氣

花束になったことなどない小菊

まず一步出さねば何も始まらぬ

人の輪が広がっていく趣味ひとつ

尼崎市 春城年代

祝敬老今年も孫のカステラ

鉦山の月は月のみ澄み渡る

日々好日おだやかに過ぐ老いたれば

大波小波にこの身まかせて漂うて

家中の時計ちぐはぐわたくしも

尼崎市 長浜美籠

物腰に正直に出て憎めない

饒舌な風に期待はせぬことだ

苦しくて笑う他なし空仰ぐ

幕切れの余韻は胸にたたみこむ

握手した手から伝わる人となり

尼崎市 軸丸勝巳

難題に時計は待たぬ新政権

政権が代れば見える負の遺産

降る揺れるこの頃地球やんちゃ過ぎ

久し振り出れば梅田の街迷路

コスモスを巡る福祉の車椅子

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭憶いのせまず白い雲

ニセコジャガ永い友情海越えて

新米茗荷ころ嬉しい里の嫁

坐つたら立てぬ悲しさ年齢思う

娘の土産やさしくれるそれぞれに

加西市 金川宣子

美容院耳がダンボに聞くうわさ

近況を一筆入れて出し忘れ

彼の字と一目でわかる掲示板

時時は賢いことも言っている

シングルは殺し文句を聞いたがり

川西市 米原雪子

紅葉が元気お出しと燃えている

うっとりとして見とれて居たら置き去りに

読書の秋拡大鏡が座右の友

型通り積み重ねては技磨く

波風を立てぬA型ばかりいる

三田市 石原歳子

腰掛けて直ぐに舟漕ぐ美容院

歯の治療終つて笑みがこぼれだす

故郷の和紙が悪筆カバーする

美しい季節先取りする和菓子

切り抜いて二度と読まない趣味の記事

三田市 白井二英

動かない動けないのが閉塞感

外科病棟食事はわりといけますよ

しんどいとナースはまさに天使です

注射する角度ナースに指図する

快気祝い出すタイミング難かしい

三田市 久保田 千代

西宮市 藤本 直

コンサート幸せそうな顔ばかり
天使の声聴いて荒んだ心晴れ
スポットライト浴びて野望が色褪せる
わだかまり溶かすいい歳重ねて
現役のうちは過去など振り向かぬ

三田市 北野 哲男

新米を頂きました原爆忌
週三日達者が植えてある畠
駅出ると足が行先知っている
カステラに紅茶仰天した戦後
酒はよし波が寄せたり返したり

三田市 堀 正和

だんだんと遠ざかりゆく女偏
ジャガイモのような顔してお金持ち
忘れないうちにと女よく喋る
着痩せする女らしいという噂
日本晴れ続き充電不足する

三田市 福田 好文

婚前の旅を許さぬ頑固爺
親並と思えど叱る通信簿
腹の中みんなばれたら死刑かも
きつと来る妻が愛しく思う日が
目線より上に置くから物忘れ

古い家これぞ文化と言う香り
なつかしい階段きしむ同じ音
レトロ旅生まれた家はビルになり
人は皆マスクをかけて足早に
ワクチンの順番最後でいいですよ

西宮市 片山 忠

損をした事はすらすら言えるのに
ナイスミドルきっぱり煙草止めました
お見舞に来ないで好きな人だから
千円できっちり止める屋台酒
本日晴天在庫が全部はけました

西宮市 秋元 てる

酒飲みまぬ一生損をした気分
酒飲み娘は嫁らぬと言ってたが
晩酌はゆっくりどうぞ妻出かけ
足まめに老人ホーム探す暮れ
そのうちに磨くつもり石が待つ

西宮市 緒方 美津子

店頭社長も法被年の暮
鈴なりのままで年越す柿あまた
先客は木の葉こおろぎ露天風呂
無事婦国先ず熱燗を所望する
観てやれず月下美人の有頂天

西宮市 亀岡 哲子

あにおとと それぞれ合うた嫁がくる

桑の実が熟しふるさと赤い酒

熟睡をしたら雨風過ぎていた

朗らかな家だ柘榴も笑ってる

この次は曾孫を目指す運動会

西脇市 七反田 順子

新米は仏様からハイどうぞ

ふつくらと優しい雲と握手する

サブリメント勢い付くと信じ込み

追伸に括弧があつてまめな筆

手造りの味噌と菜っ葉で調和する

姫路市 古川 奮水

夕やけ子やけ唄う親子の影のびる

ネオン点き美人の街に様変わり

山嵐蒸饅頭の湯気靡く

お惚気に負けず靴下赤を買う

騙し絵の話題沸騰ティールーム

奈良市 米田 恭昌

うつとりし自画像の筆すすまない

スケッチブック持ったポーズは画家もどき

ヒロインは私のつもり嫁姑

京茶漬食べて絵になるいいペアー

老母はまだ白いエブロンよく似合う

生駒市 飛永 ふりこ

茹で卵消化不良も飲み込んで

酷使したうかつ心身悲鳴あげ

キャンパスで体育系の声ジャンプ

秋の森ポエム生まれる透明度

月に住む母の偉さを仰ぎ見る

橿原市 居谷 真理子

供華枯れてこの悲しみは汚すまい

髪なでてくれたら治るあたまた

ある日ふと敵の顔した坂の町

真実は浮くと沈むの程に

たかが人間餐を転がし生きている

橿原市 安土 理恵

泣きどころときどき突いてくるあいつ

衣更え母の行李も風通し

戻れない時間手繰って夜もすがら

ふくらんだ財布レシートはっかりで

さあおいで手を鳴らしてるエンマさま

香芝市 大内 朝子

まだ夢が湧くのでシャンとする背骨

はらはらと泣けばすっきりする魔法

悔いばかりまだ人間の未完成

道草はいい人生のかくし味

トンネルを抜けて眩しい陽を浴びる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

和歌山市 木 本 朱 夏

歲月をゆるりと解く木守柿
釣瓶落とし慌てる事は何もない
幾度の気まま重ねて来た無骨
張り替えの利かぬブライドあしんど
言い勝ってドキドキしてる虚栄心

和歌山市 古久保 和 子

和歌山市 武 本 碧

雑賀衆いまも火縄の匂いさせ
シャッターを半分開けてタコ焼屋
結局は試食しただけ爪楊枝
芋と栗どちらも好きな笑い皺
川柳はいいな友達北南

和歌山市 田 中 み ね

和歌山市 喜 田 准 一

嫁にメロメロそんな息子で情けない
スタイルなど言ってられない腹時計
ギブアップ老々介護とはこれか
値段みて松茸さまを後にする
ひと言でいってあなたは苦手です

和歌山市 松 尾 和 香

和歌山市 福 本 英 子

ふるさとは菩薩も和む海と山
全国を旅して食べる五七五
健康を招く女神に巡り合う
トンネルを抜けた人生ひとり旅
スランブを糧に長生きする私

三つ編の少女時代はかすみ草
前髪を切って出直す向かい風
いきいきと弾む嘘つきくすり指
二枚目の舌を磨いて立ち直る
胡蝶蘭の出番遠のく不況風

鬼灯に幼心をふくらます

冷や水を浴びてしまった軽はずみ

飴と鞭混ぜてまさつを柔らげる

あっぱれな弁当男子ここかしこ

バリアフリーだけど敷居の高い家

ジャンボくじ当ればどんな声を出す

この辺で欲を放せば飛べそうだ

引き潮の男は追わぬことにする

屋台からはじまっているはしご酒

よい事があつたか声に張りがある

肥後守出てきた亡夫に知らさねば

岸和田祭り案内貰い血が騒ぐ

予定よりお米が減って孫ら去ぬ

溜息の数雑草に嗤われる

決断がついて箒目たった庭

和歌山市 松原寿子

君の記憶をなお歳月へ積み重ね

その先を知りたいメール待つ夜長

パネル回転ニュース続々あふれ出る

信じ切る前に風向き確かめる

肩書きを脱いで来いよと招かれる

和歌山市 岩本美智子

満月に祈るわたしの胸の森

お月さまあけびもひとつ如何です

文才がなくて夜長をもてあまし

我が住人クモとヤモリとコオロギと

母子加算やつぱり離婚いたします

海南市 堂上泰女

子を選んだ花嫁さんは日本一

預かった釣書を渡すタイミン

母らしい姿に見える秋の雲

贈った芋お菓子に化けて返される

妊娠を告げる娘の弾む声

田辺市 岡本昇

築百年喜怒哀楽の黒光り

ふるさとに話し相手の山がある

童歌涙で歌う歳になり

フジヤマのトビウオ永久に水しぶき

芋麦を食べて胃袋ピツカピカ

第30回 ときせん賞作品募集

- 作品 雑詠二句（未発表句）
選者 大野風柳 河内天笑 赤井花城
森中恵美子 小松原爽介
投句締切 平成22年1月22日（金） 消印有効
発表 平成22年4月号誌上
賞 ときせん賞一名 準ときせん賞二名
佳作七名
応募料 千円 定額小為替又は100円切手10枚
投句用紙 便箋大（B5サイズ）用紙に作品二句、
住所氏名、電話、所属柳社を明記
投句先 〒664-0836 伊丹市北本町2-69-2
山口千尋 宛
選句方法 無記名清記の上、選句
一句ごとにその合計点（平拔2点・
五客3点・三才4点）で順位を決め
ます
入賞者は平成22年5月9日の川柳大
会で表彰します

時の川柳社

第3回 触光時事川柳誌上大会

- ◎テーマ「2009年」
◎選者 樋口由紀子（岡山） 木本 朱夏（和歌山）
大友 逸星（宮城） 田口 麦彦（熊本）
木津川 計（大阪）
◎作品 5句（新作及び既発表作も可）
◎締切り 2010年1月31日
◎会費 1,000円 発表誌込み
現金か郵便振替
「川柳触光舎」02240-8-82005
◎投句先 〒038-0004 青森市富田2丁目7-43
野沢 方 川柳触光舎まで
◎賞 大賞（各選者特選より、抜句数の
もっとも多い作品に決定します。）
特選賞（各選者特選）
秀句賞（各選者秀句）
◎発表 「触光」17号（10年6月）

川柳塔の

川柳讃歌

60

木津川 計

ご主人が取りそうだからせぬ電話

片山 忠

私たちは進展する文明の袋小路で個の穴にこもる。忠さんの掛けた相手の家には電話が一つしかない。そんな家も珍しいが、今や行き渡った携帯・メール文化は、家族を引き裂いてしまった。通話を誰にし、誰から受けているのか、夫婦は無論、親子も分からなくなつた。「秋深し隣はなにをする人ぞ」はむしろ牧歌的で、家の中で「おまえはなにをする人ぞ」になつたのだ。文明は人間的絆を断ち切りながら進展する。

生きるために働く顔が増え

関本 かつ子

「働くとは端（はた）を楽（らく）にさせることである」とは、むろんこじつけの俗流人生論だが、労働の持つ積極の意味をとらえてはいる。

無目的に働く人はいまい。が、かつ子さん

は「生きるためだけ」の動物的生存、ただそれだけの、憂うべき人たちの増えている現実を撃っている。日本の貧困率は世界4位。低所得の非正規雇用労働者は02年の29・4%から08年は34・1%に増えた。私は泣きたい。

階段を上る階段だけを見て

谷口 義

「生きるためだけ」に俺は働くものか。栄耀栄華の人生を必ず実現せん、とその男はステータスとしての階段を上るべく、若いときから脇目もふらず上昇志向意欲を燃え上らせてきた、と解釈できないこともない。

が、義さんは老いて衰えた脚力を嘆いているのである。つまりくまいと階段というより足元だけを見て、喘ぎながら上るのである。この句をこう受け取るのも、私の階段の上り降りの姿に他ならないからだ。嗚呼。

酒飲めば路郎水府も呼び捨てに

川端 一歩

ある日出版社から「先生」と言つてまことに丁重な電話がかかったから、作家・安藤鶴夫はその出版社を訪ねる日時をこころよく約束した。当日、行った編集部の日程表をふと見ると、「〇時、アンツル来社」と書き込まれていた。陰で人は何を言っているかしれない。まして酔えば、である。太平記に言つて

「その心をうかがひ見むために無礼講といふ事をぞ始められける」と。一歩さんは真面目な方だが飲めば人が変わる、のであろう。

猛犬に注意それより恐い人

中村 れんげ

玄関先の犬に噛みつかんばかりに吠え立てられて郵便配達人がひるんだ。中から声が出て、「大丈夫、大丈夫、狂犬病の注射打つたあるさかい」。猛犬より恐い人の本末転倒な笑い話である。そんな猛犬といえども虎には敵わない。その虎より恐いものとして孔子は「論語」で曰く。「苛政は虎よりも恐し」と。何が恐いといつて、安心して老後を送れない政治ほど恐いものがあるうか。

消えぬままアルバムにある遠花火

中井 アキ

東の間の光彩を夜空にひろげて花火は消える。消えるから見るのであつて、美しいものの生命は短くなければならぬのである。

アキさんは美学としての花火を詠んだのではない。消えない遠花火は美に悖るのではない、恋・恋ころをとめめかせて彼と眺めた遠花火の夜をいつまでも残しておきたいのだ。詩人・山田喜代春の詩句にある。「こんないい夜をしるすため夜空の端を折りました」

〔上方芸能〕誌発行人

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

書置もなく料理人河豚で死に
斜陽族墓地の引越しも困り
公報をまだ信じない信じない
附録だけでエエと編輯侮辱され
主婦としての投書を書いて胸にはせ
菊植えていても社長は俗に生き
病院の廊下財布のまま渡し
すしだけであんなにしゃべる妻の客
愛情のしるしの名古屋帯をしめ
故郷ではただ物質で評価され

流れ作業晩のおかずを思いつつ
よいとこへ来たと見積もりまでさされ
うすぐもり誰か来そうで来ぬ日なり
火の見櫓これが職務か春の空
立ち回りの稽古もめしの種のうち
水車小屋ここから隣り村になり
苦の世界めし一椀をめぐまれし
会話科に家出して来たのもまじり
遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る
女またお皿の上に眼を伏せた
諸なんかなどと敬遠されはじめ
手の染まりそうになすびの紫よ
他殺やろうと云い云いたばこすいつけた
脱穀機ドドドドドッと日が落ちる

自選集

板尾岳人

川上大輪

葬四つ黄泉へ通じる白い道

恋人と別れてからの青いバラ（恋人満二歳）

永遠の恋を忘れぬ赤い靴

恋人でありけり命儚くて

もう一度抱きしめてやりたきや悔

奥田みつ子

木村あきら

後悔をする度疼く親知らず

亡母よりも長い縁の姑唄

苦勞した自信は揺らぐことはない

秋の天眼鏡はずしておおらかに

身辺整理出来ないままに年暮れる

河井庸佑

小島蘭幸

お互いがもう一息で妥協案

立ち消えにする魂胆を見透かされ

昇進の辞令が待っていた苦惱

優柔不断背中を押してくれた父

見切り発車受け皿がなく悩まされ

ゴミの日にゴミを出せないリズム感

そうかそうかとなんにも言っていないのに

内緒話をしてると亀が浮いてくる

ノーマイクきつと何かを隠してる

影法師親の期待に背を向ける

自転車のパダルが重い北の風

天までも望みは捨てぬ奴ダコ

南海の孤島で散った戦友唄

磐石の構え風垣出来上がる

愛猫が俺の帰宅を待っている

孫二歳蘭幸さんとまだ呼ばぬ

鯛の粗男ひとりの昼に炊く

風がよろこぶ金木犀が咲いている

柱時計は癒してくれていたのです

心豊かに妻と終電まで遊ぶ

小西雄々

秒針のリズム師走へせかすよう
元氣よい文字で病氣の見舞書く
甲子園で敗れた悔しい土を持つ
花の名はわからず譲る花図鑑
敗戦記深い傷あともう見せぬ

斉藤 姦

触れ合いを大事にしてるおじぎ草
この黒い土一筋に生きている
触れられずしほむ風船だつてある
産みたての卵両掌に温かい
へらへらは決してしない鬼あざみ

塩満 敏

年賀状書く年末がやってきた
ぼろぼろと知人天国へ逝き給う
紅白を反省子聞いている
来年は真面目に川柳してみたい
歳時記に鶴彬忌載る夢を見た

新家 完司

顕微鏡で見ると食えないヤツばかり
にんげんを愛しく見せる望遠鏡
取り澄まし補正重ねて人の顔
大望はとうに忘れた赤字バス
手のひらの皺を氣にしたことはない

恒松 町紅

思うほど進まぬ皺の手に頼る
長生きのコツなど知らぬ爛徳利
いい知恵はないが相談聞いてやる
一日を自由に使う有難さ
うっかりといつもの癖が出てしまい

津守 柳伸

枯れ葉舞う人恋しさの吹き溜り
赤ん坊にオーラーがある百面相
何着てもピツタリ映える赤い羽根
台風に一喜一憂する独り
不況風弾き飛ばせる五七五

遠山 可住

富士山がちよつと動いていたらしい
領収書はいらぬ神さま仏さま
金のある顔は見えないボランテИА
もう従いて行けずむかしをくり返す
生憎の雨が隣りは慈雨になり

都倉 求芽

秋なのに茶昆の煙に湿る空
群れて咲く寂しがり屋の曼珠沙華
水少し冷めたい墓に掌を合わせ
ジョッキから溢れて海へ続く夢
無表情一直線の回り道

土橋 螢

生きる死ぬ夢まぼろしの中にあり
芸術のこころを癒す墨をする
惜しまれて死ぬ武士道を知っている
老眼鏡かけても見えぬ恋だった
報恩感謝しあわせが落ちてくる

中原 諷 人

あれやこれ仏ごころの些少なり
偽りの風にバラバラ銀杏の実
山が炎え人の噂を撥ね除ける
煩悶のこころに除夜の鐘の音
丹念に介護サービス去年今年

西 出 楓 楽

祈りみな届けばつまらないだろう
心配は無用死ぬまで生きられる
十三回忌みんなで笑うのが供養
祝日はもっぱら家に閉じ籠る
七十歳いまだ迷える小羊で

仁 部 四 郎

個人主義いや個性主義です甲子園
十八をみんなで鍛え個人主義
個人主義ATMの長い列
個人主義公衆電話消えてゆく
個人主義やはりそこから民主主義

林 瑞 枝

ばんざーいの渦に揉まれる御辞儀草
掌中の珠も恋して弾くピアノ
三日月と蔵の今昔語ろうよ
胸を打つ世慣れた世辞についほろり
嫁の機転サバイバルゲーム観るような

前 たもつ

大チエンジ早い師走を生きている
幸せより生き方を問う聖書
パンのみに生きる生き方笑えない
清貧に妻と仲よく生きている
共存する万物あつて生かされる

三 宅 保 州

振り向くと首振っていた除夜の鐘
除夜の鐘五臓六腑に沁みわたる
ロスタイム告げるが如き除夜の鐘
もう一人の私が行く趣味の道
振り逃げから運が開けることもある

宮 西 弥 生

たつぷりの愛に退屈だけ残る
真白に戻して秋の男と会う
遠近に秋は迷いの多い辻
引き返す勇氣に迷い吹つ切れる
清算を迫れば早い秋の暮れ

八十田 洞庵

創業者バトン他人に渡す智恵
老骨に鞭など打ってどうするの
火や水の掟に耐えて母の皺
枯れたふり土に眠って春を待つ
因習へ脱皮の口火切った嫁

阿 萬 萬 的

限界だ自民も電池切れらしい
ピンボケの妻が女神に見えた日よ
役不足だけとお前が長男だ
国交のパイプ詰まって来たいくさ
言い残した事あり棺の釘を抜け

年ですななるべく軽い道をとる
無視されてもいいさ無難な方へ避け
年考えずとことんねばっている頑固
限界をさとりこの先考えず
休み休みにしたらと妻がケチをつけ

川柳塔のぞみ
12月句会

日時 12月22日(火) 13時
場所 銀座区民館(地下鉄東銀座3番出口)
宿題 「威張る」「すかつと」「グッドラック」
各2句 「自由吟」1句
欠席投句 12月19日 必着 播本充子宛
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須崎 豆秋

あ、大空生れては死に生れては死に
長靴の中で一匹蚊が暮らし
手を振って見ても手ブラは淋しすぎ
たのしみに満つ湯豆腐がうごき出し
病人へみんなたかつて嘘を言い
白骨ともならば涼しからん
幻へ春の蚊ひとつ横切れり
借金の高も流石は名士なり
質入れに行く人もあり戎橋
火葬場は火をつけてから夕涼み
桃の字が思い出せずにおかしけれ
児が追えば鳩は歩いて逃げるなり
中の島身の振り方へ蟹が飼う
洋館へ先祖の槍の置きどころ
大毎も止まり豆腐屋も止まり(大風水害)
直角に質屋の中へ折れ込んだ
寒鮎は身持ちのままで煮詰められ

初版 昭和29年11月発行
再版 昭和30年4月発行
復刻版 昭和60年9月発行



川上大輪選

大阪市 尾崎 ゆめ

ただ風が窓を叩いただけのこと

袖胡椒秋と男を調理する

負けるものとフランスパンを厚く切る

贅沢は言わぬ心が欲しいだけ

間違いを探しあぐねて座れない

落ち葉の上で静かに腐るものがある

阿波市 三浦 千津子

満面の笑みで急所を押さえられ

賑やかに騒いで孤独溶かし込む

成り行きに乗って見るのも時の運

時効だと知りつつ言えぬ罪ひとつ

スタートの遅れ努力でカバーする

仲直りしたらと月が真ん丸い

大洲市 花岡 順子

何もない平和大事にして生きる

ご一緒にメタボが誘う甘いもの

喝采のない裏方を生き続け

二次会で本音を吐いたのは内緒

野仏が笑って嘘を聞き流す

大将になったピエロが手におえぬ

ストレスは毒だと今日も吞んでいる
佐渡市 高野 不二

今更と思うパソコンなでて見る

女房が機嫌いいから今日は吞む

パンパースしても旅行に出掛ける気

父の分母がしゃべって間が持てる

補聴器は嫌い聞かない事にする

札幌市 三浦 強一

宅配のサンマはピンと立って来る

ふる里で大往生をとげる鮭

白米に涙した日を忘れない

ふる里の新聞まとい来た野菜

柏手は神に聞こえるように打ち

天国の招待状を待って老い

万札の顔を知らない貯金箱

香南市 近 森 功

八十路坂曾孫をだいて振り返る

七転び八起きがきかぬ齢となり

なぜなぜはママに聞けよとうまく逃げ

遺言は愛していたと書いておく

無い袖を振って聞いてる除夜の鐘

明石市 粧 谷 和 郎

ちっぽけなブライドなのに捨てられぬ

小さいが一善積んでいい笑顔

小遣いが減って財布が欠伸する

ポケットに子供の頃の夢さぐる

大河への夢を抱いてるひと雫

鉛筆が丸くて運が決められぬ

奈良市 尾 畑 なを江

そろそろとまだまだの日々冬支度

そういえば嬉し泣きなど忘れてた

迷ったら風にあたって思案する

評論家責任とれぬ顔ばかり

両の手を開けふところ深うする

しなやかに生きて至福のひなたぼこ

和歌山市 福 井 菜 摘

手つかずの明日に心をはずませる

端役でも歩んだ道にもつ誇り

擦り切れた辞書が余生をはずませる

気休めなど父の辞書には見当らぬ

一人旅スリルな風とすれ違う

荷をおろし妻と小さな旅をする

泉佐野市 稲 葉 洋

不景気を疑う暮れのショッピン

医者代と年金だけの決算書

採点はママに任せる大節季

百九も煩惱がある何としよう

そば吸りこの一年の泣き笑い

改まる日まで拭いきれぬ垢

神戸市 木 村 忠 義

雲は皆好きなこととして生きている

都会でのオアシス 書店だと思ふ

公衆の電話見つけるのが難儀

スーパーで買い物兼ねてウォーキング

十年目また買い替えの多い時期

日の光浴びて憂鬱追い払う

竹原市 國 實 力

老いてなお等身大の欲をもつ

老いてなお内と外との顔をもつ

ハッケヨイ口は土俵のど真中

休刊日ちよっぴり早く起き過ぎた

古時計ときどき俺に似てさぼる

えびす顔見たさに肩を揉んでやる

北九州市 小松 紀子

お一人様先行き不安な老後です

興味ある極楽地獄どんな処

食欲に翻弄された肥満症

独り旅生きる重さを併せもつ

亡き母を慕いて三十三回忌

横浜市 川島 良子

秋の蚊よキミも必死に生きている

インフルに振り回されている行事

ありがとうごめんなさいのいい絆

三連休ベビーギャングをお出迎え

受験票老眼鏡で確かめる

横浜市 巖田 かず枝

読み聞かせ絵本の中へ旅をする

化粧品買ってぶるぶる期待する

切り詰めて四角四面のマニフェスト

ワンちゃんのパパと言われている夫

男手はあるが出番は妻ばかり

豊橋市 藤田 千休

独身で知らないままの倦怠期

離婚して孫と会えない刑に遭う

不景気の快気祝いはまだ出せぬ

二股を通話履歴があげさだす

びちびちの服が許さぬ深呼吸

岐阜市 平野 あずま

敵失を待たずヒットを打ち給え

ミュンヘンの思い出語る大ジョッキ

収穫の陰で過労死した案山子

満月へ妻も雅びなシルエット

若い娘が混じる足湯に癒される

大阪市 山本 加お里

手は出さず見守るだけの難しさ

バスツアー気兼ねのいらぬ一人旅

何時までもバトン渡せず親の脛

あなたがいてわたくしがいる鶴と亀

敬老会薬離さず花見宴

大阪市 太田 としお

敗戦を想い出させる団子汁

のばしたら届くところに薬ビン

背のびした家のローンに責められる

お母ちゃんお客によつて声かえる

CTで輪切りにされた古い恋

池田市 上山 堅坊

体調を息の弾みに知らされる

弾んだらあかんこれ詐欺かも知れん

びつたりのサイズがなくて手足を切る

びつたりの亡妻だったなと今思う

安ければ産地ラベルが疑われ

川西市 日野岡 和之

吹田市 二宮 栄子

みなまでは言わずにそつとおもいいやり

たらればを捨てて男の独り旅

雑魚でいい美味い魚で内祝

十重二十重まだ積み重ね向う疵

天が泣く下天の罪ぞ温暖化

河内長野市 木太久 正一

青春の鼓動今でも忘れない

八十を過ぎて一年短かすぎ

里帰り待ってた母のうずら豆

うなぎから秋刀魚に移る台所

一杯のビールで癒す下戸の舌

堺市 羽田野 洋介

まあいいかどっちにしても無関心

前向きもいいが時には足元も

昔のことつい口にして嫌われる

酒止めてもマイク握れば酒の唄

真つ赤ではなくてもすぐにばれる嘘

堺市 遠山 唯教

掛け違う釦に老いがしのびよる

割り勘を他人行儀にする夫婦

マンネリに浸ると知恵がまわらない

相席のローカル線で聴く訛り

真つ直ぐに生きろと残る父の声

平凡な幸せでいい手巻きずし

時代おくれ捨てられぬまま吊っている

夢一つ持ったまんまで終りそう

あれこれでだんだん分かる友が増え

誤字脱字あってもうれし祖母白寿

高槻市 片山 かずお

無い袖を振れとつまらぬ義理がくる

ためらって飲んだ言葉が胃で愚図る

明日は我が身と思えば飲めぬ通夜の酒

ていねいな言葉に棘の二つ三つ

無の境地求め五欲の森にいる

神戸市 山崎 武彦

自画像のところどころに傷のあと

点数が全てでないと言い聞かす

ありがとう乾いた胸にいい響き

進軍ラッパ響かせ妻のお見送り

ひびき合う夫婦で少し疲れてる

加東市 安達 厚

お祭りはすんだ寒さに備えよう

出来たんと違う作った言うてくれ

わあきれいやはり野に置け曼珠沙華

秘めごとは無いと大きな嘘を言い

ひよろついてああ八十路かと自覚する

宝塚市 丸山 孔一

ゲームでも出来るほど持つカード類
遺言書書いておいてと妻が言う
引つ張って答の前にコマーシャル
逃げ道を探しておいて売る喧嘩
父の歳越すにもバーが高すぎる

奈良市 岩本 浩二

煩惱を捨て切れぬまま枯れすすき
古希過ぎてまだざらざらの欲を持つ
招かざる奴が一本下げて来る
立ち話お連れのポチも欠伸する
新聞はテレビ欄から見る老後

奈良市 矢野 良一

面従腹背ちよつとまゝるくなりまして
メモ帳に書いた自分の字が読めぬ
散歩道稻刈る音が心地良い
田の黄金赤く縁取る彼岸花
人手から金におわれるコンバイン

和歌山市 根田 よしこ

いい天気老母も鼻歌上機嫌
毎日はじめの一步母卒寿
同期会くすり自慢や孫自慢
背伸びして名月見てる萩すすき
不況でもママのえがおは暖かい

和歌山県 森下 よりこ

他人の子めつたなことで叱れない
ここちよい目覚め私はまだこの世
一年目よりは二年目コスモス田
その日まで無限大です母の愛
黒大豆今年の出来を褒めてやる

和歌山市 磯部 義雄

みかん山秋が広がる口の中
ふるさともマスク溢れるクラス会
アメリカのくしゃみマスクで撥ね返す
寺社巡り少し気になる脛の傷
見合だが好きな女房の介護する

和歌山県 小谷 小雪

どきどきの前に腹ごしらえをする
佳い日だな方程式がよく解ける
ちよい悪の時間も食べて走り抜け
眠る前今日一番の顔つくる
今日よりも笑いましょうねおばあちゃん

紀の川市 北山 絹子

正座してちよつと気になる足袋の裏
一冊の本で夜長を救われる
お互いに無口のままで見るドラマ
自分史へ少し光を与えたい
泡立草きれいに咲いて嫌われる

紀の川市 宇野幹子

脳裏からそれじやと記憶去つてゆく
失業のしない軍手を買ってくる

笑わねば鬱も涙も胃に溜る

蒼天にとても無口な昼の月

他所ゆきの声にまんまと引つかかる

岩出市 藤原ほか

招かれて座る椅子にも罨がある

前置きが長くて喰重くなる

シングルになって気がつく子の温み

歳月が全てを包み込んでゆく

シングルへ警笛鳴らすワンルーム

鳥取市 田中一眸

鼻も目もバランスとれて今の顔

梅干しが必ず入っているむすび

好き嫌い言える日本に住んでいる

変革期あえて空気を讀みません

紙ふうせんため息集め弾まない

米子市 加藤正二

辞書しらべ拡大鏡が手放せず

独り者夢が楽しみさあ寝るか

先のことわからないから生きられる

ドッグ入り病探してどうしよう

つるし柿老いの手づくり沙汰を詫び

鳥取県 斉尾くにこ

夢の世へ深く落ちたい月夜です

青空に書くとりとめも無き日記

けだるさの机に過去がこだまする

一瞬に釣られたカメレオンの舌

しょうがないまたも尻尾を切り離す

松江市 山根邦代

怠けではないのに出来ぬ時もある

すらすらと出来て嬉しい一行詩

古里は元気の素があるみたい

見渡せばあちらこちらに光る技

脈やかに絆が揃うバースデー

松江市 柏井日出子

年忘れさせるはリオのカーニバル

CO₂減らす日常くらしにも

パーカーを着て友人と同じ位置

色気よりぬくい綿入れ冬のもの

何一つそ申すまい冬の月

宇部市 高山清子

売言葉うっかり買って残る悔い

背は丸くなっても角は取れぬまま

打たれない杭の高さで世を渡る

適当に打った相槌的にされ

こだわっているから嵌る落し穴

竹原市 六田 半 徳

マニフェスト甘い話が首を締め
新議員オセロゲームを忘れずに
国民は政治の動き疑視中
ガムシヤラに削り過ぎたら芯が折れ
名優は多く語らず目で話す

竹原市 土 井 輝 恵

彼岸花ユートピアには咲かぬだろ
私に似てて叱れぬ孫と居る
五十年夫一筋は奇跡です
三猿は五分と持たぬ夫婦です
呆ける前樞に入れる物がある

雲南市 武 島 ちよえ

留守電に敬語で話す味気なさ
軟らかな日射しを追うて立話
優しさが心の隙間埋めてくれ
納豆にオクラ食べても医者通い
考えている間に秋の陽は落ちる

雲南市 菅 田 かつ子

物売りの電話の声はやさしすぎ
老い二人部屋べつべつに見るテレビ
おさまってきたのか返事してくれる
メンバーの集いの果ては呑む話
しげしげと見詰めて哀れどなたはん

今治市 渡 邊 伊津志

前でなくこれからでない今日の今
水は木に抱かれて美味になる季節
結論を持ち越すために明日がある
使われる体に安い汗の価値

札幌市 小 沢 淳

たつぶりの妻の小言を受け流す
抜かれても抜き返すのはもう止めた
ペンネーム人格がらり変りそう
実弾を込めると的が欲しくなる

草加市 飯土井 健 翁

人遣い上手な人は褒め上手
川柳のネタを作るに本の山
短冊にすれば凡句も光り出す
黙々と汗をかいてる人が好き

栃木市 岡 野 すみれ

百歳の笑顔求めるものがない
余生より余命告げられ身の震え
いい村ね鍵をかけない家ばかり
楽もいい苦もいい共に大切に

昭島市 野 口 忠

永田町若葉マークがどっと増え
ちよっとした風邪もマスクがしゃしゃり出る
独り居になって埋み火掘ってみる
相槌が無性に欲しいひとり旅

東京都 井上 つよし

ああらお久し振りで始まる妻の長電話

お喋りをして来て妻は若返り

あだ名しか思い出されぬ久し振り

休耕田も秋には秋の花が咲き

東京都 高岡 弥生

雨降るが洗濯量は変わらない

うれしいな学級閉鎖で朝寝坊

雨続きもうウンザリの送迎よ

うそでしょう今度は台風また休み

横浜市 長島 亜希子

友の病気が土産話のクラス会

アナタのためなのです心鬼にする

米研いだけで大きな顔をされ

青い鳥探しつづけて今日がある

藤沢市 加藤 スズコ

不況にも心豊かに実る秋

ナツメロに遠い青春よみがえる

野球帽かぶる息子も早初老

食欲も老いを支える腹七分

静岡市 渡辺 芳子

一泊の箱根旅行も医師の指示

箱根連山観光客を眺めてる

海賊船スワンが手をふる湖の旅

豊かさを求め名曲注文す

江南市 脇田 雅美

銭湯のお湯が回って同じお湯

言わないで知らぬが仏裏話

和から洋お口直しにシャーベット

にこやかな儲け話に落とし穴

京都市 藤井 文代

いいわよと言っているのは口でだけ

主導権持つ妻頼り日々安堵

捨てせりふも忘れた頃に揺れ返し

ひと匙が欠ける違いの分る歳

京都市 清水 英旺

介護士の熱い心に頼る日も

父よ母よいま彼岸花盛りです

三日月を眉にして画く福笑い

うつうつと鬱の字画を数えてる

大阪市 萩原 大朔

匙投げた医者を尻目に生き延びる

目を細めこれが生甲斐子の育ち

ふる里は炉の間の梁の黒光り

手を延べてそつと撫でたい里の山

大阪市 寺井 弘子

シングルに歯ブラシ二本ある秘密

不況風受けて悄気てる招き猫

お若いと言われ鏡に問うてみる

患ってやっぱり丸い顔が良い

大阪市 安藤 なつこ

若いからシットするとは限らない

若かったからやれたのと笑う母

秋の夜に荷風のラジオドラマきき

秋に咲くハイビスカスの自己主張

大阪市 吉川 弘泰

ともかくもやってみなはれマニフェスト

神棚に今年も無事と札を言い

大掃除へそくり見付け赤提灯

せち料理年金足らず値を下げて

大阪市 笠嶋 恵美

私にヘルパー出来るエネルギー

家事もする息子が祖父に似てうふ

南座に老人ばかり私も

雨の糸寺の風情を倍にする

大阪市 片岡 松枝

いらちとぐずがせめぎ合うてる胸の中

忘れごと度重なれば恐くなる

やりっぱなしちゃんばらんに自己嫌悪

楽しさは指折り数え五七五

大阪市 橋村 容子

秋更けて艶のある句が湯気の中

神無月つるべ落しで大慌て

秋サンマ隣の夕餉みえてくる

寒暖に何はともあれ冬仕度

大阪市 松田 聰

幸せがどこにあるのか気づかない

五連休体重計は正直だ

ありがとう母の口ぐせつぶやいた

兄弟が仲のいいのを母願う

大阪府 高木 道子

線香が土産になった亡母の家

風呂敷の価値を見直す御重詰め

お喋りな指のメールはなあなあ語

喜んで良いのか土産の惚け封じ

大阪市 平井 露芳

チルドレン捨ててさつさと座長逃げ

串かつにドボルザークが乗つとられ

喜寿祝い団地がくれたバスタオル

二代目も謎を残した中川家

泉大津市 助川 和美

また後で孫と指切り騙せない

旅好きの母の口癖死に土産

梯くぐりメタボを忘れ参加する

イタリアンよりお好み焼きが口に合い

茨木市 島田 誠一

生きたまを隠さず見せて子等に問う

核廃棄核の傘から吠えています

親切と好意の距離にある迷い

スチュワーデス機外で笑いと縁が切れ

河内長野市 山室光弘

少しだけ後ろめたさの残る恋

遺言書書きたいけれどネタがない

三寸でその気にさせるすごい舌

そもそもは仲人口にのせられて

河内長野市 山本莞子

受け売りの話大きく育てます

妻の角少し引っこめ開ける鍵

金少し握ると男目が泳ぐ

人生に飲まなきゃならぬ泥の水

河内長野市 内海綾乃

夏も冬もインフルエンザ好きですね

何時の間に見るだけと言いつつ買わされた

キャンプして夜は星座の名前知る

マスクして似合いますよと苦笑する

河内長野市 針生和代

塩少し効かせ夫婦の仲直り

妻の地雷うつかり触れて火傷する

甘くみた老いに膝から攻められる

残照へ少しずつ自我折りたたむ

河内長野市 木見谷孝代

甘言へつい触角が向いている

時どきは甘い自分の錯落とす

ポジティブにやれと言いつつ裾を踏む

遊びすぎ思考回路がショートする

河内長野市 辻村洋子

小指立て失敗したと自慢する

孫の風邪二泊三日の置き土産

堂々と弁解してる憎らしさ

いつもより綺麗な友のコンサート

門真市 矢阪英雄

コンセプト人の悪口封じてる

コンセプトうれし涙は忘れない

コンセプト少しずつでも前進だ

コンセプト涙見せずに終りたい

岸和田市 中岡香代

断りを知らない夫の午前様

あまりにもさばさばしてて疑われ

最後まで使い切れないいちごジャム

駄駄をこね買わず手口の三歳児

堺市 澤井敏治

朗らかな笑顔の妻が気にかかる

朗らかに暮らすつもりがまた小言

明日からは禁酒するぞと二日酔い

慰安バス出発前に酔い始め

堺市 近藤治子

濃いお茶で秋の夜長が冴えてくる

気合い込め化粧濃くして行くデイナー

アラジンのランプ擦って見たい夜

当て擦りされてるようだ知らんぷり

豊中市 荒巻 夢

辛いことあるからいつそ浮いたふり
言いたいこと多くてメールもどかしい
理想論焼かれる日まで抱いてゆく
大型のテレビで世界旅行する

豊中市 源田 啓生

状況はどうあれ秋刀魚焼く煙
腹一ぱい食べて不足を言うひとり
甲子園今年も熱気ありがとう
ベッドから落ちて天下は秋と知る

富田林市 古田 千華

気難しい消化不良の石ひとつ
コンピューター君が一番手間かかる
とんがった心をほぐすアマリリス
荒畑に難しいこと言うでない

羽曳野市 松本 静子

美しいコスモス揺れる休耕田
虫の音をきけばだんだん淋しさが
猫の恋ミャオミャオミャオとやかましい
この夏は旅にも行かず家の中

羽曳野市 宇都宮 ちづる

台風爪痕詫びる青い空
友の愚痴聞いて夫の良さ見付け
メール打つ指先少し脳鍛え
ぞんざいな言葉そのまま真似る二歳

枚方市 小川 良吉

たてまえにゆれて本音は押し込める
そここで本音聞かれる縄のれん
飲み過ぎて本音がぼろり朝怖い
民主党へメール送るか彼岸花

枚方市 坂本 ミヨノ

年金のぐちこぼしてる妻元氣
合格で酒と涙の乾杯だ
老人のくどくど話すえびす顔
欲みんな捨てたとおんな着飾って

寝屋川市 小嶋 みさと

秋晴れに弁当レシビノートする
台風が去って被害の置土産
不況風乗り切るすべは買い控え
秋さやかコスモス揺れて故郷恋し

寝屋川市 岡本 勲

孫がくる財布の鍵は締めとこう
アンテナを一つ減らしてみる余生
希望の光もとめて今日も坂登る
貰う貰わないで兄弟姉妹敵味方

箕面市 寺井 柳童

お洒落して彼と出かけるニューハーフ
飛び乗って女性専用どつと汗
華やかな王手飛車よりと金攻め
すれ違いマスクの顔を振り返る

八尾市 中島春江

鼻ちよつと上むいた娘の愛らしさ

三億円当ればもめる遺産分け

そぞろ寒目立つ閉店裏通り

家に来た論吉とまらずすぐ出かけ

八尾市 赤木妙子

一円の釣りでもにこやかに受ける

老々介護サンマを猫と半分こ

強気にも弱気にもなる処世術

茄子減ぶ天道虫の底力

八尾市 寺川はじめ

こつそりと妬心を流す仕舞風呂

マニフェスト城主の首を締め始め

他人とは思えぬ里の友温い

FA宣言妻もしそうな寒い秋

八尾市 田邊浩三

曲つても夫は大黒柱です

大漁の旗も値崩れ氣にしつつ

踊り手をケイタイで呼ぶ秋祭り

爆ぜる場所探し求める腹の虫

八尾市 前田紀雄

万が一の練習をする立ち泳ぎ

間引するリストラじゃ無く冬野菜

無くなればただ貰うだけ便秘薬

笛吹けど熱くならない総裁選

大阪府 神野千恵子

もみ消した煙草無念の形して

デパートも散歩コースに入れてある

何となく幸せになる栗ご飯

飽食がもつたいたいと言わせない

大阪府 坂口公子

独りなのにパンクしそうな冷蔵庫

大して無いけど遺してもという財

おかしやな当世見紛う女と男

結婚の孫朗報を提げて来る

大阪府 西川冷子

戦前派古いタオルも捨て切れず

体育祭よりも代休ハッスルし

チラシの束捌かずそつとゴミと化す

おかしいな覆面パトを追いついた

大阪府 畑中節子

蒔かぬ雑草生えて菜園苦しそう

身のどこか軋む朝寒夜の冷え

金木犀自信満々香る午後

老いしこと互いに言わず平和なり

大阪府 若月祐作

川面には幾何学花火映えて夏

カラオケに声がかすれて風邪と言う

頑張りますやたら世間の挨拶語

老妻が主婦業引退申し出る

大阪府 小 栢 こずえ

祭りばやし聞え気持が踊りだす
胸踊ることは無くなりいま動悸
シングルの慣れて不足のない暮らし
長生きは嫌と言いつつ医者通い

神戸市 早 川 孝 子

握手して決めたわたしの道標
雑草もちよつとお疲れ秋の風
実る秋大地の力ありがとう
日に当たり再生してる散歩道

尼崎市 小 池 幸 子

お手頃の旨い安いの回る寿司
不況風分譲幟色褪せる
故郷の棚田の四季は我が誇り
新政権紙面の動き日々新た

尼崎市 藤 岡 り こ

定年に夫婦の絆締めなおす
温泉旅行効果満点仲直り
散歩道まず犬同士ご挨拶
部屋掃除夫に散歩勧めてる

篠山市 沢 山 啓 子

意志弱く貧には強く歯は丈夫
ヘルパーの極めるものの自己滅却
つまづいた六十の手にゲンノショウコ
どこまでも生命は続く種の数

三田市 辻 開 子

好きな酒酌んで元気を取り戻そ
謎解いてボケ防止する定年後
メニユー表あれこれまようほどあらず
美容院たつぷり時間かけてくれ

篠山市 谷 田 多美子

飲む会が今夜も続く血糖値
子や孫も予定溢れる連休日
深呼吸金木犀の香り吸う
小糠雨財布は軽く荷は重く

加東市 岩 本 美緒子

メモ帖にアトリエ母屋転転す
父の五十忌知らせはないが手桶花
ケシゴムも小さな体転げ出す
今朝の鏡いい顔してる誉めそやす

加東市 黒 崎 美紗子

昨年の種播きを知る日記帳
隣にもヨイショの声が聞えたか
句の出来ぬ思い邪魔する祭り笛
年一度まつ赤に燃える曼珠沙華

篠山市 永 井 かほる

秋の風菜園やる気の鎌を買う
子や孫にたのしみふえたメール打つ
娘のメール昔の字だと笑われる
黒豆がばつぱつですよ実をつける

西宮市 吉井 菜々子

項垂れるピアノの上のシクラメン
仏さんのように果物貢がれる
どて焼きに酒一合という至福
魂を君に預けたまま暮れる

西宮市 足立 茂

思惑が政治と金を結びつけ
勢いで受けてしまったプロポーズ
受け皿にこぼれた酒のうまいこと
しぶ柿が干されて名誉とり戻す

西宮市 株元 玲子

何が無くて心はいつも燃えている
今一つ良いこと探し明日思う
知恵の種十人十色で咲いている
無口でも酒を味方に踊りだし

西宮市 泉水 冴子

有り余るお金があれば落ち着かぬ
胃袋がサプリメントを好まない
これしきの事で揉めてるのも夫婦
がむしゃらに生きてローンがまだ残る

三木市 山口 久子

百歩千歩歩み変らぬ祖母の足
秋風にのって我が家にこうのとり
味覚の秋体重計にとらめっこ
趣味いかし明日も元気でイベントへ

奈良市 阿部 茶々

病室でただ仏像を彫る老女
点滴をはずして御飯一膳を
ウインドウに映る背中に歳を知る
我が家でも不要不急を書き連ね

奈良市 加門 萌子

残り火を小出しに女生きている
幾許の余命拗ねたり甘えたり
返事しない夫無視なの老いなのか
醉芙蓉母の遺した花が咲く

奈良市 辻内 げんえい

平静をよそおい隠す当たりくじ
息詰まる緊張破る咳ばらい
ゴルフなら夜行バスでも何のその
おんぶして温みを感じ育てる児

奈良県 谷川 憲司

カミさんに花がお詫びの仲直り
任せたと簡単に言う偉い人
人事異動噂通りの辞令出た
会話には元気の素が入っている

和歌山市 坂部 かずみ

早足で残暑追い越す秋の雨
ひとつふたつ引っぱり出して冬支度
紅葉狩り行つた気分のハイビジョン
うつらうつら冬の金魚は肥満症

和歌山市 堀

富美子

鳥取市 山口 千代子

一病を告げられ命惜しくなる
なまくらか翔んでる時の活きのよさ
全開をしてもこれっぽっちの右脳
どうしよう何しに來たか引き返す

紀の川市 辻 内 次 根

日に三度頂きますと手を合わす
清書する一字一句を辞書引いて

日常に当てる貧しい頃の尺

待たされることに慣れてる丸い石

岩出市 村 中 悦 男

お世辞だと知って知らない振りで聞く

つくり笑顔は正直にものを言う

慈雨とても三日続くと欲しい晴れ

みまもり隊子らの元気が嬉しくて

田辺市 大 峠 可 動

田周を歩いて世相持ち帰り

連れ添うてときどき主役にしてもらい

おひまなら見上げてごらん峰もみじ

罰点の数だけ自我の節になり

鳥取市 稲 村 遊 子

深呼吸吸こころが狭くなりました

飴玉をしゃぶってしまふサルとなる

ハワイ行き切符を買ったことが無い

私を晒す言葉を編んでゆく

上下なく気安く和む古い同士
美人薄命私はとうに卒寿過ぎ
幸不幸自分の胸が皆決める
衣替え派手でも我慢して着るか

鳥取市 谷 岡 清 子

夫妻愛信じて今日の幕があく
影法師すっぽりかくれたそがれる

黄ばんでるアルバム若い吾を見る

アルバムの涙のあとが恋しくて

鳥取市 近 藤 秋 星

来年がもう始まった賀状書く

大勲位君にあげたいご夫妻に

やれば出来る 忘れられない師の言葉

山一つ越せば待つてる次の山

鳥取市 高 浜 勇

シングルの娘かかえて四面楚歌

招かれて無心つがれた苦い酒

気の長いだんなに気せり妻がつく

回り道だけ自分の道がある

鳥取市 津 村 律 子

屑籠の山になつてゐるメ切り日

首脳会談出むき人脈つくる鳩

自然の怖さ神も仏も手が出ない

夫の気変らぬ内にスーパ―へ

鳥取市 池澤大鯰
匂い袋フェロモンひとしのばせる

知恵袋ライバルさえ知恵を貸す

浮き袋魚は上昇志向持つ

米離れかし朝食米の飯

鳥取市 坂本なつみ

わたくしを待つ人が居る幸せだ

許された僅かな時間答えだす

人並に生きていければそれでよい

説明の回りくどさに欠伸でる

鳥取市 大前安子

苦い汁堪忍袋はしみ増す

くどくどをさらりと下す腹の虫

くどくどは耳を通して消化する

今朝の雲くどい色などありません

倉吉市 藤井美津恵

萩の花歩道をふさぎまっさかり

どんぐりもいっしょに回る洗濯機

運動会老いも若きも花吹雪

散歩道折返す場所考える

倉吉市 前田喜美子

退職後スーツのあくび聞いている

漫然と老いは話もなくテレビ

サービスと言われて貰う不用品

誕生日ばあちゃんフアイト句を作る

米子市 野川宣子

広い胸借りて泣いたり笑ったり

回り道無駄でなかった二人道

今日の酒呂律回らぬ訳がある

終章はクリーンヒット飛ばすだけ

米子市 小塩智加恵

いい嫁と表向き褒め裏は愚痴

背は曲り足は〇脚杖頼り

体調を整え同窓昼食会

会う度に同窓会の杖ふえる

米子市 吉田陽子

逆上がり生まれ変わってやり遂げる

美辞麗句言えぬ私で損をする

句を追ひ銀杏拾い栗拾い

シュミレーションして待っている子の帰省

米子市 見山温子

うたた寝にテレビの音が子守り唄

連れそうて貴方好みの味になる

失ってだんだんわかる好きだった

秋ですね何を食べても旨いこと

鳥取県 岡村孝明

里の母達者な文に安堵する

彼岸から招くがこちら楽しいよ

時間前サービス品を山盛りに

バーゲンの買い過ぎそっと押入れへ

鳥取県 下田 茂登子

期限切れしたかと噂きいてみる
不況風吹いて笑顔も見えて来ぬ
記念日を忘れた訳でないけれど
六十路来て恋の花咲く厚化粧

鳥取県 加賀田 志延

言い訳をしたいミョウガの出る季節
草萌える土地は半畳でも広い
長月が心のひだを深くする
活字追う目がすこしずつ遅れがち

鳥取県 岡本 幸枝

許すとは言わない父の瞳が光る
許さねば我が身むなしさ増すばかり
価値観の差で正論がくい違ふ
清純な二人の胸はやがて春

鳥取県 大塚 美代子

惚け顔で話さつちり聴いた耳
善悪の間でゆれる反抗期
蚊帳吊って遊んだ夜を恋しがり
三叉路で迷いサイコロ振って見る

鳥取県 吉野 いさお

晩節を自慢の口が汚してる
不等辺三角形が纏れ合う
山が売れ犬の茶碗も柿右衛門
札節を疾うに忘れてサンマ焼く

境港市 中井 虎尾

男性も言葉に化粧して話す
飛行雲管制されて交差する
安時計高価と同じ時刻む
ボケ防止そりや川柳が一番や

鳥取県 西谷 悦子

風は秋情緒味わう空気吸う
清濁をあわせ呑んでは生きている
同じなら円い器にこだわろう
あと一步ゴールを見れば気が緩み

鳥取県 田口 清帆

老いの箸好き嫌いなく健やかに
平凡な日々が家族の味になる
叱るもの抱きしめるのも家族愛
お祝いの席でチャンスを待っている

鳥取県 飯野 菖子

息一つので神経空にする
野薊は自分らしさの葉をまとい
もやもやを白紙にもどす秋の空
身を削り生きた戦後は忘れない

鳥取県 岩崎 和子

私がマイク持ったら宙に浮く
始めての舌しじみのゴーヤ味
お抹茶を頂き奥の味を知る
戦争は鶏卵ひとつ与えない

鳥取県 橋谷 静江

今日も良く動いてくれた手と足だ

鏡見てびっくり白髪増えてきた

方言でお里がわかり大笑い

サービス品頂きたくて列につく

松江市 松浦 登志子

おまたせと柿栗が顔並べ

ガラポンで一〇〇〇円当たりお肉買う

地図持って携帯持って東京へ

勝沼のぶどう天からぶら下がり

松江市 相見 柳歩

芸術のような裸を見てしまう

山道を無心で歩く青い風

君が吸う空気になつて守ります

いい夢だ夢の記憶の底が抜け

松江市 錦織 禮子

墓参り舊の束をさがしてる

大物をたどればみんなやんちゃっ子

ナツメロが流れ緊張ほぐれだす

紅葉マークつけて神様仏様

出雲市 川島 和歌子

医者通い時間待つ間の堅い椅子

リハビリは気長にせよと医者の指示

くすぐって本音吐くまで笑わせる

新築の部屋にほのかな木の匂い

安来市 原 煩惱児

平成の海に青春踊れない

老い独り腕に吸いつく蚊と戯る

パチンコを止めない理屈たんとある

酒呑みは嫌いだみんな嘘つきだ

美作市 小林 妻子

百姓に携帯なんか用はない

便利さもあるが暇つぶしもしてる

生意気に携帯持って脛かじり

一日中逢うてた友にメールする

広島県 若年 幸子

涙はひとり笑いは友が持つて来る

楔とれ中間色を揺れ動く

ばあちゃんの野良着に田圃しゃべりだす

老老介護命どちらに預けよう

香南市 桑名 孝雄

敬老会下戸と上戸が別に群れ

金婚式女房小春と称えられ

金婚の重さを子等は理解せぬ

八十年生きた証のなんとまあ

雲南市 渡部 好榮

耳よりな話に迷う咳一つ

愛ひとつとめて亀のマイペース

ドンとこいがつぶり四ツの母が待つ

懐の印籠暗中模索なり

雲南市 福岡博利
生きてゐる卒寿の星がきらめいて

ナスピ漬妻の手になる酒の味
奉天で玉音聞いたわが命

資源ごみ軒並こんなにビール缶

福岡県 林 さだき

高いビルまるで地球のイボみたい

旅立ちの磁石はいつも上機嫌

原色を避けて気楽に生きている

真直ぐに歩けばきつとくるチャンス

唐津市 岩崎 實

石けんもタオルもみんな人がくれ

ヤリイカの目が美しい活きづくり

負けた方が勝っているとはわからない

合掌でおわる両の手組んでみる

唐津市 吉富 節子

笑い合う相手居なくて居間広し

想い出がどこまで続く秋の空

久し振りに言われ笑って誰だっけ

失敗のあとで分かった一呼吸

唐津市 北村 松風

レストラン見本につられつい這入る

バスター腰の痛みをおみやげに

吾れ果てるまで付合う気耳鳴よ

療養のモーツアルトで眠りつく

ローカロリー・油断気づけば二人前
ダイエット言うは易しと今日も言う
バランスが大事言いつつ肉ばかり
秤乗り審判下る時は朝

メルボルン 藤原 ポン吉

井笠川柳会第30回誌上大会 藁 ひこばえ

課題と選者

「太鼓」

「塩」

岡田 篤(兵庫)
船越 洋行(岡山)
山本希久子(大阪)

正畑 半覚(広島)
齋藤 功(兵庫)
山之内さち枝(愛媛)

応募要領 所定の用紙、又は便箋に各題2句を列記、〒・住所・氏名・柳名・TEL番号・所属柳社を明記、応募料と共に送付。

投句料 1000 円(定額小為替又は現金書留) 発表誌呈

締め切り 12月28日 消印有効

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289

井笠川柳会 TEL.FAX 0865-62-6200

賞品 各課題共、天位獲得者の内から総合成績により句碑贈呈者を決定。その他の三才入選句に賞品進呈。
※入選句は年間賞の得点対象。

主催 井笠川柳会

あかつき川柳会 12月句会

兼 会 日
投句先 場 時
12月11日(金) 14時
創建本町ビル2階「大阪民医連会議室」
(地下鉄堺筋本町駅⑨番出口北へ徒歩3分)
「ひととき」「眼」「呼吸」「時事吟」
〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-1

*注意 毎月の開催となりました。来年からは巻末の「各地句会案内」をご参照下さい。

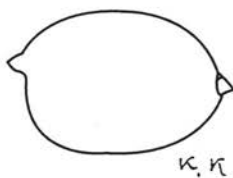
江島谷勝弘宛

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七〇八句)



「おさめる」 牛尾 緑 良 選

おさめても三兆円の無駄がある
 本当の話おさめるのは止せう
 塩壺に母の美学がおさめられ
 見納めと思う息子と瀬戸の旅
 病人の愚痴をおさめた介護の手
 ゴメンネでみんなおさめるとは甘い
 父母が逝き税おさめよと通知くる
 夫婦でも言うことこゝで納めとく
 愚痴ひとつ胸におさめて丸く生き
 足して割りまるくおさめる母の知恵
 何もかも胸におさめて和を保つ
 一件落着味噌カツ食べてます
 任されて国をおさめるのに躍起
 人生のおさめ穏やかデスマスク
 胸奥におさめた野心まだ朽ちず

河内長野市	木見谷孝代
美祿市	安平次弘道
今治市	渡邊伊津志
八尾市	高杉 千歩
大阪府	澤田 和重
堺市	矢倉 五月
和歌山市	松原 寿子
大阪府	米澤 俣子
和歌山市	福井 菜摘
弘前市	斉藤 昂
和歌山市	坂部紀久子
大阪府	谷口 義
美作市	小林 妻子
弘前市	今 愁女
羽曳野市	吉村久仁雄

「おさめる」 高田 美代子 選

愚痴はもうきようでおしまい晦日そば
 納めても納めなくても除夜の鐘
 ゴメンネでみんなおさめるとは甘い
 ほんの僅かな年金につく所得税
 おさめると言うより税は引かれてる
 長老の一喝 銚をおさめさす
 饅頭を食べて治める肚の虫
 孫の声聞いてモヤモヤ飛んでった
 幸か不幸か主婦におさまる娘ではない
 それにしても窮屈すぎないか極
 納骨がすんで遺産が揺れている
 父母が逝き税おさめよと通知くる
 隠しごとみな押し入れにおさめてる
 押し入れへ全部おさめる不意の客
 二人で一人何とか暮らしてます老後

羽曳野市	徳山みつこ
八王子市	播本 充子
堺市	矢倉 五月
砂川市	大橋 政良
倉敷市	撰 喜子
倉吉市	野口 節子
犬山市	金子美千代
藤井寺市	俣野登志子
大阪市	森田 明子
海南市	三宅 保州
西宮市	泉本 牙子
和歌山市	松原 寿子
大阪市	柴本ばつは
唐津市	坂本 蜂朗
和歌山県	森下よりこ

心中におさめしつかり二重蓋

実力のボスがおさめる猿社会

押し返しながらおさめた袖の下

修めても修め足りない生きる道

二人で一人何とか暮らしてます老後

まあまああめで円く収める年の功

父の胸にたんとおさめてある愛だ

喧嘩仲裁おさめたことを怒まれる

いさかいの治めどころは知っている

言い分を胸におさめる聞き上手

リストラに勝てる特技をおさめてる

おさまつた心へ余波がおしよせる

夫婦喧嘩おさまる愛を持っている

執行猶予付きでおさめてくれた妻

重鎮がおさめ役とは限らない

税金をおさめた後の不快感

保険税金納めて残る小銭たち

憤懣を収めふて寝の夜が長い

税金を納めてからのでかい口

心経を納めて心軽くなる

ヘソクリを金庫へおさめうふふのふ

五七五の中に宇宙も僕も居る

婆ちゃんが咳でおさめる内輪もめ

堺市 大隅 克博

岸和田市 井伊 東吉

吹田市 穴吹 尚士

弘前市 高橋 岳水

和歌山県 森下よりこ

東京都 井上つよし

大洲市 花岡 順子

尼崎市 春城 年代

高槻市 左右田泰雄

京都府 松本としこ

鳥取市 田村 邦昭

紀の川市 宇野 幹子

八尾市 宮崎シマ子

海南市 三宅 保州

西宮市 山本 義子

紀の川市 北山 絹子

大阪市 古今堂蕉子

鳥取市 福西 茶子

堺市 柿花 和夫

鳥取市 永原 昌鼓

和歌山県 田中 みね

篠山市 遠山 可住

堺市 加島 由一

息抜きの旅でおさまる不整脈

この胸におさめたバラが枯れました

木釘一本秘伝おさめる宮大工

入院のお陰パチンコおさめけり

ひき出しにへその緒入れた桐の箱

長男の嫁という箱持っていた

妻の愚痴なだめおさめる寿司の折り

ご笑納下さいとメロンを送る

燃え滾るマグマおさめている理性

押し返しながらおさめた袖の下

収納が下手で搜してばかりいる

大家族おさめて朽ちたかまどの火

祭り事納めてひとつ季が移る

お父さん家でおさまる場所がない

四コマにおさまるほどの愚痴を聞く

五百円以下におさめる昼ごはん

採め事をおさめるためにあるお酒

おさまつた話が酒でぶり返し

限られたページに怒り納まらず

おさめると米蔵建った過去がいい

神々が国をおさめた頃思っ

まあまあとその場おさめるいいかげん

銀行でねばり治めた社のピンチ

静岡県 園田 猿峯

和歌山県 古久保和子

大和郡山市 坊農 柳弘

安来市 原 煩悩尼

西宮市 牧渕富喜子

奈良市 加門 萌子

交野市 森本 弘風

藤井寺市 津田シルク

香芝市 大内 朝子

吹田市 穴吹 尚士

鳥取市 有沢せつ子

紀の川市 宇野 幹子

寝屋川市 籠島 恵子

羽曳野市 酒井 一壺

和泉市 横山 捷也

三田市 堀 正和

川西市 西内 朋月

西宮市 藤本 直

愛知県 早川 遼行

鳥取県 飯野 葛子

鳥取市 中村 金祥

大阪市 板東 倫子

大阪市 吉村 一風

ご笑納下さいとメロンを送る

黒粋におさめる写真決めてある

納骨は春のひかりになつてから

想い出をおさめる箱を探してる

定位置におさめる母がいてくれる

言い訳は胸におさめて頭下げ

どつと朱を画布におさめる秋の山

酒とろり憎まれ口はふところに

落着く先におさめたらしい句読点

納会の明日はトレードの話

家中の愚痴をおさめる姑の胸

一卷を納めて海が風いでくる

経百巻納めて遍路の旅終える

税金を値切りもせずにおさめてる

好奇心おさめたはずの傷のあと

影武者が叛旗おさめて従いてくる

骨箱へおさまる骨が温かい

権力でおさめた毬は跳ね返る

大好きなひとをおさめているハート

まつさらな心おさめる桐の箱

懐に入れてなだめているマグマ

八方をおさめる人の無位無冠

秀句

藤井寺市 津田シルク

札幌市 三浦 強一

横浜市 居合真理子

大和高田市 鍛原 千里

和歌山市 福本 英子

岸和田市 雪本 珠子

豊中市 水野 黒兎

富田林市 中井 アキ

尼崎市 長浜 美龍

八王子市 播本 充子

大阪市 神夏磯典子

和歌山市 古久保和子

大和郡山市 坊農 柳弘

四條驛市 吉岡 修

大阪市 橋村 容子

神戸市 伊勢田 毅

弘前市 福士 慕情

大阪市 津守 柳伸

香芝市 大内 朝子

海南市 小谷 小雪

京都市 高島 啓子

寝屋川市 森 茜

役職をおさめて少しづつ太る

病名が五本の指におさまらず

錆びついてそろそろ年貢おさめ時

散骨の海へ夕陽をおさめさす

おさめては見たがやっぱり腹が立ち

仲裁に入った方がおさまらぬ

水引の色がおさめの志

礼服で身内写真におさまった

おさめたらちよつと淋しいおひなさま

制服におさめ切れない反抗期

胸奥におさめた野心まだ朽ちず

結納を済ませて極上のワイン

落ち着く先におさめたらしい句読点

五七五の中に宇宙も僕も居る

年齢の器に僕が納まらず

税金を収め大人と勝負する

権力でおさめた毬は跳ね返る

桜咲くまでには怒りおさめとく

おさまってみれば相性悪い椅子

世の中を丸くおさめる風がある

向き不向きあつておさまる庭の石

仕事おさめ道具は錆びぬようしまつ

秀句

鳥取市 武田 帆雀

大阪市 升成 好

鳥取市 夏目 一粒

大阪府 桑田ゆきの

美祿市 安平次弘道

神戸市 木村貴代子

羽曳野市 福田 悦子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

府中市 藤岡ヒデコ

米子市 吉田 陽子

羽曳野市 吉村久仁雄

海南市 堂上 泰女

尼崎市 長浜 美龍

篠山市 遠山 可住

橿原市 居合真理子

鳥取県 大塚美代子

大阪市 津守 柳伸

枚方市 小林 わこ

米子市 政岡未延子

府中市 馬場 利子

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取市 池澤 大鯨

愛染帖

新家 完司 選

襷掛けしたが体が動かない
大阪市 小谷 集一

(評) スタイルは決めたが足腰が言うことを聞かない。残念ではあるが、ヤル気だけは見せたのだから、よしとしようではないか。

ダイエツトしたら目付きが悪くなる
大阪市 森田 明子

(評) 身体の不満はこの不満につながり、目付きに表れる。おっとりしたまなざしで、ふっくらしているほうが長生きできる。

いい夜をつくってくれる満ちた昼
岩出市 村中 悦男

(評) 充実した一日の余韻は、日が暮れてからも続き、眠りつくまで幸せな気分。このような日々ばかりならいいのであるが……。

ワテンポ遅れて笑う仲直り
西宮市 牧瀬富喜子

(評) まだ釈然としないが、「仲直りしなれば……」と言う気持はある。逡巡、妥協、追従など、複雑な感情が絡んだ一瞬の間。

蜘蛛が巣を揚げ始める老いの家
河内長野市 針生 和代

(評) 油断していると、どんどん広がって行く蜘蛛の巣。「まだ生きているぞ! 廃屋ではないぞ!」と根気良く追っ払おう。

リフォームの金と余命を考える
札幌市 三浦 強一

(評) 残高を眺めて和むか、快適な住まいを楽しむか? 大金をかけてすぐにサヨナラならもつたいない。が、遺すのもつたいない。

残ったのでない遺してやるのです
藤井寺市 太田扶美代

(評) 有り余って残った金ではない。「子や孫のため」と思って、リフォームも我慢して貯めてきたのである。それは分かっている。

僕よりもまだ年寄りがうんと居る
枚方市 寺川 弘一

(評) ほんとだ。我が国だけでも、九十歳以上が百万人。百歳以上は四万人もいる。七十や八十はまだまだ壮年期である。

百歳のベストカップル賞狙う
和歌山市 武本 碧

(評) その意気やよし! 二人揃ってにこやかに百歳を迎えることができたら最高に幸せ。勲何等などの褒章より遙かに価値がある。

菜園がオアシスとなる定年後
宇部市 平田 実男
振りが過ぎの尻尾をなじる尾氈骨

オリンピック頼んできたらずればよい
京都市 高島 啓子

五輪よりずっと大事な今日の飯
吹田市 穴吹 尚士

お茶漬で涙さらさらお終いに
西宮市 吉井菜々子

一对の茶碗も今のところ無事
瀬原市 安土 理恵

剃りあとの青さよ孫ももう大人
海都市 三宅 保州

レンジでチン銀杏はせて里は秋
鳥取市 有沢せつ子

封印の恋おとなしくしてなさい
高瀬 霜石

出るころへ出てつづがなし心太
弘前市 高瀬 霜石

泣き虫で裁判員は出来ません
豊中市 安藤寿美子

エライのはどっち理事さま幹事さま
唐津市 井上 勝視

生きてるよ朝の雨戸を開けてます
加西市 金川 宣子

出がらしのお茶が最適もう寝ます
二次会があつて楽しい勉強会

出番なし老いの日暮れは静かなり

二次会があつて楽しい勉強会

紀の川市

宇野 幹子

ひたすらに耐えて作った数の

大阪市

坂 裕之

自分だけ頑張つてと思つてた

八王子市

川名 洋子

連休の楽しみはないリタイヤ後

香南市

桑名 孝雄

日本をつつき壊さぬよう頼む

寝屋川市

森 茜

古稀すぎてからおしゃべりになりました

堺市

荻野 象山

旅行から帰り腰痛言い出せぬ

犬の膳ちよつと覗きに行く夕餉

八尾市

生嶋ますみ

ありのまま書けない物もある出費

忙しくて風邪もいつしか治つて

大阪市

柴本ばつは

食いだおれの街だせかせか気忙しい

ストレスの爆発凄いい請求書

京都市

坪井 孝一

Eメール瞬時の内に愛は飛ぶ

タコ焼きのタコが産地を主張する

和歌山市

木本 朱夏

仏壇の奥から洩れてくる寝息

激辛のカレーで今日のファンファーレ

唐津市

市丸 晴翠

その昔活躍をした糸切り歯

分からねと言えずにそつと辞書に訊く

堺市

澤井 敏治

うるさいがうそは言わない油煙

鳥取県

平木 公子

ゴミ袋詰め込み方にある美学

大阪府

澤田 和重

母さんのおでこ体温計になる

橿原市

居谷真理子

陰口は利くな今日炊く米はある

唐津市

仁部 四郎

爆笑は苦手自衛の苦笑い

三田市

石原 歳子

同県と聞いて話が弾みだす

今も聴く亡父の好きなオルゴール

八王子市

播本 充子

一列に並ぶと脈が速くなる

ブレゼントぐらいで溝は埋まらない

三田市

堀 正和

草食で昼行性になりました

惚けてないキチンと喋る同じ事

大阪市

古今堂蕉子

人類は店子地球は大家です

全車両禁煙だつてああ愉快

堺市

羽田野洋介

もう待ったありませんよと天の声

わが家に隣家にもない芝生かな

東京都

岸野あやめ

病院に二泊三日の身の置き場

微調整微調整して生き残る

東かがわ市

川崎ひかり

スタートもラストも人の手を借りる

松江市

津川 紫晃

友情も引き裂く格差エネルギー

藤井寺市

鴨谷瑠美子

パソコンの話に乗れずみかんむく

鳥取市

岸本 宏章

天下取るはなしコーヒーではできぬ

尼崎市

春城 年代

衰えは歳相応の古鏡

香芝市

大内 朝子

性別を忘れてしまう飲み仲間

錆びぬよう五感に酒をさしてやる

高槻市

片山かずお

老班も俺の模様と愛おしむ

ブランドの服と財布が仲違い

大阪市

米澤 俣子

変り映えないと知りつつする化粧

近きそつて整理はしない身の回り

シドニー

坂上のり子

電話待ち耳そばだてて米をとぐ

あのねと言えばニヤンと答えをする仲間

三田市

北野 哲男

ジスイズザベンから英語アレルギー

木簡に恋の句残し征つた衛士

寝屋川市

籠島 恵子

電話を入れてメールも入れてまた電話

もしもしでわかつてしまう顔ばかり

堺市 近藤 治子

趣味で出る日はそくさと家事済ます

お化粧を済ませ表の顔になる

和歌山市 根田 よしこ

食事中料理番組見る夫

高齢化百まで生きる準備する

弘前市 高橋 岳水

わたしから眠りを奪う尋麻疹

鳥取市 岸本 孝子

老人も忘れないでね新総理

和歌山市 磯部 義雄

子守り歌がわりにテレビつけて寝る

京都市 三宅 満子

歳かなあネオン街では立ち眩み

池田市 上山 堅坊

あの世への予定は立てず飯を食う

神戸市 山田婦美子

黙祷が毎年続くクラス会

唐津市 樋口 輝夫

しっかりと目を開けて読む計報欄

堺市 志田 千代

中国の要人白髪染めしてる

河内長野市 黒岩 靖博

飽食に慣れ親しんで塵の山

篠山市 円増 純子

片言の孫が前座の電話口

大阪市 岩崎 公誠

予想したように伸びないのは息子

岸和田市 井伊 東吉

マニフェスト大風呂敷を畳みかね

大阪市 谷口 義

老万円札に名前が書いてある

茨木市 藤井 正雄

棒グラフ伸びずに伸びたのは酒量

海田市 小谷 小雪

さっぱりと叱ってくれる人がいる

和歌山市 喜田 准一

適当な返事を妻はすぐ見抜く

尼崎市 長浜 美龍

一区切り着いたゆっくり爪を切る

鳥取市 武田 帆雀

飲み連れの通夜泣きながら飲んで

和歌山市 古久保和子

お役所の書類へ故障した頭

明石市 糺谷 和郎

命名の狙い通りに育たぬ子

倉吉市 野口 節子

血管の喜びそんな食事する

堺市 奥 時雄

寝てる人起こし院長ご回診

芦屋市 竹山千賀子

秋風に葉っぱ手を振り去って行く

高槻市 乙倉 武史

想定外よくぞここ迄生きられた

芦屋市 黒田 能子

黙ってたはず賛成にされている

吹田市 太田 昭

抽出しの過去の私も老けている

松江市 松浦登志子

じいちゃんが肉食い孫が草を食う

交野市 山川日出子

知らん人すぐ友になる見晴らし台

弘前市 今 愁女

晴れるまで環状線に乗っている

八尾市 吉村 一風

熱燗もうまくて秋の二人旅

堺市 矢倉 五月

政治家の毛染めに気づく討論会

堺市 加島 由一

生きるとは紙おむつから紙おむつ

鳥取県 石谷美恵子

おとなしい胆石だから抱いている

大阪府 初山 隆盛

ブランドをつけてすきまを光らせる

和歌山市 田中 みね

男なら家の一つも建ててみな

弘前市 福士 慕情

大きな目のサイズで決まる試着室

奈良県 渡辺 富子

斜めから好きな子の顔見えています

枚方市 伊達 郁夫

捨てられたチャリンコの愚痴聞いてやる

米子市 青戸 田鶴

どの道を歩くにしてもこけそうな

浜松市 岡田 史郎
賑やかなテレビ虫の音押し退ける

東大阪市 笠井 欣子
皆が皆マザー・テレサになるマस्क

河内長野市 山室 光弘
ほんまもの修羅場くぐった老いの知恵

鳥取県 加賀田志延
付き添いがくたびれている診察日

高槻市 佐甲 昭二
万歩計つけて重荷になる散歩

奈良市 加門 萌子
心太どうしてこの字食べながら

堺市 村上 玄也
大方は酔ってる顔の終電車

高知市 小川てるみ
裸婦像の前で尻尾を巻いている

紀の川市 辻内 次根
交通の教則たまに読んでいる

和歌山市 福本 英子
後期高齢ボタンの穴が小さすぎ

四條畷市 吉岡 修
回り道寄り道今日も探しもの

大阪府 田浦 實
無党派はばらまき餌にすぐ釣られ

大阪府 榎本 舞夢
自民党点滴うって立ち上られ

鳥取市 池澤 大鯨
議員さま赤い羽根みなつけている

熊本県 岩切 康子
無理でした足の痛みが知らせてる

大阪府 萩原 大朔
錯覚や誤解になる平和賞

栃木市 岡野すみれ
離婚してしみじみ知った生活苦

鳥取市 土橋はるお
僕んちは予想通りの貧乏家

寝屋川市 平松かすみ
ありがとう二十三代続く里

倉吉市 松本よしえ
何時までも手を振っている車窓の娘

高槻市 富田 美義
ふるさとの訛りに含む解毒剤

大阪府 高木 道子
赤とんぼイベント広場ひやかしに

神戸市 山崎 武彦
ど忘れかいいまだら惚けだと思っ

豊中市 松尾美智代
私を奮い立たせる曼珠沙華

唐津市 坂本 蜂朗
見本市美人の話だから聞く

鳥取市 土橋 睦子
静かな愛想悪い枯れすき

羽曳野市 吉村久仁雄
風下のうわさはズバと的を射る

富田林市 中井 アキ
よたよたと回り続ける夫婦独楽

東かがわ市 木村あきら
零細企業世界不況に試される

八尾市 村上ミツ子
おとなりの芝生もうちと同じ色

大阪市 奥村 五月
遠来の客がずらした休肝日

鳥取県 山下 節子
用の無い人間なんていない苦

富田林市 大橋 鐘造
朝刊を笑顔で読める日を期待

羽曳野市 徳山みつこ
新食感と嫁の手料理褒めておく

大洲市 中居 善信
酒以外趣味らしきもの持ってない

西脇市 七反田順子
波の音遊べ遊べとこだまする

堺市 大隅 克博
幸いに親が祝ってくれる古稀

岸和田市 森元ふみよ
手も足も脳も元気と気付く今

和歌山県 森下よりこ
他人行儀に話す妹何かある

鳥取市 田村 邦昭
レシビにはのらない妻の隠し味

紀の川市 北山 絹子
目を閉じりや民話の鶴が機を織る

富田林市 片岡智恵子
作りすぎた得意料理を三日食べ

誹風柳多留一篇研究 52

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清吾
伊 吹 和 男
清 博 美

395 紅葉からされハというハ女房もち

山田 折角紅葉見物に行つたのに、そこで「されば」と云つて帰つてしまうのは女房持ち。紅葉の名所として知られる正灯寺や海晏寺の近くには、吉原や品川の遊里があり、そこに寄るのが常道。でもそんなこととしては女房が恐い。

しゃうとうじ妻乞鹿はかへる也 九21

女房持ともにはかるにたらぬなり

安 満 1

清 賛。

396 目さましに御用したゝくらわされ

山田 眠りほうけている酒屋の小僧、目覚ましに、げんこつをしたたか喰らわされた。朝なのか日中の居眠りか、いずれにしても御用としては大災難。

ひるどりをふれて御用ハくらわされ

末 21

清 賛。

397 金札を立てた晩から人通り

山田 京の羅生門に鬼が出没するという噂を確かめるため、渡辺綱が主の源頼光から「金札」を賜り現場に赴く。そして襲いかかった鬼の腕を切り落とし、「金札を立てた晩から人通り」。それまで羅生門に近づかなかった人たちも安心して通行するようになったのだ。

だ。

札を見に九条通りをどうとろ 一一 41
清 賛。

398 つく田への壱番舟ハ米屋なり

山田 佃島は小さい漁業だけの島で、田畑などは無い。江戸の人たちの主食は米。だから一番先に運んでくるのは、何を置いても米なのだ。

つくだ嶋汁のみ迄もわたりもの 五 41

清 賛。

399 女良屋のおまけハ内義申ます

山田 『川柳吉原志』には、本句の「内義申ます」に註して、「若い者などが云ふ慣用語。内儀に代つて申すの義」とある。女郎屋での酒席に、「これは内儀から」と「おまけ」が差し入れられた。これは今でも使われる手管で、実のところ内儀が負担するわけではなく、当然勘定に及び込ませているのは明らかなのに、それでも客は喜ぶのだから不思議。
内儀申ますとハ連レへ見へのよさ

山口 賛。酒ばかりでなく何かにつけて、 一一 二 17

「内儀がよろしく申しております」を持ち出すのではないか。

清 賛。

400 一トしきり女房ハむこくすてられる

山田 ある時期、女房は亭主に酷いこと捨てられる。亭主の吉原通いであろうが、なぜ「頻り」「捨てられる」のであろうか。女房だから新婚ではない。とすれば倦怠期ということか。などと穿鑿する必要はないのかも。はつつけよバリエで出やしたと女房 二二12

山口 賛。お腹の大きい時などもあるか。

小栗 賛。変な句だが、他に思いつかぬ。

伊吹 賛。「ひとしきり」は亭主の男盛りの期間、仕事にも女性にも油が乗りきった期間だと思ふ。

清 そのようなことか。

401 山もぬくいせいをくじく車留

増田 山もぬくは、『中国史伝川柳・漢楚軍団』(南得一著)の「韓信、車戦楚兵を破る」に主題句を引いて云う。「垓下に囲まれた時に項羽が詠んだ『力拔山兮氣蓋世、時不利兮驂不逝、…』で、「山をぬくいせい」は項羽

が自らの武勇を誇った語」(出典は『通俗漢楚軍談』)と思われるが、未確認

江戸町中の車留めを、右の故事を利かして詠む趣向。江戸の荷車を「山を抜く威勢」とたとえるのは、とかく車力(労者)が粗野な乱暴者で通行の婦女に暴言をはくなど傍若無人のふるまいをしたこと、また、両替商の銭車の財力誇示の様子をも諷するものか。その荷車の「威勢」も、お上の都合による車留めの触れにあつてはどうすることもできず回り道することになる。山をぬく力も慮子にハ出ぬ項羽

山をぬく力も慮子にハ出ぬ項羽

広原海 一六六

車留きびしいすじを二ツ引

二二1

山口 賛。車力の威勢をくじくお上のお達しで、両替商の銭車はその地域内で使われるものだから、それを諷しているとは考えにくい。小栗 賛。古川柳で両替の銭車はおとなしいものとされているので、「威勢」には合わないものと思ふ。

清 賛。

402 三味せんをにきつて通る船番所

増田 船番所は、水路の要所に設けられた番所。

通行する小船などに対する船番所の改めは、「通ります」のあいさつをすることで足りたが、鳴り物・歌謡は停止しなければならなかった。遊山船が三味線を弾くのをひと時停止して番所の前を通る様子。

江戸の船番所は中川の御番所が有名で川柳もそれを詠む句が多いが、主題句は遊山船だから大川の番所であろうか。永代橋際にもあったようである。

船番所越すうち芸子汗をふき

二六15

三味線をばったりやめて通ります

二二10

小栗 賛。大川。

清 賛。

403 あなへゆびあてゝかたきをねらふ也

増田 虚無僧の句。虚無僧は吹簫をして回る普化宗の僧で、敵をねらう武士には即席入宗して扮する者が多かった。深網笠で顔を隠し喜捨してまわるのが敵を捜すのに都合がよい。「穴へ指」はその吹簫。

居ルところを見たのが竹の吹き納メ

二二1

伊吹 賛。

穴五つはつてかたきをねらふなり

安二義3

清 賛。

僅か

小澤 幸泉選



健やかに今朝も僅かな髪を梳く
頸紐を掛けたかけぬの違いだけ
僅かでも貸したカネなら忘れない
年金の一割も入れて書く寸志
赤い羽根一本五百円募金
僅かなことで実家へ帰るうちの嫁
仲間の輪ユダ一人いてかき混ぜる
僅かでも食べ残さないでメタボ
はした金出してでつかい顔される
ちよつとそこまでのにエンジンかけている
外傷わずか大袈裟に包帯を巻く
ちよつぴりの利子へバス代高くつき
特売品残り僅かといって売る
母病みてあと幾回の瓜を切る
一滴一滴見つめて折る子の病
旅の果てもう僅かしかないお金
まだ生きる心算ちよつぴり残る欲
妻が八これでバランズとる老後
僅かでも遠くが見たい段梯子
披露宴終えて成田で離婚する
自画像に僅かな虹が見え隠れ
一寸の隙間見つけてでかい尻

欣子 瑛子 哲男 勝男 彩子 時雄 玄也 茂代 大鯨 ミツ子 堅坊 武彦 満子 のり子 輝夫 忠 次根 芳生 靖博

僅か五分で勝負がついた将棋盤
夕星に僅かにふれる蝶の音
一握の砂に地球の鼓動きく
幸せもほんの僅かが丁度よい
ふるさとの秋をいただく小さい縁
思春期か少し削れた孫の頬
奥さんの答え僅かに食い違う
行政で言う僅かとは億の金
失意の日かすかに見える父の山
迷いから僅かに水が洩れてくる
二百字の僅かを平仮名にする
かくし味僅かなことでフッフのフ
ひと呼吸返事おくれて拗ねられる
僅かだがみんなあなたに差し上げる
僅かだがおんなの性がまだ燃える
住
目と鼻の配置が少し悪いだけ
逆上り空は僅かに微笑んだ
君と僕僅かにずれる愛の位置
百合ひらくほんの僅かに音させて
この宇宙にたった百年いたいだけ
人
ひとときの戯れに酔う冬虫
地
ポケットに一個は入れておくジョーク
天
針の穴覗けばはの宙がある
軸
逃げぬよう僅かな愛を抱きしめる

善信 千華 古拙 茶子 可住 榮呼 牙子 週行 富子 唯教 振作 高明 アキ 朝子 いさお 幹子 碧 扶美代 修 柳弘 霜石 福士慕情

まとめ

岸本 宏章選



満点の人生でしつたと言う弔辞
一日を生きてまとめた五七五
解釈を変えてまとめた甘い処置
かすみ草足してまとめた花の束
秀才でなかった人がまとめた役
人生の理想のまとめた収支零
「賞罰なし」探せばいくらでも悪が
団結をすれば雑魚にも出る力
まとまった約束破る天の邪鬼
惨敗の総括できぬ自民党
出揃った頃見計らう名幹事
まとめたら一行で済む妻の愚痴
ベクトルが合わずリーダ下される
まとまった話をもめる三次会
まとめ役ときには火の粉浴びる日も
何かある妻が荷物をまとめてる
まとまれば核廃絶へ動きだす
時間切れ玉虫色にしてまとめ
まとめに入つた妻が喧嘩して帰り
結局は諭吉が丸くまとめ上げ
まともでも値引きはしないジャンボ籤
世話好きの妻はどこでもまとめ役

正和 強雄 五月 善信 憲司 大鯨 岳水 秀四 輝夫 東吉 克博 酒坊 大朔 慕情 富子 准根 像山 哲男 恭昌

発言はするがまとめる人が無い
まとめると談合と言う悪になる
長い話まとめて言えば君が好き
定退日四十一年の荷をまとめ

豪快な傘だままとめて入りたい
仏壇の中にまだいるまとめ役

いたずらも泣く子もまとめ保育園
民族をまとめる世話のない日本

正解のまとめばかりを期待せぬ
人生のまとめの時をどう生きる

要するに言いたいことは何ですか
まとまった金ではないが子に残す

豊作貧乏まとめて売ったコシヒカリ
うんうんと纏め上手は聞き上手

まとまり過ぎた話が少し腑に落ちぬ
佳

言いわけもまとめて事務が引き継がれ
死亡広告三行半にまとめられ

家族さえまとめられず他人の世話
いずれまとめて捨てられるたろ身の回り

金の要るところで話が行き止り
人

天さるでみんないいかな七回忌
地

そこでこのことでアラフォーまとめらぬ
天

白票を買い集めてる水面下
軸

まとめ役いてこそ続く趣味の会
軸

倫子
(花)順子
久仁雄

茶子

碧

かつ子

牙子

堅坊

悦子

朝子

淳司

一風

螢

時雄

扶美代

四郎

弘一

週行

俣子

可住

霜石

修

天

播本充子

カタログ

小川てるみ選



カタログの紅葉に旅へ誘われる
カタログに載せてやりたい里の秋

カタログが季節先取りして届く
カタログの帽子は冬になっている

カタログがない母からの荷がとどく
カタログが地産地消をビーアール

カタログが財布の口を開けにくる
カタログで求めた服で鉢合せ

カタログに踊らされてるタイエツト
カタログが言葉巧みに売りにくる

カタログが使用前後を見せつける
カタログの山で結論まだつかず

カタログで取寄せする主婦の知恵
カタログの赤マル三日置いて消す

一度だけ買うとカタログ攻めてくる
カタログに聞きたい事がたとある

カタログに老の食指は動かない
カタログに不利なデータは載せてない

カタログと微妙に違う色と質
カタログと違うダリヤの花が咲く

カタログに偽装の文字は見当らぬ
カタログと綱引きしてる妻の意志

ファッション誌わたくし向きの服がない
カタログに僕のサイズが見当たらない

カタログの水着わたしに無理だろか
カタログを並べて夢の大旅行

ミシランのガイドブックで旅をする
カタログを捲りゆつくりティータイム

生き様のカタログどこも売ってない
カタログに夢がふくらむマイホーム

カタログを集めて家の青写真
背伸びしたカタログくすり笑ってる

夜討ち朝駆けカタログに書き着ける
カタログの機能を使い熟せない

カタログで介護ロボット買ふ未来
目の保養しましたみんな足りてます

カタログで宝探しをしてみよう
佳

カタログのサブリディーれも効きそうだ
カタログの通り咲かない種袋

イチローの記念切手を予約する
カタログで買ったベットの馴染まない

カタログの多弁に翼が伏せてある
海老フライすっぱんばんになれません

カタログで見ると蟹はでかくない
天

カタログの中で綺麗に咲くわたし
軸

カタログが貴女だけにとくる不思議
大内朝子

活恵

善信

倫子

高明

茶子

光久

幹子

慕情

ばっは

充子

週行

強一

みつこ

碧

のり子

(安)泰子

螢

(志)千代

岳水

霜石

正雄

天

大内朝子

初歩教室

題——くどい

鈴木 公弘

平成二十一年初歩教室年間賞

吐き捨てた種敵陣に移り住み

京都市 藤井 文代

二度目から案に出てきたこんにちは

堺市 大隅 克博

セールの背なに冷たい鍵の音

和歌山市 福井 菜摘

【個性が強すぎる作品】

原 年寄りくどい話でさらわれる 周子

添 年寄りのくどい話と向かい合う

加齢は脳の硬直化を推し進め、したがって

自己主張が相手に通じているかを確認しながら

話さなければ納得できなくなるようです。

「さらわれる」という表現は、お年寄りに厳

しすぎないでしょうか。

原 くどい捨て塩気を捨てて喰う歌 松枝

添 塩分もくどい捨てた歌うたう

この作品に対する第一印象は、くどくなく

て塩気のない「歌」って、どんな歌?ということでした。中身を見せてください。

原 姉くどい妹弟素知らぬ馬の耳 久子

添 くどくなる話は姉に任せよう

同じ親を持つ兄弟姉妹と言えども、性格の

違いは当然うまれるでしょう。この句は「作

者の場合は」ということでしょうね。

原 言い訳も百回言えば相手折れ ポン吉

添 言い訳を八回すれば相手折れ

川柳に数字を取り込む場合、意味のある数

字にしましょう。原句に言う「百」は「多い」

と同義語として使われたと理解しますが、そ

の数字に根拠がありません。そこで添削句で

は「七転八倒」の「八」を使ってみました。

細かい話になりますが、数字を使う時には注

意が必要です。

原 くどい程注文付けて先立たれ 志郎

添 くどいほど注文付けて先に逝き

先立たれたのは作者、くどいほど注文を付

けたのは奥様でしょうか。一句の中に二人の

人物を描くときには、主語・述語が混在しが

ちですので、明確にしましょう。

原 長年の介護の口はくどくない 俊子

添 長年の介護にくどいこと言わず

少しわかりにくいですが、介護をする側も

される側も、長い間に要領を得て、手際よく

なってきたという句意かと思えます。

原 くどい事言うことはい感のよさ こそえ

原 千本のバラいっぺんに咲くくどさ 美紗子

原 くどいほど体動かず我を通す 正二

原 くどくどと詫びて裏では舌を出す 大朔

原 子を想う母の小言はくどくなる 憲司

原 大阪のおバチャンくどい柄が好き 宏造

原 交際中くどい性格面かぶる 智加恵

原 くどい話恋人からはささやきに 文代

原 言い訳のくどい男で骨がない 幹子

原 くどくどと電話を掛ける詐欺のわな 弘泰

以上十句、それぞれ個性のある作品になっ

ている点は評価しますが、それゆえに先入観

にとられすぎていて、現実性がやや乏しい

感じもします。断言してもよいかどうかを考

えるよう努めてください。

【綴り方に問題が残る作品】

原 愛情なのあなたのくどさ耐えられぬ 照美

添 このくどさあなたは愛とおっしゃるの

原 くどいなあー言った私言われてる 律子

添 母になり私もくどくなりました

原 負け混み試合の前のミーティング 紀雄

添 負け続く試合の前のミーティング

原 くどい程聞いたことの母遠い 安子

添 くどいほど聞いた小言の母は亡く

原 同じ事何度も聞かず宣伝車 孝明

添 同じこと何度も聞かず竿竹や ミヨノ

添くといほど鞭打つ教えありがとう

原くとい人嫌みなセリフ突きささる 光 弘

添性格のくどさ嫌味なセリフ吐き

原セールのくどい勧めも馴れてきた 清

添セールのくどい勧めを押し返す

定番の「セールス」ですが、慣れてしまっ

ては川柳になりません。セールスマンとぜひ

対峙してください。また「馴れて」は馴れ馴

れし場合に使います。この句の設定は、習

慣化した結果をとらえておられますので「慣

れて」を使うべきでしょう。

原くくどと聴いて重荷をかたがわりくこ

添くくどとを聞き肩代わりしてあげる

原句では少し嫌味を感じます

原老いるとはくどくて孫に嫌われる なつみ

添老いるとは何をやってもくどくなり

孫に嫌われたくない気持ちは分かります

が、老化は仕方ありません。せめて気持ちだ

けでも若々しくしましょう。

原くとい味子のお気に入り馴染めない ヒロ

添子にはよい味覚くどくて馴染めない

原勉強してくどくと言うと余計せず 綾 乃

添勉強をくどく論して余計せず

原くとい人つい逆らってみたくなる 勇

添くとい人には逆らってみたくなる

原子を思っ小言くどくなり嫌われて 玲 子

添子を思っ小言くどくて嫌われる

原くどくなる前にやめとく処生術

添くどくなる前にやめとく処世術

【入選する水準にある作品】

毒舌でくどい割りにはあたたかい

くどい事少しにしとき嫌われる

音字数の関係上、思い切った土地の言葉や

言い回しにしてみるのも一芸です。ただし、

読者に理解されるように書いてください。

人生訓ちよつとくどいと嫌がられ

くどい程検算しても金あまる

くどいほど好きだ好きだと書く手紙

筋通す積りが話しくどくなり

くどいほどチェックしましたてにをはを

親だからくどい説教してしまふ

作品としては完成していますが、「親だか

ら」という結論を最初に出してしまつと、以

下が補足説明に読めます。

【入選】

年いってみんな話がくどくなり

リンゴ売りそんなに喰える歯はおへん

くどいほど言っても聞けないと言ひ

くどい程怒る言葉に効き目なし

描きすぎて隈取りになる厚化粧

くどくどと絡まれている酒の席

丁寧と回りくどいは違うのよ

片言のくどい言葉も愛おしい

「くどいなあ」いやな響きのある言葉

志 延

健 柳

房 代

い さ お

恵 美

柳 歩

エ ミ

振 作

ち づ る

弥 生

啓 子

亜 希 子

冷 子

酒 坊

弘 子

孔 一

開 子

堅 坊

セールのくどさに耳が痛くなる 節 子

くどいほど言われてやめぬコップ酒 山 久

【佳句】

年寄りはいくどい決めている愚か

くどいほど言って聞かせて嫁に出し

口の中すっぱくなってゆく小言

車内でのくどい放送まどろめず

くどい程言うとハイハイハイと逃げ

くどくどと嫌味たっぶりイケスカン

くどくどと言われる気配して逃げる

回りくどい言い訳きつと嘘だらう

くどくどとはやき続ける泣き上戸

親切もあまりくどいと息苦し

【今月の推せん句】

顔色を見ながらくどさ加減する 綾井 嘉彦

この緊張感川柳です。

くどいとは言えずうんうん聴いている

多くを語っておられないのに、くどい場面

が見事に映ります。

堪忍ね好きだと欲いだけ 吉井菜々子

ブルブルとさせる作品に仕上がりました。

【私の句】

噛み心地くどくて嫌になるスルメ

米国のくどさなだめる金を出し

(登載漏れの方は役員が添削して返送します)

秀句鑑賞

同人吟 井 丸 昌 紀

— 11月号から

自由吟は苦手で、川柳塔への投句はいつも

困っていました。題を与えられて句を作ると
いう事は、何とかできるようなったのです
が、日常生活の色々な場面でふと心に留まっ
たでき事などを句にするという芸当はなか
なできません。

結果、川柳塔への投句は、大きな声では言
えませんが、没句が中心になってしまってい
ました。ただ、没句と言っても、気に入った
没句（相当、自信があつて出句したけれども
選者との相性が悪くて、没になったと自分で
は思い込んでいる句）に限られます。そんな
私が「秀句鑑賞」をさせていたくという事、
大目に見て下さいませよう、お願いします、

産経学園で、奥田みつ子先生に、多読が大
切な事を教えて頂いていたにもかかわらず、
忙しさにかまけておろそかにしていました。
しかし、図らずも、今回、多読の機会を与え
て頂き「なるほど、自由吟はこう作るのか」
「これから人様の句をもっと読もう」等々、
いい刺激を頂き、感謝しております。

向き変えて回つてみたい観覧車

鈴木 公 弘

そう言われてみれば、観覧車の回る向きは
どこの遊園地へ行つても同じですね。J・I・S
規格がなんかで決まつているのかもしれない
ね。逆に回つたら、どんな新しい世界が見
えてくるのでしょうか。

彼岸花律儀な秋を連れてくる

山 岡 富美子

暑い、暑いと、文句を言っているうちに、
急激に涼しくなりました。秋は、寂しいとか
ロマンチックとかのイメージが一般的ですが
律儀という受け取り方には、一本取られたと
いう気がしました。

選つて選つて選つて買わずに客が出る

古手川 光

上方落語に「無い物買い」という、最初か
ら買うつもりのない客か、店の親父をなぶる
ネタがあります。しかし、この客は、充分
買う気はあつたけれど気に入った物が無かつ
たようですね。光景が目には浮かぶようです。

咳ひとつじろリマスクに睨まれる

村 上 直 樹

新型インフルエンザウイルスが、ヒト科に
襲いかかろうと、牙を研いでいます。私は用
心してマスクをしているのに、マスクもせず
に咳をして、不謹慎な。気まずい状況の作者
は、言い訳もできずに…。

陽が昇る天動説は生きている

加 川 靖 鬼

地動説は、教科書で教えてもらいました。
しかし、実際に確かめた訳ではありません。
信じていない人は、たくさんいます。私もそ
の一人です。特に、朝日が昇る時、太陽が地
球の周りを回っていると感じます。誰か、反
論できる人はいますか。

豆こはん好きな男の頼りなさ

堀 正 和

僕も、豆こはん好きですけど。やっぱり、
頼りないんでしょうかね。美味しいんですけど
れどもね。別に、頼りなくてもいいんです。
けど、本当はこの男に頼り切つてたりして…

元氣さは分つてますと万歩計

時 広 一 路

僕も、万歩計を付けてみた事があります。
一万歩歩くというのは、大変なことです。万
歩計が降参するほど、お元氣みたいですね。

お喋りへお冷やをまたもつぎに来る

永田 俊子

気の合った友人と喫茶店に行くと、ついつい話し込んでしまいます。もうすぐ、お冷やをつぎにさえて来てくれなくなります。けど、そんなことお構いなし。ウエイトレスの仏頂面が目につかびます。

百円の玉子へ妻に駆り出され

早川 遯行

大袈裟に、駆り出されたと詠んでおられますが、そこに、作者のまんざらいやでもないという気持ちが出ていて、ほほえましい句です。お幸せに。

逝きて五日 子は模擬試験受けに行き

平嶋 美智子

娘さんのお婿さんが亡くなり、その子が、模擬試験へ。坦々とした句の中に、残された三人の気持ちが凝縮されていて、一編のドラマのようです。私も、似たような経験があり、ジンとききました。

スリラーのような新聞記事を読む

森田 明子

最近、こんな事が本当に起こったのかと目を疑うような事件が続発しています。まさに、事実は小説よりも奇なりを地で行くような毎日ですね。

留守電の敬語にわかに他人めく

津守 なきと

ピーという音に続いて、ご用件をと無機質な声で言われると、つい、身構えてしまい、よそよそしい言葉遣いになってしまいます。周りの人からも、変な目で見られます。僕はよほど急用でない限り、なにも言わずに切るようにしています。

情報がおほく通う散髪屋

吉村 一風

確かに、散髪屋の主人は、色んな人の情報を話してくれます。その代償に、一風さんの個人情報も筒抜けに……

一応は財布出してるレジの前

柿花 和夫

「いいよ。」と言ってもらえるのは承知で払う気はあるんだというポーズで出す財布。一度「じゃあ、〇〇円払ってもらおうか。」と言われて、あわてた事がありました。

マニュアルに背くと客の笑みが増え

吉村 久仁雄

特に、外食チェーン店の店員さんの応対は金太郎飴みたいでうんざりしますね。マニュアルに背かないまでも、その人なりのちよつとした工夫を加えた応対をしてもらうと、思わず、心が和み微笑んでしまいますね。

鴉にも人にも内緒こみ袋

徳山 みつこ

どんな大事なものを捨てたんでしょね。こっそり、覗きたくなります。けど、ご用心。その捨てたつものの個人情報ば、誰かに悪用されているかも……

マニフェストあふれ与党の道多難

伊勢田 毅

マニフェスト背負って重い民主党

永原 昌鼓

マニフェスト不安が募るだるまの目

野口 節子

政権交代は果たしましたが、最近の鳩山内閣は、もたもたしていますね。本当に、我々の暮らしは良くなるのでしょうか？

飲み会に飲めないヤツがいつも来る

鈴木 いさお

大盃に鯨泳がせ一気飲み

山本 正光

八十路坂いまでもお酒は修行中

樋口 輝夫

酒二合喋りの妻と渡り合う

鶴田 遠野

私の好きな酒の句です。しかし、いまだに飲みすぎて、周りの人に迷惑を掛け続けて、反省しきりの今日この頃です。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 11月号から —

佐藤 古拙

他人さまのネコを手招きしてしまふ

稲村 遊子

ネコは寓意的で、他人さまの連れ合いに置き換えるなら、怖い川柳となる。人間、魔がさすと一読者にそんな刺激を与える諧謔に魅かれます。

二世帯の愚痴を短詩であそぶ趣味

畑中 節子

二世帯住宅や、息子夫婦の別居が定着しつつあります。殊に地方では住宅は増加しても、人口は減っています。義父母の同居をよしとしない嫁さんとの軋轢を、川柳化すると頭に血がのぼることもなくなります。

紅葉より尾花がすきなカップ酒

吉井 菜々子

色彩ゆたかな紅葉より、ねずみ色の尾花を好むという作者は、カップ酒を左手に大正期に一世を風靡した「船頭小唄」を口ずさみ、

ひとり悦に入っていると思います。

のそのそと一番あとに着くわたし

小谷 小雪

津軽地方の諺に「大きいネブタは後から来る」という言葉があります。子供ネブタ等が露払いをつとめ、最後に本命のネブタが貫録充分に登場することを意味します。句の印象では性格的なものを感じますが、運動会の際では大変なことになります。

水やりを忘れた花のしたたかさ

松田 聰

生物の生命力の強靱さを鉢植えの花にたとえた簡潔な句です。

好守備の野手のまわりを秋あかね

寺井 柳童

打球をす早く処理する野手の肩や帽子に、いこいを求め秋あかねが、無心にとんでいる秋のひとつき。草野球の光景だろうか。

あの時がチャンスだったと今思う

安達 厚

それなりに人生を重ねた今、彼女(氏)への意思表示はあの時だったと思う。それも遠い日の淡い昇華された一頁になった。

長風呂を案じて覗く愛らし

辻 開子

若い時分はそうでもなかったが、主人の加

齢がすすむと、もしかと思って風呂場をうかがう奥さんの気配りを主人は知ってか知らず、ひと節うなっているようである。

時ときは放り出したくなる介護

泉水 冴子

介護は体力も根気も要する。介護疲れからくる無理心中も珍しくない。瞬間的には、投げ出したくなるのは人情かも知れない。

長寿社会の介護は多くの深刻な問題を孕みつつ、わたし共にあるべき姿の追求を促している。

病院へ行くと病人らしくなる

吉田 陽子

病院の待合室には、診察待ちの人が多くいる。顔色は総じて良くない。(当り前だが)元気で明るい表情をすることが悪い気がしてくる。で心なしか肩を落し、うつむき加減に歩かざるを得ない。話し声も低くなる。病院にはそんな雰囲気があるのは確かである。

畦道をとことん歩くダイエツト

沢山 啓子

区画整理が進んだ今の畦道は真っ直ぐ。それで細い畦道を田に落ちないように歩くのはむずかしい。田園都市ならではのダイエツト。

故八田 やつだ 敏さん遺句抄 さとし

好きな百合抱かせ最後の誕生日
延命の措置止め祈る良き旅路
寄り添うて生きた妻なせ先に逝く
せめてもと遺影を菊で埋めつくし
妻逝きて娘の氣遣いが身にしみる
老々介護終えて体調狂い出す
亡き妻の遠き日の離また並べ
今年出来如何と亡妻に菊供え
老いの日々菊と川柳医者通い
血圧で決めるその日のスケジュール
医者行きの予定先ず書くカレンダー
八十路にも欲あり五年日記帖
体調不良みんな老化にまとめられ
介護なし天気よき日は花が待つ
ボランティア止めて我が家の花づくり
老い独り一人の孫に夢をかけ
娘五十わが母に似た安堵感
命かけた青春尽きぬ同期会
記念樹の桜に咲いた友の顔
埋蔵金ないのでくじを買っている
生きているか確かめ合っている賀状

故南原 なんばら 正和さん遺句抄 まさひと

留守番の元氣なうちに旅へ出る
鶯の声に揺すられ眼を覚ます
すれ違い国の訛に振り返る
人が死ぬテレビ見ながら朝御飯
序破急の御陣乗太鼓音高し
風邪で伏せ流れる雲を窓に見る
梅の花咲いた咲いたと妻を呼ぶ
寒いでしょう焼酎供え墓参り
ばあさんに風呂呂冷めるぞと声かける
年一度花買う妻の誕生日
鬼の父菩薩の母で子が育つ
心打つ文に頁をめくりかね
ばあさんや雀鳴いてる起きようか
待合室蕨の数で座が解ける
果てるともたった一人の人となる
新茶の香葉立ちゆく子が瑞々し
電車待つレディー絵になるポーズ取る
タイガース負けた日飛ばすスポーツ欄
アルバムに僕を縛った人がいる
手の平の冷たい君が忘れぬ
ジルバ チャチャ聞けば思わず腰が揺れ

本社十一月句会

十一月六日(金) 午後一時
アウイーナ大阪

一三日前の真冬のような寒さから、一転穏やかな秋空の下、久しぶり昼の句会に出席者九十二名で本社句会が開催された。

最初に九月二十八日に亡くなられた埼玉県同人八田 敏さんに黙祷をささげた。

本日のお話は「笑いましやうよ、国語大事にしましやうよ」と題して加島由一さん。

いろいろなジョークを紹介され、笑うと腹式効果がよく胃の消化、ホルモン分泌が浄化して、笑いが癌細胞をも破壊することが科学的にも証明されつつある、笑っている場合かというときでも「笑いましやうよ」と強調された。

そして、明治・昭和の大臣や現鳩山首相などのジョーク、リンカーンとケネディのジョークの紹介があり、オバマ大統領の話し方の特徴も紹介された。

また、江戸時代、各藩の寺小屋で漢字を学んで来たことと、女性のお喋りが言語・国語を発展させてきた、いま日本に足らぬことは

情緒、万葉集などの詩歌を大いに学び、国語大事にしましやうよ」と結ばれ、原稿なしでの楽しいお話だった。

(勝弘記)

月間賞は加島由一さん(堺市)に輝く。
(司会)美籠・昭(協取)月子・(矢)五月
(受付)富子・葉子(清記)光久

席題「電波」 村上 直樹選

お月様電波でランチ届けます
ビリリッと電波が走り結ばれた
翔んでみても妻の電波の届く位置
漁業基地SOSにとび起る
盗聴恐れ手話にしました若夫婦

葉子
美智代
たもつ
憲太郎

電波より頼りにしてるテレパシー
メカオンチ地デジアナログ何のこと
電波音痴妻が逃げたらどないしよう
テレビ電話寝ながら会える孫の顔
ケータイに南の島から来たハロー
美人には必死で合わす周波数
電波にはのらん秘密を二三つ
ジグザクの電波が妻のこめかみに
妻の勘電波探知機持つような
アンテナを立てて恋待つカタツムリ
女心をぐざりと突いてくる電波
倦怠期妻のケータイ今日もオフ
妻不機嫌電波障害かもしれぬ
混信の電波に脳波狂いだす

みつ子
賢子
見清
桂作
淳司
由一
月子
朱夏
恭昌
千里
いわゑ
柳弘
宏子
美代子

過疎地帯電波がつかぬ点と点
ビリビリと夢の電波で穴馬券
目に見えぬ波に喜怒哀楽を乗せ
此の頃は電波時計の様な夫
深夜便電波に乗って来る睡魔
徘徊も電波の届く範囲内
歳月に電波通じぬ脳回路
五十年波長が合つたい夫婦
ごろ寝してゴジラの快拳見る幸
電波より早い君からテレパシー
風に舞う噂を拾う電波基地
犬かきで電波の海を泳ぐボク
電波ジャックしている妻の長電話

佳
悪事なら真ぐにニュースにしてくれる
障害は電波でなくて脳波です
わたくしはアナログ暫くの命
行きずりにビリビッと来て運の尽き
愛という電波に勝るテレパシー
人
立ち読みで脳波に充電して帰る
地
電波届かぬ里で命を洗つてる
天
触つたらビリビイと感電起す恋
軸
休校でビーム戦争子供部屋

東吉
千恵子
見清
賢子
集一
寿美
天笑
好

すみ子
五月
いさお
弘風
順子
房子
朋月
満作
いさお
修
公誠
富美子

兼題「缶」

吉岡

修選

缶詰の賞味期限で揉めてます
一缶のビールで足りる歳となり
空き缶の山に埋没する地球
昭和史を缶詰にして保存する
粉ミルク缶みるたびにあの悪夢
空缶に貴方をつめて持ち歩く
缶詰の中で携帯音がする
女子寮へ配達もする缶ビール
ボクの過去缶詰にして冷蔵庫
缶切りを忘れてリュック重いまま
足もとに缶があるから蹴つとばす
大げさにドスンと落ちる缶コーヒー
缶詰で飲む赴任地の独り酒
寸胸でついた仇名がドラム缶
間違わぬよう缶詰に猫の顔
船底に缶詰された四日間
缶詰にしたい男がひとり居る
嫁さんと半分こする缶ビール
ふん切りがついて缶缶手で潰す
缶ビール供え貴方の誕生日
ペット用缶詰も入れ非常食
そのうちに缶入り酸素出回るぞ
缶ビールの顔で並んだ発泡酒
ドロップ缶かたかた鳴ったかくれんぼ

准一 美義 保州 いさお 理恵 シマ子 千恵子 雅文 公誠 見清 能子 加お里 集一 弘風 耕治 宣子 朝子 天笑 扶美代 みつ子 哲男 天笑 見清 義子

缶詰と知らずに褒めるシェフの味
缶ビールブシユツと開ける玉の汗
これもけじめ缶蹴つておく
缶切りを使えるなんていいお蔵
缶詰の労使交渉良き昭和
歩こう会止まるたびに缶ビール
空缶で暮らしをつなぐ青テント
頂いたセツト蟹缶だけ隠す

佳

ボーイ捨てはダメよ男も空缶も
ドラム缶いっぱい程は溜めた愚痴
空き缶の小山が車道縫って行く
開けたらニコッ笑える缶があればよい
柩にはどうか冷たい缶ビール

人

缶詰の手抜き料理を皿に盛る

地

夜回りに缶コーヒーの温かさ

天

缶蹴りも出来ぬさびしい熟通い

軸

ドラム缶にぎつしり詰める怨みごと

兼題「グルメ」

古今堂蕉子選

難民キャンプに送れないのかこのグルメ
粉もんになにわグルメは一家言

美花 賢子 義子 葉子 和夫 一步 集一 美智子 無限 美代子 時雄 蕉子 則彦 能子 富美子 一風 直樹 保州

感想もグルメが言うとは煩い
関の鯖なにより旨い塩加減
家康を見習いグルメ避けてます
河豚刺しに自称グルメの選り好み
飽食のペットフードの選り好み
昭和正生きた母には日々グルメ
げて物を珍味と褒めて通の顔
その果てはお茶漬けがいい旅帰
鮓鮓に酒は辛口通の客
年金の範囲で済ますグルメ旅
農薬を使わぬ野菜虫の数
下町のグルメで蕎麦に一家言
蟹の目がきて来きてというチラシ
旨いもの食べ過ぎ体泣いてます
麵の腰どうのこうのとうどん通
グルメ猿スイティオバナナしか食べぬ
みの虫にグルメ見せても出てこない
箸使いまともにも出来ずグルメとや
グルメ旅根掘り葉掘りとレシビ聞く
グルメの舌が無いものねだりして困る
究極のグルメと馴染むインスリン
食通の行き着く先にたまごかけ
うんちくを言つてカレーにソースかけ
湯の宿は旬のグルメの天ご盛り
笑い声絶えぬ家族にあるグルメ
食通も松茸の味うろ覚え

すみ子 ばつは 天笑 唯教 耕治 桃花 昭 美代子 正雄 朋月 シマ子 尚士 美花 月子 好 順子 哲子 義子 寿美 憲太郎 和夫 千恵子 章久 哲子 おさむ

ともすればグルメ気取りの味音痴

柳弘

湯豆腐の湯気の向うに君がいる

葉子

グルメ誌が褒めて天狗のラーメン屋

尚士

美食家も末期は水を飲まされる

(矢)五月

佳

お取り寄せしてますちよとしたグルメ

美籠

飽食のグルメの果ての大根煮

瑠美子

グルメなど言つてはおれぬ自給率

楓楽

焼肉といえはソウルへ飛ぶグルメ

啓子

入院中グルメ談議で盛り上げる

満子

外人の舌で和食にランクづけ

修

地

毎日がグルメ捕れとれ食べてはる

恵子

天

地球儀の飢餓もグルメも裏表

富美子

軸

自称グルメただ早食いで大食い

兼題「じっくり」

西口いわゑ選

じっくりと腹の据つた妻が居る

准一

黒豆をじっくり煮込み艶を食べ

喜子

ハローワークじっくり蟻の列見てる

桃花

じっくりと聞く姿勢して上の空

時雄

五臓六腑にじっくり染みる冷やの酒

由一

じっくりと妻と話せばボロが出る

集一

瑠美子

加齢とはじっくり世間見た証

哲男

褒めてからじっくり論す母の智慧

尚士

じっくりと煮詰める夢と母ジヤム

桃花

じっくりと煮込んでいます老いの恋

光久

じっくりと一人で回る美術館

加お里

じっくりと煮込んだ愛は崩れない

昭

ちりをはたきハイネの詩集読み直す

雅文

無理らしいじっくり読んだマニフェスト

弘風

じっくりと読み直してる周平を

勝弘

じっくりと見ればプチ整形の妻

瑠美子

僕の声テープで聞くの恥すかしい

天笑

じっくりと見てはいけない厚化粧

尚士

お豆煮るじっくりと母億びつつ

義子

じっくりと見ればなる程ピカソの絵

靖博

じっくりと聞かれてボロが出てしまう

玄也

妻の愚痴じっくり聞いた振りをする

宣子

じっくりと慌てないのがわたし流

美代子

じっくりでいいよ不器持ちなんだから

(志)千代

絶好のチャンスじっくり待っている

美籠

じっくりと聴けば妻にもある理屈

直樹

主治医からじっくり退院後の禁酒

(矢)五月

じっくりと探してごらんちゃんとある

好

夫婦の喧嘩じっくりと聞く犬の耳

俣子

じっくりと眺めるいけ面のテレビ

かりん

佳

じっくりとカメラが知らず新事実

日の出

歳月にじっくり味の出るふたり

能子

じっくりと明日の地球を語ろうよ

一步

じっくりと見れば仁王にある魅力

みつ子

人

飲びは後でじっくり噛みしめる

扶美代

じっくりとシャンソン想い掻き立てる

ふりこ

地

空仰ぎじっくり自分見直そう

天笑

天

じっくりと向き合うみんないい人だ

軸

兼題「手直し」

前 たもつ選

手直しで済まぬ一からやり直す

准一

器用さを見込み手直し頼まれる

庸佑

手直しにもう明け暮れのマニフェスト

直樹

マニフェスト手直ししてもいいですよ

堅坊

リフレッシュ青い地球をとり戻す

扶美代

遅すぎた手直しに泣く日本丸

和夫

手直しの朱にいつぱいの愛がある

一步

兄ちゃんのおさがりつぎが当てである

美代子

手直しは出来ぬ親からもらった顔

賢子

リフォームの植音母の介護部屋

楓楽

手直しせず後期高齢廃止して

勝弘

メタボに備え縫代多くとっておく

昭

手直しのない墨痕の鮮やかさ

(志)千代

手直しをされた個性がすねている

手直しのつもりが熱をおびてくる

電車内手直しなどじゃない化粧

近頃は手直しするは嫁の方

手直しのきかぬ年輪味がある

手直しは出来ないけれど風通す

手直しをするには傷が深すぎた

出来るなら手直ししたい過去がある

トイレにも風呂にも手摺付けました

手直しをするとなたしが消えている

手直しはもはや無理だよ皺の数

手直しはせず個性を光らせる

手直しの出来る間はまだ若い

手直しは嫌な顔する古ミシン

繕って繕って今日ある二人

人生の手直しせかす鐘が鳴る

手直ししても尻尾は隠せない

手直しの美女だとわかる喉仏

恐竜のマンガ富士山噴火させ

佳

添削をうけて没句が蘇える

生き抜いた道だ手直しなど要らぬ

手直しへ確かな風が吹いてきた

野仏を下絵に足して描き上げる

神様にもらったままのわたしです

人

生き方の手直ししたく聖書読む

朝子

理恵

由一

千里

哲男

扶美代

光久

寿美

集一

桃花

俣子

明子

瑠美子

章久

蕉子

富子

葉子

哲子

天笑

佳

いさお

直樹

ばつは

天笑

いわゑ

楓楽

地

台本にアドリブ入れて叱られた

天

結局は植木屋さんに来てもらい

軸

棟梁は楔一本打って見せ

兼題「暗示」

河内 天笑選

好きやねん暗示かけられ五十年

眠れない時の呪文は決めてある

割り箸が折れてやる気が萎えてくる

寂聴の法話に暗示授けられ

つるつるの頭にうぶ毛出たのぞみ

野菜ジュース効くと暗示をかけて飲む

あなたならきつと出来ると妻の檄

百歳は太鼓判よと祖父米寿

シュベルト聞いて胎児は夢を見る

気がつけば妻の前ではイエスマン

茶柱が立つて靴履く面接日

イチローは暗示をかけて袖まくる

幸せが降ってきそうな青い空

白い歯がちらりチャンスと思わせる

暗示からさめて正しい道歩く

レトロやと暗示かけつつ住むボロ家

手に持ったカバン落としてビンと来る

暗示かけやすい夫で愛してる

靖博

由一

喜子

哲子

啓子

美智代

弘風

見清

美義

雅明

公誠

堅坊

いさお

正雄

集一

善純

朋月

時雄

朋月

修

喜子

哲子

啓子

美智代

母さんに出て来ると言われたら出来た (矢)五月

まわし酒効いたと暗示には弱い 好

母さんの暗示にかかるお父さん 舞夢

やれそうない気持ちにさせる乗せ上手 玄也

ピンチはチャンス自分に掛けている暗示 恵子

水びたしの夢で飛び起きトイレです 千枝子

家族には特上肉と言っておく 桃花

反応がにぶうなったか返事せぬ 桃子

ほめあげてやれるやれると鬼コーチ (奥)五月

大丈夫と言われて痛み消えていた かりん

のら猫が暗示したのでここへ来た 和夫

温暖化地球の涙暗示する 賢子

佳

呆けているのか暗示にかからない夫 シマ子

お前なら出来ると言われ大火傷 靖博

自惚れていると暗示にすぐかかる 富美子

暗示にかかりやすくて風邪も引きやすい 義

すぐ効いてくるおふくろのチチンブイ 保州

人

飄飄として暗示にはかからない 玄也

地

暗示にはかからぬ私なりの道 義子

天

幸せだなあと毎朝いい聞かす 加島 由一

軸

タバコ止めなさい税率上がりそう

ふたば

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

立ち合ってお産のスリル知ったババ
白杖は何時も私にスリルくれ
本能がスリル求めている隙間
雨雲に追いかける一張羅
その時の覚悟が出来て渡る橋
ニアミスを日傘でかわし擦り抜ける
スリルもういらぬ金婚目指して
一点差逃げるスリルと追うスリル
もう一つ言うこと聞かぬパソコンだ
もう一つ足して燃えてる夢の彩
もう一つ家に置いてる顔がある
もう一つもうひとつとてメタボです
後ろに目もひとつ欲しい時もある
もう一つ傘があったら別れてた
もう一つ生き方がある雲の峰
もう一つ積んで崩れていく積木
もう一つ塔婆が増えて蟬しぐれ

恵美子 豊 美子 八重子 町子 幸 元三 東吉 イセ かずみ 房代 登美代 昇 次根 純子 俣子

青春の匂い袋を永久に持ち
永久にドーム飛び交う千羽鶴
とりあえず誓っておいた永遠の愛
永久の愛と信じきった白ベール
学術と言ってファラオの夢覚ます
永久に海にサヨナラしたスルメ
この愛を冷凍にして贈ります
永遠の愛信じてはしやく薬指
あの世からメールが来たらどうしよう
母と子の絆は時空飛び超える
永遠に不変師弟の道がある
愛されてそれから永久の荷を背負う
円周率に悩み続けて黄昏れる
すんなりと聞く耳持たぬ反抗期
白魚のような指には刺がある
鬼の首すんなり取れる位置にいる
句読点打ってすんなり出る樹海
八月の傷はすんなり消えはせぬ

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

英子 義雄 孝子 芳女 柳昌 富子 碧 章子 朱夏 准一 菜摘 和子 当代 絹子 美枝子 幹子 保州 房子 力 淑子 半德 蘭幸 敬子

逝くときも一緒になんて欲なこと
爆笑の食卓囲み朝を出す
在りし日の母と語って泣き笑う
笑っても笑わぬ人の居る不安
ありがとう母の笑顔に癒される
理が邪魔し笑うところで笑えない
百歳の笑顔に自負の満ち満ちて
十一面観音像の深い笑み
枕元絵本を重ね寝てくれぬ
立ち読みのおこから先は買って読む
本一冊宇宙遊泳する魂
句集読む時々虫の音も聞いて
人生の我が一冊よ蟬しぐれ
道しるべ手垢のついた本を読む
亡父の本金巻持って娘は帰る
小夜ふけてひっそり咲いた消えました
着メロが寂しい私知ってる
何しよーるんうすべて気になる好奇心
ほっこりと小さな庭に花が咲く

川柳クラブわたの花大坂

西川義明報

老人会口は達者な人はかり
あと少しやとと終るとママの夏
魔がさしてふと始まったマジの恋
励ましより優しさ欲しい八十路坂
見る位置を変えると見えてくる光

静風 厚子 慶子 規代 万年 汎美 弘子 民恵 輝恵 一路 幸子 笑子 千代美 比呂子 栄恵 太虚 栄香 史子 千枝 浩三 孝子 和子 ますみ はじむ

鳩カラー選ぶネクタイ金糸入り

いきいきと元気の素は好奇心

茶柱立つて日和の朝のいい予感

薬より効き目があると落語聴く

せめて髪染めて老いへと立ち向う

百歳の強気元気の源に

庶民の希望叶え世なおし願います

安らぎは父母に感謝の幕掃除

老い二人先と尾に分けサンマ焼く

名月が障子に映す萩芒

あの様子証握握っている強気

小麦色はちきれそうな健康美

私欲捨てやれば出来ますマニフェスト

滝のしぶき虹を渡っていく花野

年と共に強気のころ角が取れ

百代の過客が僕を追連れに

弥陀の火を借りて煩惱焼きはらう

松露川柳会(鳥取)

小西 雄々報

コーヒーで友と楽しく話こむ

コーヒーを前に二人で夢かたる

コーヒーで済みそうでない友にあらう

ひと仕事終えコーヒーの旨いこと

美容院ネオンで稼ぐ顔作る

整髪の香りただよう町を行く

髪形を変えても同じ女だった

たえ子

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

愛子

宏至

義明

いつみ

宏

正春

妙子

俊子

晴美

一風

自家用の散髪鋏錆びてきた

吉日へ髪整えて秋日和

ルンルンとショートカットで町歩く

散髪のとこの頂が美しい

その昔母のバリカン痛かった

川柳塔鹿野みか月(鳥取 福西 茶子報)

針のない竿で釣っている人の情

女医さんに五臓六腑を握られる

川柳の輪に集い今張りがある

臆病な手相握ったままでいる

百歳の自慢の金歯スルメ噛む

衰えの進む頭に辞書握る

わたくしの命握っている主治医

ケンガイの菊にもあつた努力賞

苦勞した後に楽しみひとつ増え

喜寿近くしあわせがまだ握れない

無料化と言うさくららのマニフェスト

拳骨をぐっと握って時を待つ

菊人形何を考えているのだろう

大よりも小菊が似合う顔となる

さらさらと人目惹かせる紛い物

恰好の逃げ場に菊の鉢を置く

くされ緑汗いっぱいの手を握る

握りやの人でも棺には五円

さらさらの海がさよなら言い出せぬ

智恵子

和代

弘子

静江

雄々

茶子報

彩子

孔美子

房子

盛桜

茶子

(四) 和子

くに子

実満

螢

弘子

重忠

和枝

久枝

蟹郎

忠良

八重

菊乃

美恵子

佳句地十選 (11月号から)

山田 耕治

新盆のあなた見て下さい浴衣

縁のない証拠に電話つながらぬ

ひまわりの笑顔に負けぬよう生きる

幸せの絵にあなただけ足りません

仏壇と親の介護を押しつける

コスモスをヒロインにした秋の風

セリに出す牛にビールと言う別れ

中年をあつと言う間に通り過ぎ

善人の隣であくび噛み殺す

美しく老いる話は耳痛い

婆さんも姉さんかぶりして掃除

僕の家ばかり集まる秋の蠅

生き残る兄弟集う法事膳

終章はきんきらきんで旅に出る

母の愚痴握った拳より怖い

水平線キラキラ月の涙かも

古稀に喜寿そして天寿の勢揃い

若者の集うところに闇がある

集っては焼きまくっているピエロ

握っても手から零れるあぶく銭

手を握り合って楽しい暇づくり

愛大もおにぎりもらいお供する

真理子

菜々子

孝子

貴代子

一花

蕉子

哲男

歳子

くにこ

日の出

睦子

完司

照彦

はるお

満

みさ子

諷人

かおる

富久江

美代子

汲香

みどり

寄り集いチヨイ悪話よくはずむ
さらさらと風に乗りたい終の章
弱いけど心を込めた握り飯
集まった中にスパイが一人いる

(徳)節子
(野)節子
(若)和子
かつみ

ローズ川柳会(兵庫)

山崎

君子報

買うてもと言われた苦労しましたか
軽口にも磨きがかかり絶好調
磨かれた窓へ感謝の陽が沈む
一列の廊下磨きも幻に
靴磨き健気に生きて居た孤兒よ
苦労した分だけ輝いて見える
夕焼けの海へ苦労はブウと吐く

年代
哲子
貴代子
藍
みつ子
義子

川柳塔唐津佐賀

仁部

四郎報

大正は口に出せぬが首ったけ
謹呈の翻訳本はピカソ論
まだともう使い分けつつ行く八十路
留守電の友の計報の急き込んで
妻の愛話め込んでいる太鼓腹
披露宴お開きまでの標準語
母子手帳もらって帰る嬉しい日

勝視
實
晴翠
四郎
蜂朗
輝夫
高明

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目

一粋報

清貧が誇り裏金用が無い
花嫁の父とつときの涙出す

洋々
公弘

献金の行方センサーつけておく
サンプルを貰って泥の舟に乗る
母さんは我慢強く力持ち
とつときの思い出君と見た夕陽
稼がなくなった男に用は無い
サンプルは見ても買うほど銭がない
献金疑惑うまくかわして席に就き
とつときの独り娘が売れ残り
サンプルを選ってるうちにもう不惑
献金へしっかり紐がつけてある
見返りの無い献金は出来ません
とつときの知恵を出し切り生きてやる
九条に用がないとは言わせない
苦虫の親父とつとき笑顔みせ
献金に下心聞く腹話術
献金を渡した人が落ちちゃった
献金の額で子供が職を得た
用がないあつさり首を切っている
いい加減な人にはだれも用がない
サンプルの通り作ってほめられる
人生にサンプルあればなと思う
献金を請求されて破綻した
自らが献金地獄首しめる
献金があるから秘書がいるのです
物産展サンプルだけが減っていく
用なしの父ちゃんだけよく食べる

美恵子
一瑤
一京
美雪
圭一郎
清信
由美子
妻子
金祥
無限
秋月
志げ緒
穀
孝男
節子
虎尾
茂登子
春名
菊花
善夫
房江
蟹郎
益子
稔
信子
武彦

新薬のサンプルだとは医者言わず
サンプルを食べ歩いては腹満たず
サンプルはとてもうまそうウインドー
達筆にしばし見とれる師の手紙
サンプルが本物よりも旨そうだ
生き字引言われた過去はエエかげん
献金の代わりに頭脳持つてゆく

西宮北口川柳会(兵庫)

黒田

能子報

母さんの傘を飛び出す反抗期
心境を悟られぬよう眼鏡拭く
いい夢を見たくて眼鏡かけて寝る
百均のめがねあちこち置いておく
お眼鏡が狂っていたか離婚する
インテリに見せるために眼鏡かけ
僕に似て骨が折れてる傘ばかり
童顔が嫌で掛けるサングラス
雲の傘月がにんまり顔を出す
百均の傘の安さがゴミとなり
子が出来て知った大きな母の傘
番傘にでっかく書いた宿の傘
紫外線溜まった日傘曇む秋
勢いが余った拳句の勇み足
どん底を見たか勢い違ってくる
青汁を飲んで勢い呼んでくる
勢いの残ると見たよ眼の力

はつ江
昌鼓
雅女
清帆
秀四
行男
一粋
光久
美籠
直
光子
千代
基輔
祐康
りこ
順子
浩司
キヨミ
萬的
比ろ志
いたる
一兆
孝一
弘子

勢いに乗ればこわい一本氣
酔うほどに音痴勢いよく歌う

加齢ですかなり便利なセリフです

牛歩でもかなりの坂を越えました

嘘だけはかなり聞き分けできる歳

惜しまれて辞めたとかなり辛い嘘

野に在ってかなり研鑽つんでいる

離陸する孫の助走を見守ろう

人間は良い有りがとうめんが言える

恥ひとつ今日もかしこくなりました

川幅が広くて助走くり返す

書いてないけどあるんですアンコール

心配を二倍に返す子の笑顔

相席になつて気付いた目尻シワ

病む友が笑つて句集読んでいる

正気やと言う奴かなり酔っている

思いつき笑うと数も薄くなる

いい笑顔かなり苦勞はしたらしい

川柳塔みちのく(青森 小寺 花肇報)

華やかな昔を秘めている指輪

くどくどよりたつた一言愛してる

志功より孫の彫る鬼恐々と

くどくどと言われて草は引き抜かれ

膨らんだ紙風船に期待する

言い訳にメガネ掛けたり外したり

茂 穀

緑

玲子

忠

美代子

富喜子

哲男

わこ

章子

嘉代子

二英

哲夫

正和

歳子

朋月

求芽

哲子

華々しい過去を持つてるダンボール

告白は傘の雫を振つてから

華やかな陰にたたんだ夜の顔

就中かまがわおどりの華やかさ

弁解が長すぎました回顧録

立ち直る母のひと言ありがたう

坂の道手を貸した縁共白髪

ダイケアの誕生会で蝶になる

しつこくて赤とんぼから叱られる

父となる決意をくれた呱呱の声

竹林を抜けるときつと青い海

寂しさを偽装で包む水中花

華やかな過去を自負するホームレス

くどくどと弁解はせぬおじぎ草

結末が出ない躁病の椅子一つ

八尾市民川柳会(大阪 富西 弥生報)

百歳の命ラストを踊り切る

もろもろに染まりたくない黒を着る

大地の恵み豊かに熟れて神無月

独身といえはやさしくなる男

人生の谷間で磨くはんまもん

独身寮にお局さんが一人いる

放浪の友あり風を連れて来る

フラダンス習う八十路の健康法

先生の熱くすすすへ飛ぶチョーク

美鈴

芳生

一呑

順風

銀波

ふさふ

花匠

井蛙

黙人

岳水

花峯

慕情

一花

五楽庵

秋子

寿鶴

耀一

あかり

いわお

草風

留里恵

柳伸

欣之

酒らしてはならぬオバマのノーベル賞

奥様くすすすおばはんはゲラゲラ

パソコンとわたくしふたり暮しです

命ある限りひとりの灯に生きる

踊りの輪二人が消える宵祭り

開催へ歓喜がはじけて飛ぶサンバ

スイッチを胸のあたりに抱くおんな

百年の歴史と踊る鬼瓦

川柳ささやま(兵庫 遠山 可住報)

遅かった踊らされたと気付くのが

抜いとくれベース変えない亀でいる

足早のつもりがいつも追い抜かれ

ゆつくりは出来ぬ迷路を抜け出そう

妻の座にぬくぬくとして終身刑

残照へラストチャンスを待つている

六十の手習いワルツ軽やかで

ぬくぬくと荒波知らず育ちゆく

クラス中ぬき出た友をなつかしむ

ぬくぬくのご飯笑顔が寄つて来る

見栄ばかり並べなかなか抜かぬ太刀

名も知らぬ花が私の足止める

ふるさとはみんな達者か遠花火

東大阪川柳同好会 宮崎シマ子報

川登る鮭がもつてる血の絆

敏子

紀雄

いさお

扶美代

一風

浩三

賢子

朝子

弥生

純子

美緒子

二英

美紗子

啓子

多美子

開子

照代

かほる

幸子

美智子

哲男

可住

登りつめ座り心地の悪い椅子

アフガンの不幸な子等のメタボ腹

臨月の女を思いやるメタボ

国債のメタボを削る総選挙

冤罪が晴れて人生振り出しに

誤解またひとつの愛をぶちこわす

誤解解く鍵は笑顔が握ってる

友が去るたつたひとつの誤解から

引き際へ男の美学試される

天引きの多さに給与うなだれる

引くのはボク妻の口には敵わない

幕を引く係りで罵声浴びている

波引いて寄せてゆっくり生きている

取引きのうまい男の二枚舌

薄紅を引き始めての車椅子

大皿の料理へ箸が乱舞する

威厳知る一品多い父の皿

もてなしのロイヤルブルーに身構える

川柳らくだの会(鳥取) 岸本

宏章報

通知表あけてびっくり五がならぶ

猪に案山子も負ける米作り

朝刊をびっくり箱のよう開く

農作貧乏うれし農家の謙遜語

コンビニのお袋の味中国製

ひざ枕さよなら言わず逝った夫

賢子

太一

あや子

克己

風子

雅文

秀夫

美弥子

八郎

かね子

シマ子

湖風

三重子

朝子

和子

美子

高尚

穩夫

年金を削って寺の寄付をする

にんげんに熊もびっくりするだろう

一〇〇歳の母の特技は袋編み

米余りいつになったら死語になる

びっくり水脳にカンフル注射する

いずも川柳会(鳥根)

佐藤

治代報

並んだら競争心が目を覚ます

この地球元を造った宇宙神

手のひらに書くわたくしのメモ用紙

朝起きは元氣な証しと祖母は言う

汗の跡しつかと染みた元の地図

並びつつ同じ話題で登る坂

メモが言う昔の事は忘れない

元の巣に戻って安堵する燕

足元に光を照らす講和聞く

壊された地球元には戻れない

元元は好きでなかった人の妻

古代の灯絶やすまいぞと風煽る

五欲盛んでお金ちつとも貯らない

ふる里に火種残して母が逝く

元氣ですもう一花を咲かせます

歯並びはわるいが自前の八〇二〇

口ほどに貯めぬ男のたくましき

一期一会並ぶ広間の宿浴衣

走り書きのメモにはんが書いてある

紀子

宏章

仁子

孝子

大鯰

桂子

嘉寿恵

健柳

キミエ

龍石

徳子

妙

美千代

祐次

美江子

治代

弘子

喜子

敬子

茂美

ちえ

孝亮

房子

寿美

どこへ行くにも家内の後に並ぶ

人並と言う物差しがむつかしい

酔う程に次元の低い愚痴も出る

鳩尾に残したメモのひとり言

貯めるのは貴方で使うのは僕だ

ゴミ箱の底で不安なメモ用紙

ふる里の匂いを残す茶の香り

ああ総理民の貯金は底をつく

残されぬよう後から付いていく

貯めた金人のお墓を作ってる

メモ一枚大きなドラマ出来上る

メモ帳にひとりうなずく予定書く

貯って捨て捨て貯つたゴミの山

開き直るとメモもおんなもおそろしい

メモがくる男おとこのおつきあい

残すもの失うものもない暮らし

川柳塔おつばこ吟社(香川) 川崎ひかり報

鉄拳を受けた昭和も遠くなり

鉄筋に住んで人情薄れゆく

不審者に鉄火の如く捲くし立て

鉄人の善意優しい車椅子

過疎の村鉄砲水でまた被害

鉄筋も入れて耐震強化する

鉄分が不足朝から低気圧

見栄張った細身の服がほつれ出す

ひろし

多喜

昌枝

佳子

佐吉

たえこ

まこと

美佐子

歌子

蘭水

玲子

房緒

文子

章峰

きみえ

ちかし

賢

八重子

放任

弘

いさむ

あきら

ひかり

はつ恵

長 柳 会 大 阪

村上 直樹報

川柳花の輪(大阪)

妻谷 重風報

人を喰うくせにねずみに大騒ぎ
食いしん坊秋だけでなく一年中
子に厳し孫には甘い私です
美人には男はみんな甘すぎる
親離れ今も出来ない甘ったれ
微酔が甘い囁き真に受けて
芋煮すはかほか湯気に母の顔
女医さんに見惚れて脈が早くなる
義理捨てて甘いマスクの方をとる
ときめきが鼓動となって初デート
少しずつその気にさせる老い支度
結局は妻が主役と思ひ知る
甘党の夫に妻は大ジョッキ
知事さんも役者と思ふ時もある
生涯を大根役者で逝った父
母さんはだまされ上手な役者です
おっぱいの夢だな孫の甘い口
噛みしめて酸いも甘いも知る夫婦
近頃は猿の仕掛けのない雨戸
甘いからいゝなとこへ錆がつく
里帰り待った母のうずら豆
くやしいが妻はわが家の立役者
生き残りかけて熾烈な舞台裏
少子化にひと塩足りぬ子供達

直 樹
も こ
靖 子
よしお
たけし
武 男
エ ミ
正 博
敬 二
英 美
光 弘
一 慧
けい子
正 子
和 代
マ サ
淳 司
三和子
靖 博
孝 代
正 一
芳 野
和 子
正 美

言い訳はデコにじわじわ汗が湧く
じわじわと氷山溶けていく恐怖
看板が身のり出してる街の中
歳とらぬ看板娘が胸に棲む
店先で君と目が合い飼う事に
犬と猫家族会議で決めました
庭で飼う虫とひとりの秋の月
腹腔に不逞の石を飼う不安
出て行かぬ嫉妬の鬼を飼っている
川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

善 栄
克 衛
芽田暮
一 幸
風
やすの
ミヨノ
重 風
音 成
克 子
よしこ
寿 子
翠 子
めぐみ
英 子
俣 子
富美子
泰 女
利 治
よりこ
ほのか
三 男

脱皮する命いとおし第二章
華やいだ一日を脱ぐ貸衣装
少女羽化こころの鎧脱いでゆく
靴脱いで乗って下さぬ新車です
落ちかけたボタン氣にして乗り過す
ボタン付けそして始まるラブゲーム
ポケットに落ちたボタンのひとりこと
忘れがちなボタンの一人ぼち
リセットボタン押すには歳が邪魔をする
立ち直るボタンは胸の中にある
カラフルなボタンのようなくすり飲む
潮騒が聞こえる貝がらのボタン
裏側にスベアボタンを付けてある
腹を凹ませばボタンは掛かるけど
川柳塔なら 坊農 柳弘報

和 香
輝 子
徑 子
美 子
謙
裕 美
真里子
紀 子
登美代
稚 代
保 州
小 雪
大 輪
隆 之
彰 治
浩 二
満 作
比呂志
千 梢
勝 弘
萌 子
のりこ
博 一

忍の字を渡し息子を世に送る

ビリオドを打つと古傷痛みだす

ビリオドはフリー台本無い余生

ビリオドが打てずに妻と五十年

正面へ大上段の心意気

ちちんぷいママのお面に有る魔法

ビリオドに浮雲一つ足して秋

世間並みの暮らして回る換気扇

世間がどう言おうと私は私

面影を捜し合つてゐるクラス会

初対面真の笑顔が通じ合う

ひしひしと虚しさ終り告げてから

私だけ探してほしいかくれんぼ

泣くことはもう止めました三回忌

面接の視線は的を外さない

合鍵が効かなくなつて恋終る

うごんの箸探し疲れて指で割る

夕焼けの頃に世間が見えてくる

優しさに触れると落ちる鬼の面

ビリオドが出発点となる新たな

サイコロの面から戦始発する

疲れたな何を探していたんやろ

美しいビリオド雪になつてくる

孤独死に気づかなかつた俗世間

永かつた介護終つた日の虚ろ

郁夫

集一

一風

弘風

修

章久

柳弘

寿美

憲子

富子

ふりこ

理恵

とし子

洋子

隆盛

順啓

完次

良一

國治

朝子

次郎

真理子

道子

美十子

恭昌

岸和田川柳会(大阪)

土橋

房枝報

食い気だけ誰にも負けぬ更年期

食欲を満たせばどんな欲も消え

秋近く食欲増えて妻苦労

着るものがついていけない食べ盛り

恋風が僕の食欲奪い去る

ビフテキも匂いで済ます歳になる

食欲だけ色気さっぱりない娘

原価切るチラシを持つて行列へ

原価割れですと言つても儲けてる

そのうちに空気に原価ついてくる

湧き水に原価は無いが五ツ星

人間もこねて踏まれて強くなる

土だんこ捏ねる子供のつぶらな目

苦も楽も混ぜてこねてる母の味

その前にとこねて正論腰を折る

屁理屈をこねて淋しい一人酒

さまざまな経験糧に今がある

さまざまな野武士を乗せて鳩出船

さまざまな懸念呼んでるマニフェスト

さまざまな笑いの種がある社会

さまざまな思いが過る終戦日

さまざまな先人の知恵今も生き

さまざまな願い半目で聞く菩薩

夢ほどにジャンボとゆかぬ五等賞

香代

俊昭

呂万

隆昭

珠子

東吉

清

植代

寿海

ゆい

仁緑

泰弘

柳風

力子

蛙城

一歩

玄也

笑司

淳風

若芽

和美

はるえ

柳昌

洋

子ら集いジャンボを競う雪だるま

遼君をジャンボ尾崎が見上げてる

夢はジャンボ世界の核もゼロにする

逃がした魚ジャンボだったと手を広げ

ジャンボ機の腹を見ている鯨日和

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

灯火へ静かにほほえむ水中花

天地人すべて愛して逝つた母

朝晩のほほに感じる四季ごよみ

一服のお茶をたのしみ友がくる

決算はどこ吹く風と空財布

おちかづきをときつかけてくる酒の席

ともし火が消えて寂しい里の家

ピンチとも言わず赤紙一枚で

評判にしがみついている蝸牛

南大阪川柳会 吉川 寿美報

柴鍊のペンはニヒルな剣士生む

アメリカに一步も引かぬ白洲次郎

焼酎にニヒルの仮面剥がされる

あの人の噂をそつと知らせる

手こずらぬように逝きたい最後の日

そつと見て自力引き出す介護の目

そつとした目隠しの手の暖かさ

後からそつと目隠し人違い

幸子

浅子

ダン吉

房枝

義泰

はるみ

好栄

恵美子

聖子

ちよえ

伸子

かつ子

博利

清泉

克己

ルイ子

昌紀

太郎

ばつは

タカ子

集一

滋郎

もう二度と浮ぶことない自民党

沈んでも沈まなくても揉めるダム

軽口の底に沈めておく妬心

憎い人そつと触つて逃げはった

リーマンのパンチでダウンしたまんま

不摂生ボディーブローが効いてくる

母からのパンチは深い愛があり

国民の凄いのパンチがお灸すえ

児の寝顔そつとついで見たくなる

帰る際そつと握らず里の母

和の基礎は心遣いと思いやる

女手で支え続けた屋台骨

下積みで叩きこまれたこの自信

ウチに基礎妻デンと居て皆元氣

子育ても母から基礎を受継いで

千年の仁王支えた基礎の土

代々の基礎守つてる鬼瓦

とつときの話に軽石が沈む

パンチ力あるプロボーズに心揺れ

地車衆パンチはじける男伊達

パンチより母は涙で勝負する

張手なら許されている大相撲

当てにした基礎年金がままならぬ

反抗期パンチのきいた自己主張

100歳の寝息をそつと確める

和雄

直子

恵太郎

楓 楽

弘 風

尚 士

清

更 紗

勝 弘

なぎさ

栄 子

忠 昭

寿 美

修

章 久

弘 泰

たもつ

志華子

柳 弘

弘 子

叡 子

一 歩

東 吉

祥 昭

千 梢

柳 伸

産み月の丸いお腹をそつとなで

高知川柳社

小川てるみ報

土佐弁を囁す鳴子へ街が燃え

土佐発信北の大地で鳴子舞う

無年金大きなミスが隙が入り

一番のミスはあなたと添うたこと

七光だけで消せないミスもある

一生の不覚に妻の大軒

ミスのない候補選びをしなければ

アプローチのミスで壊れた砂の城

ミス少しあつて人気が出る教師

判定のミスが行く道二分する

マークシート一段ずれて泣いたミス

失敗を繋いで明日の糧とする

凡ミスで良かった胸を撫で下ろす

水不足で泣き洪水でまた嘆く

水臭い事は言うなと無二の友

蛇口発いまは何処や水の旅

自販機の水はアルプスから届く

水注せば逆に燃えたつ口喧嘩

川柳塔きやらぼく鳥取 大塚

鏡の中に亡母そっくりの老婆住む

しまい風呂鈴虫も入り長湯する

佗しげに尾花がなびく秋の風

百合子

正 躬

千恵子

京 子

千 鳥

ふ き

美 々

哲 史

三 郎

典 雄

幸 子

三千世

健

てるみ

房 恵

みどり

忠

勢 子

千 鶴

恵子報

紫 泉

ふ み

恵 子

最後尾マラソン選手に拍手あり

蟬の声聞く事もなく秋の空

ざくざくと貝塚をふむ歴史ふむ

全魂を投げて球児の暑い夏

仏さまがゆするか芒野がゆれる

コスモスも私も風と戯れる

定運がそろい毎日お茶の会

ジイジイとミンミン党の化し合い

ユーモアがわからぬほろり泣けてくる

船を漕いで夏の青春日本海

初恋を打ち明けられた喜寿の会

石一つ水の流れを変えてくる

終の屋根維持をするのが難しい

勝ち過ぎて先が見えない総選挙

秋がきた手の平ほどの裏庭に

石投げた堀の深さを計つてた

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

奥の手を出さずに済んで物足りぬ

この手には百の悪事が刻まれて

手のひらに過去と未来を握りしめ

神さまの手かと思えば枯れススキ

転ぶたび何かを掴む大きな手

手をつくし愛情こめた菊人形

リモコンも電話も手元独り住む

病床の労りせめて手を摩る

初 枝

春 枝

ゆ き

富美子

亜 弥

麗

未延子

寿々子

てい子

瑞 枝

な み

晶 子

千 代

章 江

蘭

雪 江

清 帆

幸 安

螢

完 司

茶 子

重 忠

節 子

た ぬ

ありがとうグメンネ両手合わす癖
手の平の感情線が枝わかれ

再会に両手抜けて抱きしめる

くつきりと生命線が弧を描く

風待ちの港の女性は働き手

縄電車乗ってくるのは風ばかり

逆風も工夫次第で船進む

賛成で無いが釣られて手を叩く

わたくしの死ぬる予想はまだ立てぬ

霧が深くて予想なかなか掴めない

予想家は見て来たような嘘上手

予想だが卒業くらいはいけるかも

スベアーになって二人は強くなる

百均で買った老眼鏡の予備

スベアーの選手ベンチを温める

どこまでもあなたを守るスベアー

久し振りに皺くちやの手がはなさない

はたる川柳同好会大版 水野

月芽えて金波銀波にツーショット

柿ピーがドラマ観ていて空になる

春型と冬型ふたり結婚に

輝いてた日もありました認知症

日常を型にはめてるインシユリン

輝いた鶴まるマーク尾羽枯れる

煩悩を消せずうつとりメロドラマ

幸枝

よしえ

公子

和子

蟹郎

忠良

圭一郎

和枝

はるお

一瑠

孝男

稔

菖子

幸子

かつみ

雅女

美恵子

黒兎報

柳童

宇乃子

勇治

蛭柳

契子

祥風

長一

お守りに大型マスク買つておく

輝く目きつと心も燃えている

生き方に型は決めない自然流

嫁はんの輝く笑みはベツト用

型破り最澄空海握手する

輝いて老いを生きると空鉄砲

瞳きらきらの子もエンゼルの化身

かぐやから輝く地球核の影

同性が見てもうつとらしい姿勢

ひまなか美人のおかみに口説かれる

仏説が我が身を責める過去の罪

城北川柳会大版

伊達 郁夫報

筋通すまでは惜しまぬ底力

ブランドに伍してユニクロ力つけ

まだ青いもみじに心癒やされて

ホテル着き温泉に入りはつとする

おしゃれして心は貴男の傍にいる

空高く深呼吸して秋さがす

紅葉にちと早いけど青もよし

運動会過去が数数跳り出す

昨日今日トイレで力む二日分

娘より息子の方がおしゃれです

十五夜をもみじ天ぶらあてに飲む

おしゃれもいいねそれぞれの秋訪ねましょ

若かった強かった日よ滝しぶき

春代

雪子

桂子

幹治

信男

勝

久子

黒兎

禮子

いさむ

長一

求芽

叡子

美智子

美代子

静枝

知恵子

あさ子

容子

とし子

倫子

勝弘

麗

典子

元氣だと力を過信した不覚

カタカナの並ぶサブリのかしましき

テロリストには抑止力効きまへん

キリストのおしゃれはきつとヒゲだろう

相田みつを読んで心のおしゃれする

森林浴命と気力享受する

厚化粧心のおしゃれ置いたまま

秋彩のおしゃれを見せるウインドウ

さりげなく秋の茶花が活けてある

紅さしているが私も元は猿

吟行の主役青い空

三回忌過ぎておしゃれにならなかつた

守るべき人が居るから湧く力

伸びる芽に恩師はそつと朱を入れる

清貧の心におしゃれ忘れない

転ぶたび力を付けてくる若さ

しなやかな力でボクの骨を抜く

燃える日をまたかまたかと待つともじ

納棺師最後に薄き紅を引き

告白を期待しながら滝の道

飾らない言葉で箕面食べている

実力があるからいつも目が笑う

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

角が取れ丸くなる頃迎えが

要領よく丸く治めた次男坊

ルイ子

東吉

正

野鶴

一步

満作

弘風

志華子

恵子

じゅんこ

修

集一

賢子

たもつ

昭

満洲夫

富子

朝子

順三

理恵

柳弘

郁夫

清

睦子

わだかまり水に流して丸く生き
 丸書いてチョン人の人生こんなもん
 優しさに触れて昔が燃え始め
 触るなど書いてあるもの触りたい
 古傷に触れてはならぬ老夫婦
 触れた手にそつと想いを走らせる
 古亭主使い慣れしてワンタツツ
 握手した家元の手は冷たくて
 葬列の開始知らせる触れの鐘
 お姉ちゃん出来たて弟そつと触れ
 立派さは心の窓で探してあて
 立派だと言えぬ庭にも四季の花
 母校に立つ立派になった卒業生
 熟年の花を立派に咲かせたね
 学歴はないが立派な腕がある
 オバマ氏に核なき世界平和賞
 我が家では犬も立派なメタボです
 花嫁さん立派に化けてゴールイン
 立派だなばーちゃんプリをすぐ捌く
 バラク・オバマずつと立派でいてほしい
 商いの苦楽をともにした机
 昇格で机の広さ倍になり
 騒音に机たいたいて黙らせる
 リンゴ箱消しゴムのかす取れぬまま
 机には哲学をする顔で着く
 経机お経が読めるようになり

勝 惠 三津子 たかこ 龍 枝 和 枝 扶美子 いさお 克 枝 照 彦 道 子 孝 惠 和 子 たけ代 貴 惠 富 惠 久芽代 公 惠 楨 元 善 江 完 司 重 忠 滋 美代子 紀美恵 玲 坊 螢

秋日和机を蹴つてきのこ取り
 ちっばけな机私の宇宙基地
 行きづまり机の位置を変えてみる
 富 柳 会(大區) 古田 千華報
 酒で湿らせて難問を解く
 割箸を上手に使うボヘミアン
 現実を夢で割つてマニフェスト
 花吹雪まだ表札にいる亡夫
 命より金に執着する亡者
 執念かも知れぬ嫉妬かも知れぬ
 執着と意地が一つの発火点
 真つ二ツに割れた夫婦の長い雨季
 懐の温さへ割れた硬い殻
 夏暖簾割れて祭りの笛太鼓
 真つすぐに割つて真つすぐ突つ走る
 割り切つた積りでいたがまだ未練
 生き方を変えずに生きる頑固者
 この坂を越えればきつと青い海
 花火師に火の粉を避ける傘はない
 読経ききながら空白を埋める
 大差でも花火一発沸くベンチ
 太陽と月に求愛されている
 プトマト赤くなるのは愛ですか
 火を点ける人ふところで待つ花火
 孫は来てよし住んでよし洗髪

石花菜 芳 光 節 子 欣 之 七 朗 昌 成 ア キ 鐘 造 扶美代 登 子 紅紫朗 佳 子 伸 雄 千 惠 壽 峰 札 未 知 惠 彦 次 武 人 奏 子 高 鷲 澄 子 深 雪

一つずつ魂込めている花火
 日食の冬の星座に亡母探す
 参道を喋り続けた母の下駄
 人間不信用意の鏡くもり出す
 骨休め心休めと蟬しぐれ
 スタミナをつけて階段駆け昇る
 川柳若葉の会(大區) 宮崎シマ子報
 スイッチオン再出発の秋日和
 スタンドのスイッチ消さず寝てしまふ
 スイッチオン風呂もご飯も出来あがる
 スイッチが壊れるように物忘れ
 スイッチを秋に入れると鍋料理
 欲の皮脱ぐとかわいいおばあちゃん
 サプリメントたべた結果を脱いで見せ
 断家の佳境に入るや脱ぐ羽織
 脱いだり着たり秋の気配は忙しい
 松並木戻り静かな救急車

よしみ 寿 之 鬼 焼 信 子 森 子 千 華 加津子 慶 子 ますみ 烈 シマ子 弘 直 香 住 洋 子 能 子 喜美子 堅 坊 美 義 啓 生 庸 佑 輝 佐和子

豊中もくせい川柳会(大區) 藤井 則彦報

古希を期に人生模様織り上げる

知つていそうな人を選んで道を聞く
梵鐘の澄んだ音色で京の宿

80円の切手魂乗せている

酌み交わすうちに真が見えてくる

名将の目立つばやきが惜しまれる

澄みわたる秋の夜空に聴くシヨパン

村祭りほどよい距離で転入者

澄んだ瞳の難民の子に痛む胸

建前と取り残された曲り角

あれこれとためすクスリにためされる

目立たない端っこ僕の指定席

芋さんま食べて財布に無理はない

二の腕がすすきが原になつてゐる

法話聞き澄んだ心で団子貰う

真剣に生きてきたのに実がならぬ

模様替えのたびに狭まる僕の城

真実を見通している青い空

満月だメロンパンでも買うてきて

雨後晴れ心模様は虹の色

真つ当な人生だった味気なさ

ぼつくりと死ぬるのは2%だけ

窓の灯が家族模様を映し出す

幼な子の澄んだ瞳の好奇心

まだ青い真理を追求するリンゴ

秀麗な富士の姿に心澄み

孫結婚私の結婚より嬉し

千恵子

きらり

巴子

則彦

佳恵

十八娘

葉子

都代子

早人

満寿巳

啓子

満子

美智代

寅次郎

千枝子

勇治

宇乃子

見清

義

幸雀

玲子

求芽

千代

寿美子

川柳さんだ(兵庫)

北野 哲男報

日は西にロストボールは戻らない
ゴルフとは縁が切れずに素振りする
足早に歩くキャディは歳が上
リカバリしショット上手に世を渡る
芝生読みコロコロカラン血が踊る
健康のため言い訳のゴルフ好き
凝り性がわが庭つぶし芝生張り
芝刈機五年もすれば邪魔になる
運動場芝生にすれば楽しかる
留守がちの隣の芝生気にかかる
芝に寝てちぎれ雲追う秋日和
節穴があるので覗いて見たくなり
たいくつの一時しのぎに入る穴
次世代が静かに育つ蟻の穴
紅葉狩り穴場探して老い二人
それぞれの穴場は人に語らない
持ち歩くメモと鉛筆好奇心
いつもより遠回りする菊日和
走るよりのろい歩みが性に合う
人生は重荷背負つて登る坂
歩きます余生ゆっくり楽しんで
てくてくと歩いて出会う四季の貌
夫偲ぶ秋の夜長のちちろ虫
宝くじ当って離婚延期する

菜々子
歳子
一兆
耕治
美代子
美紗子
一良
正和
能子
一泉
里江
朋月
忠
哲子
雅司
婦美子
光久
美籠
裕康
忍人
キヨミ
順子
一子
好文

真実は握り拳の中にあり

天高しわたしも軽く翔んでいる

初恋は波がさらって行つたきり

仏にも鬼にも変わる人の謎

妻は教会僕はお寺にするつもり

エンピツは川柳のため買っている

胆石で苦しめた石手の平に

ロケットにハート教えて見て貰う

天下取る手相の男尻に敷く

川柳塔まつえ吟社島根 三島 滄丘報

大物も恋には弱い彼岸花
大物は片隅の恩忘れな
大物が童話の森へ夢を売る
大物は必ず糸を切つて逃げ
大物は校長だけの同期生
前列のど真ん中にある大物
束になつても正論だけにかかわない
束ねてる古い手紙は黙秘権
稲を刈る束の重さに年を知る
束の間の逢瀬を雨が邪魔をする
家族の和丸く束ねる母の知恵
朝顔の蔓を束ねて秋を呼ぶ
舞い上がる心いさめる秋の風
舞うように生きて後悔残さない
陽の子です陽気に舞つて生かされて

見
いわゑ
みつ子
孝一
靖鬼
二英
裕美
宣子
哲男
町紅
畔
紫晃
たけし
スズコ
寿代
桂子
薫
和歌子
玲子
ちえこ
治代
知恵子
柳歩
日出子

奇数さへ割れる政治の裏舞台

蝶が舞う目で追いかけて共に舞う

舞い過ぎてとうとう尻尾踏まれてる

心配が笑いに変わる快復期

大笑いしてさつと去ぬ秋の月

茶柱にひとりほは笑み靴を履く

また明日ビールの泡が笑うとき

ハイチーズ言われてすぐに笑えない

ころころと笑う人には従っていく

ナツメロを聞いて想い出抱き寄せる

百歳がこはお国を口ずさむ

ナツメロを耳にひとりの夜を愛す

星影のワルツ踊ってさようなら

クーニヤンと二人で歌う支那の夜

ナツメロの中に昭和の忘れ物

尼崎尾浜川柳会兵庫 田原 一兆報

言い訳の隙間をあける親心

古都の旅転勤になり夢叶う

おしやれして脳もふくらむ同窓会

ただ今の一言妻も生き返る

十二時にお腹の虫ももの申す

オーイお茶自分で飲めと倦怠期

一言でよかつたのにと披露宴

安らかにサヨナラ言える日を祈る

台風は去ったが風鈴まだ元氣

英子

政子

蘭水

長吉

昌枝

注湖

幸子

禮子

美知子

静恵

蘭

房子

螢

茂美

浜丘

一兆報

一兆

(石)きよみ

茂幸

よしひさ

あかり

江美

野薫

亀与子

イサミ

一言がとかしてくれたわだかまり

名月を誰が取ったか出てくれぬ

頼る子へ息災祈る百度石

運動会少年の日が甦る

エリートに夢見た息子まだ二一ト

ひと言が味方となつて息をつく

神さまが両の手くれた折るため

限りある命を惜しむ秋の虫

この不況己の値段知らされる

ひと言がこらえ切れずに銀となる

女なら誰も読みたい歳のサバ

ひと言が過ぎて二人の無言劇

信心はないが都合で拝む神

清濁を併せて飲んだメタボ腹

暮れなすむ秋は二人で吟醸酒

病みひとつ信心深くさせている

心配がいらいらになる午前さま

ひと言を足して二で割る嫁が来た

十二時に起きて何かをするでなし

バイキング痩せる話は忘れよう

秋を盛る松茸が見当らぬ

信心の一円玉が落ちる音

川柳茶ばしら愛知 板山まみ子報

ぴつたりと合わすつもりはない家計
一瞬の感動スゴイ宝物

政江

勝巳

奮水

比ろ志

五月

里江

孝一

雪菜

彰

耕治

由美子

かずお

朋月

靖鬼

美代子

菜々子

キヨミ

美義

祐康

哲男

紀乃

求芽

美千代

幸子

再可動今朝は氣負いの赤い靴

通販のカタログだけで買う勇氣

少時お待ち下さいと三時間

カタログですませる生と死のお札

氣を楽にがんばれ言わぬ思いやり

トラブルを丸くおさめる年の功

六甲川柳会兵庫 伊勢田 毅報

四季の詩浮かべわたしの長い川

生きてきたこの顔私らしい顔

ピーヒャララ聞くと案山子も血が騒ぐ

祭り来る孫の笑顔が主人公

笛太鼓派遣社員が主役です

過疎の村一人五役の文化祭

ピーヒャララ子らが未来を曳いている

一心にこころへ未来像を彫る

共に生き彫り込まれてく今日の幸

歳月をゆるり彫り込む三面鏡

自画像の生きさま彫む深い皺

親不孝五百羅漢に亡父探す

一刀に魂込める兄の技

ふる里に兄と彫んだ背くらべ

円空の未完に見える完成度

実印を彫ってもらって盾に取る

子供等が柱に彫つた置き土産

念をこめ一心不乱に彫る羅漢

かつ子

百合江

廻行

ゆみ子

雅美

まみ子

毅報

いわゑ

みつ子

和郎

洋一

政一

茂

千賀子

光久

孝子

美恵子

武彦

盛夫

(山)弘子

悦子

浩司

武臣

勤

礼甫

石けんに大好きですと彫つてみる
 雑念が自然に生きる邪魔をする
 老いの身に地球の自転早すぎる
 暗い道自然と足が速くなる
 街角に自然が残る赤とんぼ
 夢食べて食べて一本杉になる
 猫に小判私もダイヤよりごはん
 一票に託して国のかたち決め
 好きな人五男と聞いてゴールイン
 磨り減ったハンコの溝に己が貌
 まだ恋をしそう口笛吹いている
 書きかけの日記ばったり友が近く
 ベテランの脇が主役のネジを巻く
 青春の踊りは春のワルツから
 シャッターが増えて人情尖る街

はびきの市民柳会大徳徳山みつこ報

順子 義行 寛子 利子 基輔 無限 美穂 忠貞 弘子 春香 勝 毅 能子 楓楽 六 点 庸 佑 美 喜 一 知 久仁子 ヨシ枝 扶美代 みつこ

好きなだけ遊びなさいと叱られる
 叱るより誉めてのばすも一つの手
 宇宙から地球の汚れ叱る声
 もう一度叱ってほしい花手桶
 ユニークな手法で天才芽を伸ばす
 ユニークな企画でものを作り出す
 ユニークな帽子もらつてかぶれない
 ユニークな機能シルバー使えない
 ユニークな家住む人思う散歩道
 仲間から距離を置かれる風変わり
 ユニークな衣裳で案山子田を守る

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

一 壺 正 子 りつえ 泰 子 狹 沓 フジ アヤ子 章 司 喜久子 ちづる いさお 和 子 康 子 けいこ 節 子 賀寿恵 風 露 和 枝 秋 草 泰 輔 石花菜 重 忠 萩 江

重要も十人十色この世界
 重要な参考人だ泳がせる
 瓶の蓋外せる男必需品
 重要なメモした紙をまた忘れ
 重要なことなど何もない会議
 原爆の悲惨しつかり伝えよう
 重要なポストと言われお茶を汲む
 シヤイな人お酒を借りてよく喋る
 話好き聞きて上手がいて受ける
 慶びの話を倍にする他人
 難聴でもないしよ話がよく聞こえ
 何事も話せばわかる話し合い
 週三日孫との会話に花が咲き
 また同じ老母の話を聞いている
 手短かに話すと金に縁が無い
 ドンヒヤラ祭りがアホになリたまえ
 阿呆になつて歌つて踊る文化祭
 神主も祭りばやしも軽トラで
 国民はあとの祭りで踊らされ
 浦安の舞いで鈴振る少女の日
 七福神乗せて祭りの舟を漕ぐ
 骨折し動けなくても世は動く

日出子 喜美子 いさお 美栄子 瑞子 よしえ 悠子 龍枝 祐子 睦子 由紀子 貞子 英子 鬼一 かつみ 完司 螢 美津恵 次男 醉美蓉 美代子 照彦 川柳大阪 長井 善純報 喜楽

逆らわず風に吹かれてベダル踏む
反抗期横目で逆らつて意思表示
逆風も素直に動く風見鶏

逆らいの真ん中辺にあるやる気
子の笑顔鬼でもこれに逆らえぬ
車内化粧などは無かったその昔
若者もいずれば昔は良かったと
なつかしい話するのは歳ですか
昔ゴミ今は資源という宝

昔の事あくびされても話してこ
昭和史の夢をつないでまだ燃える
経験が勝利の女神招き寄せ

成功の経験よりも失敗談
経験がないのにあの人ようしゃべる
戦争の恐ろしくて引き継ぎで

山を知る男は山の恐ろしき
もう二度と経験したくない戦
忘れ物とおきにだけ持って行き
給付金何度でも受けて立ちます

御先祖様家族見守りとおきにな
おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

おおきにの笑顔が見たいじい
とおきにと笑顔で返したい善意

翠洋会大坂

安土 理恵報

弘子 志華子

花笑 かよこ

五月 柳弘

章久 東吉

勝弘 美花

川童 和

信醉 鉄心

一步 照月

珠生 一風

善明 功雄

とし坊 善純

司 善純

善純

善純

五欲まだ燃えているのに枯れ始め
煩惱を残し生き甲斐はずませる
みどり児の無欲な瞳見て飽きず

放物線の尻尾になっていく五欲
パノラマの夜景酔つて観覧車
ホンコンの夜景まなうらに残り

不景気も夜景を見れば忘れてる
故郷の星空百万ドル以上
星一つ流れ夜景に味を添え

天国に近い部屋から見る夜景
今日も無事街の夜景も恙無し
原爆ドーム平和を誓い鳩が飛ぶ

ナイターの醍醐味ドームより甲子園
真夜中のドームを借りて草野球
CTスキャン不安と共にドーム入り

ドームふたつ乙女の胸はよく弾む
俺お前飾る言葉はいらぬ酒
ホカロンが落ちましたよと昼電車

紅葉の街路樹伐られ泣いている
時止めて花野で遊ぶ母という
雑草の可憐な花は引き抜けぬ

独りよがり楽しくあればそれもよい
我が家でも不要不急は取りやめる
秋日和布団干し終え空仰ぐ

欠席と書いて秋刀魚を裏返す
娘の帰省彩り添える秋祭り

欠席と書いて秋刀魚を裏返す
娘の帰省彩り添える秋祭り

欠席と書いて秋刀魚を裏返す
娘の帰省彩り添える秋祭り

欠席と書いて秋刀魚を裏返す
娘の帰省彩り添える秋祭り

欠席と書いて秋刀魚を裏返す
娘の帰省彩り添える秋祭り

浩二 昭

みつ子 理恵

舞夢 千梢

日の出 れんげ

捷也 桃花

すみ子 知之

満作 尚士

蕉子 楓楽

正雄 千歩

げんえい 富子

照子 水昇

茶々 叡子

恭昌 義

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

健やかな笑顔はじける優勝旗
思うまま生きる幸福ありがとう
秋風に背中押されて歩き出し

運動会年をさば読み参加する
先送りしないで検診いってよね
危ないと思わなかった肥後守

温かい思いに割れた鬼の面
アート展触つて見てはポーズ取る
終戦日少年兵は帰らない

喧嘩して尾っぽ巻いてるうちの猫
季節回つてあなたも老いて私も老いた
京都塔の会 都倉 求芽報

ゆう然とあいつ抜きでイスに着き
夕明かりあなたの背のいろは唄
勇気出し愛着を断つ因習と

夕食の味に自信の市場かこ
どんくさいわたし時間と競争
結局は妻のおかげと今思う

やつと手にした内定が取り消され
働き抜きやつと手にしたマイホーム
結局は犬と仲よく住む老後

やつと来た拍手に自信取り戻す
回り道やつとあなたの胸に着く

回り道やつとあなたの胸に着く

回り道やつとあなたの胸に着く

回り道やつとあなたの胸に着く

回り道やつとあなたの胸に着く

すみえ 登美枝

多美子 礼子

宏之 公一

ふみ 欣子

正二 雪江

未延子

昇 知栄

求芽 葉子

ふりこ ますお

庸佑 綾子

篤子 典子

由美子

やつとですやつと娘が嫁ぎます
 胎動に目覚めてやつとローヒール
 ケアハウスでやつと見つけたキュービット
 やつと来る秋はどこかで立ち話
 やつと頂上うまい空気とにぎり飯
 青みかんやつと葉がひとつ減る
 欠点が消えると影が薄くなる
 人情に欠ける男の手を放す
 出世する予定ページが欠けている
 この不況気力に欠けているカラス
 欠けた心温める一行詩
 丁寧な所作に辟易するいのち
 丁寧に育てています高い犬
 丁寧語止そう貴様と俺の仲
 丁寧に雑草抜くと猫がくる
 美辞麗句度を越しすぎて鈍くなる
 丁寧な言葉夫は怒ってる
 無造作に生けてもセンス決まる花
 今日の運丁寧にむく茹で卵

川柳ねがわ(大塚) 籠島

かずお 美義 公子 輝美 満子 としこ 比ろ志 朝子 牛延 則彦 宏子 欣之 福子 肇 啓子 文代 益子 孝一 昌乃 恵子報 頂留子 庸佑 寿男 薫 ただよし

泣くもんか追い風きつときてくれる
 やられたらやると力を溜めておく
 禁断の木の実がおいでおいでする
 いぶされてあたふた尻尾出る帳簿
 転んでも走れとカメラ回す父
 濁流に土手からうじてたえている
 物忘れ悩み多くて夜長秋
 金木犀香りで誘う地味な花
 ぬくもりを添えて新聞配られる
 火葬場の煙に揺れる生死観
 度胸決め落ちるとこまで落ちてみる
 へそくりが隠した場所にないスリル
 煙たいが月給くれるよい社長
 あわや落ちそうなところで夢覚める
 もくもくと煙エコには遠い町
 腑に落ちる言葉がなくて腑に落ちぬ
 スイッチを妻に押されて動きだす
 ゴキブリとスポーツしている蠅叩き
 風鈴を終い忘れて秋わびし
 軽いスリルで緊張感を目覚めさす
 外人に占領された大相撲
 夢語るひとの紫煙を追っていた
 地に落ちた男支えるこの辛さ
 どっち向いても危ない橋がかかっている
 話したい時に話せる相手居る
 青臭い夢を捨て切れないスリル

洋 修 仁清 寿子 郁夫 中央 尚世 さち子 三郎 鈍甲 一風 榮二 かすみ 茜 祥昭 銀杏 弘一 とし子 あさ子 美智子 博泉 じゅんこ 秀雄 亜成 賢子 恵子

色鉛筆

麻生路郎

時計が一つある時には私達はその時計
 のさし示す時間に対して比較的信頼感
 を持つが、時計が二つあって、一つの時
 計が八時五分前を示し、一つの時計が八
 時五分過ぎを示している時には何れが正
 確であるか、何れも不正確なのか判断に迷
 い、結局どちらの時計にも信をおかぬ結
 果となり易いものである。

ある作家が同一の句を二人の選者に批
 評を乞うた場合、一人の選者は佳句であ
 ると云い、他の一人の選者の場合は凡句
 であると云うた時、うぬぼれの強い作家
 は一も二もなく佳句といわれた方に賛意
 を表するであろうが、一般の作家は果た
 して佳句か凡句かに戸惑いするに違いな
 い。

要は信頼感のもてるたった一つの時計
 を持つように、たった一人の選者を選ぶ
 ことである。

川柳雑誌(昭和三年六月号より)

2010(平成22)年 第16回川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔通巻1,000号 記念大会ご案内(予告)

1924(大正13)年に『川柳雑誌』の創刊以来、来る2010(平成22)年9月号を以て『川柳塔』は通巻1000号となります。

麻生路郎師の教えの元に全国の川柳同好の士が86年を費やして打ち立てたこの金字塔を、皆様方と盛大にお祝いしたいと思います。詳しいことは改めてお知らせしますが、とりあえず2010(平成22)年10月9日を予定に入れておいて下さいますようお願い申し上げます。

《 記 》

と き 平成22年10月9日(土) 午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテルアウィーナ大阪 4F 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441

おはなし 「題未定」 『上方芸能』発行人 木津川 計氏

兼 題 「虫」 川柳展望社 天根夢草選

「深い」 時の川柳社 平山繁夫選

「渡る」 ふあうすと川柳社 赤井花城選

「車輪」 番傘川柳本社 森中恵美子選

「スピーチ」 川柳噴煙吟社 田口麦彦選

「価値」 柳都川柳社 大野風柳選

事前投句 「千」 川柳塔社 河内天笑選

記念品呈 「路郎読本(仮称)」・「河内天笑川柳句集」

川 柳 塔 社

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201

電話 06-6779-3490

柳界展望

○兵庫県川柳祭の事前投句の部の表彰者が10月6日に決定。同人の受賞者。

歩を妻に合わせ花の名聞いてみる 横山捷也

生き下手に空はほつこり笑いかけ 山本義子

少年に宇宙を歩く夢がある 堀 正和

大空と天衣無縫に響き合う 大石あすなろ

○10月12日、葛飾区民文化祭川柳大会の同人の天位。

幕間に子役と遊ぶ三枚目 播本充子

厳重なチェック ロイヤル席へ着く 播本充子

○名古屋市民文芸祭にて同人の60周年記念受賞賞。

ひまわりになりたい介護資格取る 播本充子

○10月18日、第59回岸和田市民川柳大会が開催された。同人の天位。

だんらん父母も祖父母もいた昭和 山岡富美子
百歳の情熱ハグをしてくれる 三宅保州

酔の抜けたおとこで魔法かけやすい 古久保和子

生きざまをリアルに映すコンバクト 木本夏

○10月25日、西日本川柳大会が岡山県で開催された。同人の特選。

母はふる里悲しきまでに美しく 池 森子

ふるさとの水が流れている背骨 新家完司

二人しかいない二人で輪になろう 新家完司

第一部 二位 西出楓楽

五位 岩崎公誠

第二部 一位 新家完司

○11月3日、「春はくろほこ」第10回記念川柳大会が鳥取市で開催された。同人の受賞は次の通り。

優秀作品賞 父さんのみんな知ってる 武勇伝

秀句賞 山岡富美子

ナースから名前呼ばれた 矢倉五月

旧姓に戻り輝きだす女 西出楓楽
献金という裏門は開けてある 武田帆雀

みかんむく指が色めく少女羽化 大石あすなろ

ざらざらの肌にクリーム落ち着かず 植田一京

タツチミーそれから恋に堕ちました 河内月子

火達磨になった禁猟区のタツチ 山岡富美子

自分を洗い直して昏迷を抜ける 河内天笑

七が三つ並んだ旅の果て 小島蘭幸

なりすな記念賞(総合成績) 第一位 河内天笑

第二位 河川無限

▽同人動向△

○文芸アート誌「華音K A NON」17号(11月発行)に、「孤独力」の作者・津田和壽澄氏と奥田みつ子相談役との、川柳について交わした往復書簡が、二回に亘って掲載された。

○10月25日、西日本川柳大会へ出席の為、西出楓楽理事、板尾岳人、奥田みつ

子、前たもつ相談役他31名が岡山行。(兼、川柳塔すみよし吟行)

○11月1日、「春はくろほこ」第10回記念大会に出席の為、河内天笑主幹、西出楓楽理事長、小島蘭幸副主幹、河内月子副理事長他13人が鳥取行。

▼計 報▲

●南原正和氏(同人、大東市)は9月11日、82歳で逝去された。(遺句抄87頁)

●八田敏氏(同人、さいたま市)は、9月28日逝去された。(遺句抄87頁)

▽出 版△

○播本充子さん(理事、八

身近な「怒り」の川柳コンクール

公共正義の立場から感じるいきどおり、身の回りの出来事に対する明るい怒りを川柳にしてください。

締 切 り 22年1月31日
審査委員長 木津川 計
投句用絵馬 1枚400円(切手付)

2枚セット600円(一枚は切手付)
大賞一句 (10万円と賞品)他賞多数
発 表 22年3月14日

(HP・入賞者は本人直接)
お問い合わせ (主催)

〒678-0329 赤穂市加里屋68-9
赤穂商工会議所内
TEL 0791-43-2727

王子市)は小冊子「丘の上川柳句集」を発行した。朝日ヶ丘長友会会員12名の作品を収録。A5版16頁。

▽新誌友紹介△

鳥取県 石岡せつ子

紹介者 盛田 夢路

常任理事会 10月26日出席

反省 ①85周年記念大会の

②21年度担当業務分担

③新任理事懇談会開催④代

表者役員拡大会議開催

常任理事会 11月6日出席

14名。①代表者役員拡大会

議②川柳塔まつり会計報告

③新任理事担当業務④定例

確認事項⑤同人一名承認。

探さないで

ずうと

ずうーと

隠れんぼ

岳人

喪中につき

来たる年の新年のご挨拶を
御辞退申し上げます

皇紀二六六九年師走

590-0024 堺市堺区向陵中町

二四一三三五〇三

板尾 岳人

TEL 〇七二・二五七・四五六六

平成21年度業務分担

総務部	村上 玄也	黒田 能子	水野 黒兎
企画事業部	村上 直樹	古今堂蕉子	佐々木満作
編集部	穴吹 尚士	木本 朱夏	山口 光久
	山岡富美子	黒田 能子	
句会部	長浜 美籠	古今堂蕉子	居谷真理子
同人誌友部	鶴田 遠野	河内 月子	松原 寿子
渉外部	坊農 柳弘	河内 月子	
会計部	山口 光久	松原 寿子	鴨谷瑠美子
発送部	川端 一步	鴨谷瑠美子	
事務部	山岡富美子		

◎太字は部長

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
西宮北口 川 柳 会	14日(月) 午後1時開場 恥・味・くらくら・自由吟	西宮北口南自治会館 阪急西宮北口駅南出口 南西へ歩200m 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川 柳 さ ん だ	15日(火) 午後1時から 極・予約・ぐったり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸 和 田 川 柳 会	19日(土) 午後1時から 現実・こぼれる・更に シューマイ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
和 歌 山 三 川 柳 会	19日(土) 午後1時半締切 偽物・告げる・袋	和歌山商工会議所4F 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川 柳 藤 井 寺	20日(日) 午後2時締切 越す・ゆっくり	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日) 午後1時半締切 逆立ち・試合・順	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	20日(日) 午後2時締切 終る・ぎりぎり・棘・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
京 都 塔 の 会	21日(月) 午後2時締切 ぼろぼろ・書く・後悔	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	21日(月) 午後6時から 時効・いろいろ・打つ・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
豊 中 もくせい 川 柳 会	21日(月) 午後1時50分締切 育てる・長寿・じっくり 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
松 露 川 柳 会	21日(月) 午後7時半締切 年末・人柄・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	25日(金) 午前9時半から 急ぎ足・ボーナス・無惨 自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	26日(土) 午後7時締切 あいづ・菓子・残る・紙	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日) 午後2時締切 吹く・ラッキー・びたり・とら	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 塔 すみよし	12月休会	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	3日(木) 午後1時開場 賑やか・壁・伝統	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	5日(土) 午後1時開場 花道・忘れる・やれやれ	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	5日(土) 午後1時から 古・触れる・自由吟	富田林市中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0072 富田林市高辺台3-3-18-105 古田千華
倉吉 川柳会	5日(土) 午後2時締切 賞・ずれる・そうです	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	6日(日) 午後2時締切 終電・萌える・いよいよ・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
尼崎 川柳会	8日(火) 午後2時締切 他人・来年・手帳・自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 午後1時半締切 仏・嘆く・なんとなく	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
あかつき 川柳会	11日(金) 午後2時から ひととき・眼・呼吸・時事吟	創建本町ビル2F・大阪市民医療機関連合会 地下鉄「堺筋本町駅」⑨番出口 徒歩北へ3分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
堺川柳会	12日(土) 午後1時から 濃い・済む・「さゆり(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	12日(土) 午後1時から さっぱり・骨・未練	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後2時から 駅・夫婦・忘れる・がたがた	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 打吹	12日(土) 午後1時から 結・変化・追う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	12日(土) 午後5時締切 違・潜る・ぴったり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日) 午後1時開場 結ぶ・嫉妬・こっそり 日本の芸能	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
川柳 ふうもん 吟社	13日(日) 午前9時開場 没句川柳供養大会 (詳細は本誌10月号118頁)	鳥取駅南 新日本海新聞社5F 大ホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪

編集後記

☆鳩山総理は所信表明演説で、障害者をチャレンジドと呼ばれました。「試練に挑戦する人」という意味で、欧米では広く使われています。日本でも電車の優先席の英文表示では「フィジカリーチャレンジド」と表現されていますが、日本語表示では「身体の不自由な方」となっていて、挑戦の意味合いが消えています。

☆皆さんの川柳を読ませて頂いて、身体の疾患や膝や腰の不具合を宥めすかしながら、川柳に挑戦されている姿が目にもまぶしく浮んできます。正にフィジカリーチャレンジドです。

☆高齢になって川柳に親しむようになられた方にとっては、川柳は矢張りチャレンジなのでしょう。この方々はメンタルチャレンジド（心の挑戦者）と呼ぶのがふさわしいかろうと思いま

す。しかし残念ながら今「水煙抄」にチャレンジされていくのは、誌友の半分以下です。毎月自身の身のまわりを詠み、社会への想いを詠むことには、なかなか踏み切れないのでしょうか。☆誌友の皆さんに提案です。一度「水煙抄」にチャレンジして見ませんか。勇気を奮って八句を作ってみてください。先輩の同人の皆さん、メンタルチャレンジドの後輩を励まして頂けませんか。

(尚)

◇殺人などの重大な生命侵害犯の時効年数は現在25年になっている。公訴時効があるのは▽時の経過で証拠が散逸し起訴後の公判維持が困難▽被害者・社会の処罰感情の希薄化▽一定期間犯人が処罰されなかった事実の状態の尊重を理由としている。

◇一方でDNA鑑定の技術が格段に進歩した現在は一変した。現在、鑑定結果別

ひとこと

広がれ川柳の輪

JR高徳線三本松駅構内に十月から「川柳コーナー」が出来ました。我吟社「おっぱこ」の伊勢八重子さんが駅長さんと親交があり話が始まり実現しました。

三本松駅は徳島駅と高松駅の間にあり朝夕は三本松高校の学生でにぎわっています。かつて葉先生、薫風先生の句碑建立の式典及び記念大会では、葉先生御夫妻また鳥取から岡山からと多くの柳友をお迎え、お見送りした駅です。

あの時乗降された柳友の方は「ああ、あの駅か」と懐しく思い出されたかと思います。

私達は田舎の小さな川柳吟社ですが、川柳の輪を広げたいと思う気持は会員一同誰にも負けず持っています。その意味においても今回の事は何よりのチャンスと喜んで居ます。

田舎の古い駅舎の構内から私達の熱い思いが伝わり、川柳を始めで見ようと思う人が一人でも二人でも出て来たら、胸がワクワク致します。小さな輪が大輪となるように……
(川崎ひかり)

人で一致する可能性は4兆7000億人に一人といわれています。

◇足利事件で無期懲役刑が確定し服役していた菅家利和さんは獄中から十七年間無実を訴えていたが、DNA再鑑定の結果犯人のものとは一致しないことが判明した。足利事件は現在再審中である。

◇川柳界でもDNAという言葉が定着したかも。(光)

□新インフルエンザ、抜けれない不況、それに政権の交代という地殻変動が起きた年も、まもなく暮れる。
□早々とビル街を飾るイルミネーションに、気分を一新したいという切実な思いを垣間見る。
□85周年が終わるや、待ったなしで来年の千号記念大会へエンジンが掛かる。
□「毎日がちよっとしんどいぐらいが良い」とは、森

難うございました。(麗)
□投句するのも句会へ出るのも、気力体力に時間もお金も掛かる。しかしそこで一歩退くのと、出るとでは、暮らしの潤いが違ってくる。
□「どうかもっと多くの方が句会に投句に参加し誌面を盛り上げて頂けます、改めてお願い申し上げます。
□「本年も変らぬ」愛読、有

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)

地名

都府道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

紙 用 句 投 抄 様 檸

「打 算」 (1月15日締切)

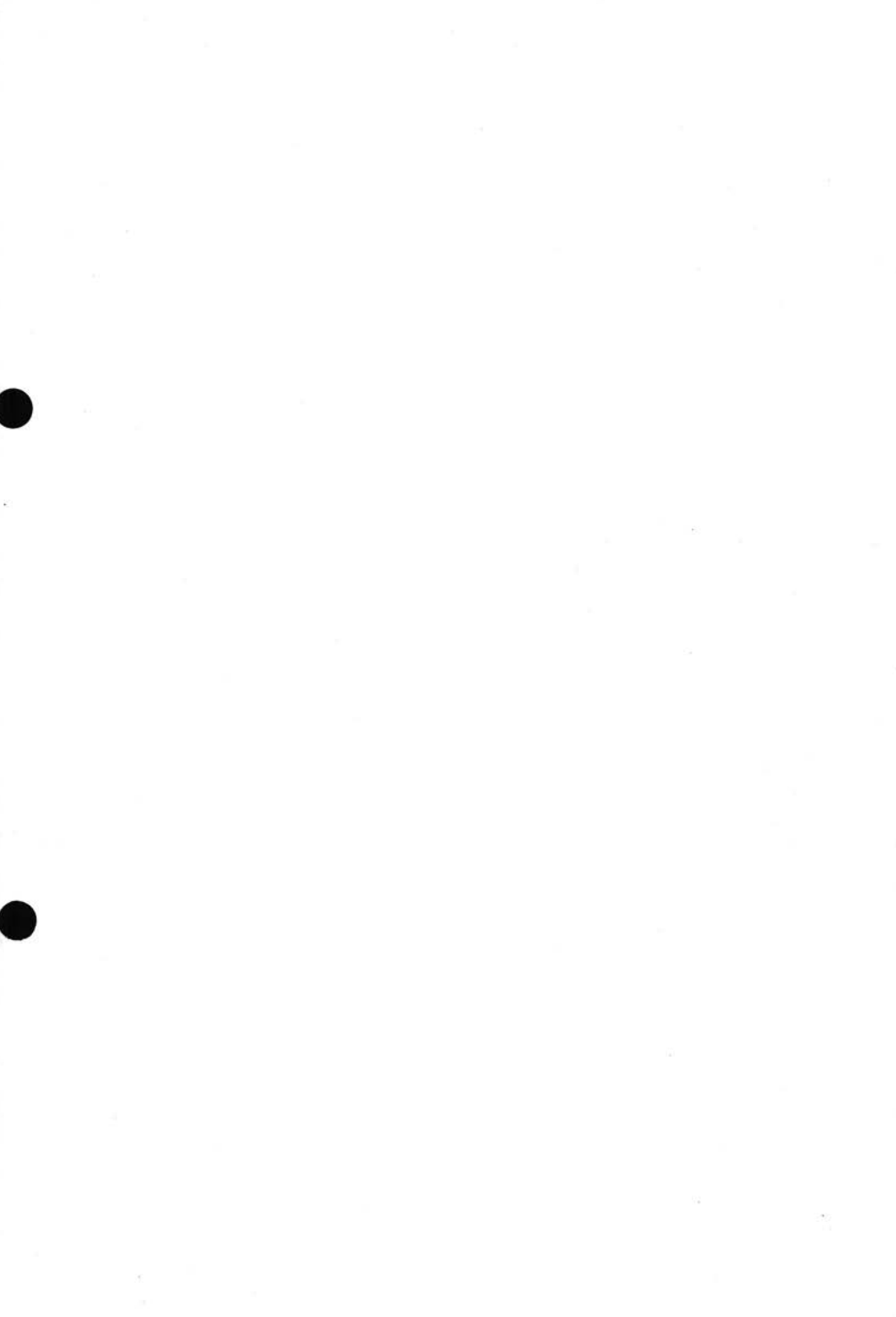
2月号発表

高田美代子 選 — 共選 — 牛尾 緑良 選

B		A	
地名 市都 県道府 姓 雅 号		地名 市都 県道府 姓 雅 号	

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室 (越える) (3句)

河内天笑選
川上大輪選
新家完司選
牛尾緑良共選
高田美代子選
藤村亜成選
福西茶子選
鈴木公弘選
鈴木公弘選

3月号
檸檬抄「耳」
一路集「親しい」「節約」「ベスト」
初歩教室「メール」

本社12月句会

とき 12月7日(月) 午後1時開場・2時締切り
開催時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「あれから37年」
兼題「幻」
席題「減る」「かたい」「追伸」「結論」
会費 1000円
投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

河内天笑選
長浜美穂選
都倉求芽選
米澤俣子選
安土理恵選
木本朱夏選
河内月子選

本社1月句会
7日(木) 午後1時から
兼題「ヒロイン」「咳」「どうぞ」「誇り」「縮む」

第28年度 夜市川柳募集

第7回「外す」中田明子選
ハガキに3句 12月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)・檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までお願いいたします。

定価 八百円 (送料76円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇〇九年(平成二十一年)十二月一日発行

発行人 河内天權治

編集人 穴吹尚士

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七番
口座 〇六〇六七九一三四九〇番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題

「ごま」川柳塔社主幹 河内天笑 選

・応募要領

郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

本紙4月号にて発表いたします。

・発表

2010年1月31日(当日消印有効)

・締切り

〒543-0052 大阪市天王寺区

〒543-0052 大阪市天王寺区
大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

手作りの味わいに

こだわって続けて五十余年

オニザキの

すりごま



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

・放射線科・ホスピス

・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)